

博士学位論文

日本語学習者による中止形接続の研究

—作文コーパスの調査を通じて—

令和2年3月

宮崎 聡子

岡山大学大学院
社会文化科学研究科

目次

第1章 序論

1. 本研究の目的	1
2. 現代日本語の中止形研究	3
2.1 中止形の形態論的位置づけと中止節の複文論的位置づけ	3
2.2 関係的意味の分類	7
2.3 二つの中止形をめぐって	10
2.4 静的述語の中止形	11
2.5 否定の中止形	13
3. 日本語教育における中止形の扱いと先行研究	14
3.1 事典、教科書、教師用参考書類の記述について	14
3.1.1 日本語教育事典	14
3.1.2 日本語教科書における扱い	15
3.1.2.1 初級レベル	15
3.1.2.2 中級レベル以降	16
3.1.3 教師用参考書類	17
3.1.4 誤用例データベースと誤用例辞典	19
3.2 日本語学習者による中止形接続の使用に関する先行研究	21
3.2.1 文章・談話における接続表現	21
3.2.2 関係的意味について	22
3.2.3 二つの中止形をめぐって	22
3.2.4 静的述語の中止形	23
3.2.5 否定の中止形	23
4. 本研究の位置づけ	24
5. 研究の方法	25
6. 本研究の構成	27

第2章 動詞による中止形接続について—関係的意味と形式の相関—

1. 本章の目的	29
2. 先行研究	29
3. 関係的意味の種類とその特徴	30
4. 調査	33
4.1 調査対象コーパスについて	33
4.2 調査方法	34
4.3 調査結果	34

4.3.1	概観	34
4.3.2	叙述文における使用状況	36
4.3.2.1	関係的意味別の使用状況	36
4.3.2.2	学習者に見られた不自然な用例について	40
4.3.2.3	動詞中止形のヴォイスとアスペクトについて	40
4.3.3	叙述以外のムードについて	43
5.	本章のまとめ	45

第3章 動詞による中止形接続について—タスクと形式の相関—

1.	本章の目的	47
2.	先行研究	47
3.	調査	49
3.1	調査概要	49
3.2	調査方法	50
3.3	調査結果	51
3.3.1	概観	51
3.3.2	どのタスクで第1中止形がより使われているか	54
3.3.3	読み手の親疎関係との相関について	56
3.3.4	読み手が不特定な場合について	57
3.3.5	学習者のレベルとの相関について	58
4.	本章のまとめ	63

第4章 動詞の否定中止形をめぐって

1.	本章の目的	65
2.	先行研究	65
3.	調査	67
3.1	調査概要	67
3.2	調査結果	68
3.2.1	概観	68
3.2.2	学習者のレベルとの相関について	68
3.2.3	関係的意味と形式との相関について	69
3.2.3.1	動詞の否定中止形と関係的意味	69
3.2.3.2	関係的意味別の使用状況	71
3.2.4	タスクの種類と形式との相関について	75
3.3.5	「なく中止形」の使用状況	78
4.	本章のまとめ	79

第5章 イ形容詞による中止形接続について

1. 本章の目的	81
2. 先行研究	81
3. 調査	82
3.1 調査概要	82
3.2 調査方法	83
3.3 調査結果	83
3.3.1 概観	83
3.3.2 関係的意味と形式の相関について	84
3.3.3 タスクの種類と形式の相関について	88
3.3.4 学習者に見られた不自然な用例について	91
4. 本章のまとめ	92

第6章 ナ形容詞・述語名詞による中止形接続について

1. 本章の目的	93
2. 先行研究	94
2.1 日本語学における研究	94
2.2 日本語教育における研究	94
3. 調査	95
3.1 調査概要	95
3.2 調査結果	97
3.2.1 概観	97
3.2.2 関係的意味からみた使用状況	98
3.2.3 作文タスクの特徴からみた使用状況	102
3.2.4 学習者のレベルと中止形の使用	104
3.2.5 学習者に見られた不自然な用例について	106
4. 本章のまとめ	107

第7章 結論

1. 本研究で明らかにしたこと	109
2. 今後の課題	111

本研究に使用した資料	113
------------	-----

参考文献	113
------	-----

第1章

序 論

1. 本研究の目的

本研究の目的は、日本語学習者が動詞・形容詞・述語名詞の中止形を接続表現として使用するときの特徴や傾向を明らかにすることである。中止形とは、動詞では「行き」「行って」、形容詞では「大きく」「大きくて」、述語名詞では「(彼は) 学生で」「(彼は) 学生であり」「(彼は) 学生であって」のような形をいう。中止形の中心的な機能は、文を中止することであり、前件と後件の間には、次の例文のようにさまざまな関係的意味が成立する。

- (1) a. 兄はジムに {行き／行って}、職場に向かった。(先行事態)
- b. 兄はジムに {行き／行って}、ダイエットに成功した。(原因)
- c. 兄はジムに {行き／行って}、弟は釣りに行った。(並列)

日本語記述文法研究会(2008)では、「テ形・連用形はそれ自体が持つ意味が希薄であり、その意味の解釈は、前後の事態や文脈に依存する。このような性質を持つために、テ形・連用形はさまざまな用法を持つ」(p. 280)としている。また高橋(1960)では、中止法の文は書き手にとっては働きが豊富で使いやすい一方、安易な使い方により、読みにくさやぎこちなさを引き起こす「悪文」になりうるとしている。たとえば、「××××は悪性感冒によく効き、肺炎を予防し、肺炎の場合も極めて短時日に症状をとりますから確実に安心できます。」(新聞広告)という文では、「予防し」にぎこちなさがあるとしている(p. 101)。

以上のように、中止形による接続は、積極的に関係的意味を表さないがゆえに、さまざまな解釈が生まれる。また文が長くなった場合に安易な接続形式として用いられ、読みにくさを助長するという面を持つ。このように日本語母語話者にとっても曖昧性が指摘される中止形接続を、日本語を外国語として学ぶ学習者はどのように使用しているのだろうか。果たして中止形は曖昧で無色のものなのだろうか。日本語教育の現場において、学習者が産出する文を観察する中で、そのような疑問を持ったのが本研究の動機である。

従来、日本語学において用言の中止形については、動詞を中心に多くの研究がなされてきた。近年になり、品詞の枠組みを超えた「時間的限定性」¹の観点による述語の研究が進み、それをきっかけに運動を表さない動詞や、形容詞、述語名詞といった静的述語の中止

¹ 工藤(2012: 157)では、「〈時間的限定性〉とは、すべての述語を捉えている意味・機能的カテゴリーで、偶発的(accidental)な一時的〈現象〉か、ポテンシャルな恒常的(permanent)な〈本質〉かのスケールの違いである」と定義している。

形の研究も現れるようになった。静的述語の中止形についての記述が進むことにより、中止形の表す関係的意味の全体像が明らかになってきたといえる。

日本語教育においても、日本語学での研究の成果を受け、中止形の用法は動詞を中心に上げられている。初級レベルにおいては、活用形のひとつとして「書いて」「行って」のようないわゆる「テ形」が指導項目となる。複雑な活用のルールを学ぶと同時に、上の例(1)にみるような先行事態、原因・理由、並列といった用法が、主に話し言葉のテキストの中で紹介される。

中上級レベルになると、読解教材や作文の書き方指導において、書き言葉の文体の特徴のひとつとして、「書き」「行き」のようないわゆる「連用形」が上げられる。学習者にとっては、受容・産出ともに使用頻度の高い文法形式ではあるが、複数の関係的意味を理解し、さらに話し言葉か、書き言葉かといった文体も考慮しながら適切に使わなければならないため、習得の難しいもののひとつだといえる

これまで、学習者による中止形接続に関する研究については、いわゆる「テ形」の使用に関する研究、「テ形」「連用形」の文体の違いによる使い分けに関する研究が中心に行われてきた。しかし、動詞・形容詞・述語名詞すべての中止形接続の使用状況について、日本語母語話者のデータを比較対象として、量的・質的に調査・分析した研究はまだ少ないといえる。

本研究では、金澤編(2014)の「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」(以下「YNU 書き言葉コーパス」とする)を資料とし、上級日本語学習者による動詞・形容詞・述語名詞の中止形接続の使用状況について、日本語母語話者と比較をしながら明らかにしたいと考える。分析の観点としては、中止形の形式・関係的意味・作文タスクの種類・学習者の習熟度によるグループ分けの4つを設け、形式の使い分けにはどのファクターがどのように関与しているのかを見る。観点の一つである「関係的意味」とは、「先行句節(の中止形の語)が後続句節(の述語)の表す事柄に対して、どのような意味を担っているか」(津留崎 2003b:151)をいう。

本研究で「中止形」と呼ぶものは、広く「テ形」「連用形」と言われているものである。研究者によって呼称が異なるため、整理をしておく次のようになる。

表1 中止形の呼称

研究の例	「行き」の形	「行って」の形
寺村秀夫(1981) 日本語記述文法研究会(2008)	連用形	テ形
三上章(1963)、益岡隆志(2014)	中立形	シテ形、テ形
仁田義雄(1995)	シ形	シテ形
言語学研究会(1989a, b)	第一なかどめ	第二なかどめ
高橋太郎ほか(2005)	第1中止形	第2中止形

本研究においては、原則として、文を中止するという機能を名にした高橋ほか(2005)

にならない、いわゆる「連用形」を「第1中止形」、「テ形」を「第2中止形」と呼ぶことにする。

2. 現代日本語の中止形研究

ここでは、中止形による接続について、これまで現代日本語学において明らかになっていることについて、4つの観点を立てて概観することとする。それらの観点とは、(1) 中止形の形態論的位置づけと中止節の複文論的な位置づけ、(2) 関係的意味の分類、(3) 二つの中止形をめぐって、(4) 静的述語の中止形、である。以下、順にみていく。

2.1 中止形の形態論的位置づけと中止節の複文論的位置づけ

ここでは、中止形が文法体系のなかでどのように位置づけられてきたか、代表的な研究者ごとにしておく。

まず、中止形という活用形の持つ機能、すなわち中止形は中止法というムードを表すことを明確に示している研究として、三上章(2002)²、高橋太郎ほか(2005)、寺村(1984, 1981)がある。

三上(2002)は、1959年に執筆された博士論文であるが、三上の文法体系を最もよく顕すとされているものである(益岡 2003:53)。動詞の活用表に「中立形」があり(表2)、ムウドの体系では「固有のムードを持たない」ものとして「中立法」がある(図1)。中立法は、終止法・条件法と並び、中心的なムードの一つとされている。

表2 動詞活用形 「強変化“飛ブ”」(三上 2002:21)

語幹	中立形	条件形	自立形	推量形	命令形
Tob	tobi	tobeba	tobu	tobo	tobe
Tond	tonde tondari	tondara	tonda	tondalo	

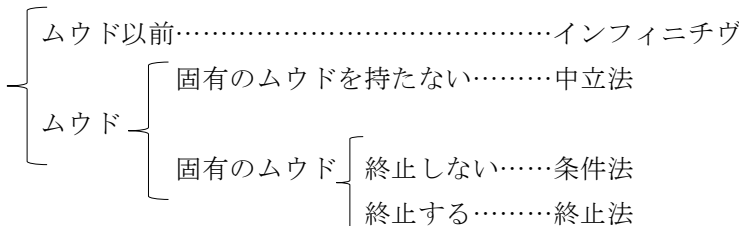


図1 ムウドの四段階(三上 2002: 87)

三上(1953)は単文と複文を区別はせず、活用形の陳述度を設定し、文の構造的な段階を次のように捉えている。

² 三上章が1959年に執筆し、東洋大学に提出した博士論文『構文の研究』を刊行したものである。

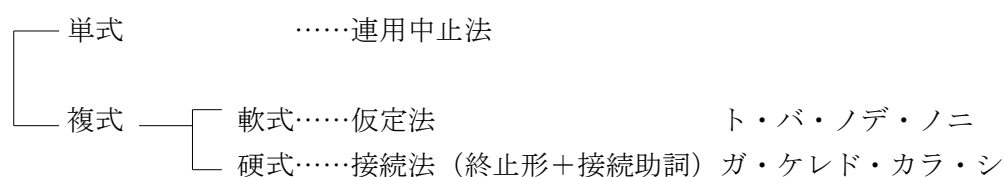


図 2 三上（1953）による分類（前田 2009：9 による）

つぎに、高橋ほか（2005）は「動詞の基本的な活用表」により、活用形・機能・ムードのパラダイムを提示している。ここでは、紙面の都合上、「ふつう体の形式」の「みとめ形式」の部分のみを表 3 として抜粋する。

表 3 動詞の基本的な活用表（高橋 2005：62）

（「ふつう体の形式」の「みとめ形式」のみ抜粋）

みとめかた				みとめ形式 (みとめ動詞)
機能	ムード	テンス		
終止形	のべたて形	断定形	非過去形	よむ
			過去形	よんだ
		推量形	非過去形	よむだろう
			過去形	よんだ (だろう)
	さそいかけ形			よもう
	命令形			よめ
連体形			非過去	よむ
			過去形	よんだ
中止形	第1 なかどめ			よみ
	第2 なかどめ			よんで
	ならべたて形			よんだり
条件形	(バ条件形)			よめば
	(ナラ条件形)			よむなら
	(タラ条件形)			よんだら
	(ト条件形)			よむと
譲歩形	(テモ譲歩形)			よんでも
	(タッテ譲歩形)			よんだって

高橋は、「日本語の動詞の持つ機能のカテゴリーは、文中でのはたらきという統語論的な性格が、単語の語形という形態論的な性格にもおよんでいる」とし、中止形（なかどめ）は、文を途中で止めるときの語形であるとしている（p. 63）。そして、動詞が中止形になった場合、述語の性格を失わないものから、述語性を徐々に失うもの（「トラックを運転して

北九州に行った」)、副詞(「黙して」など)、さらに後置詞(「(就職に) ついて」など)へと段階的に移行するとしている。また、単文と複文の見取り図は、図3のように表される。ひとえ文とあわせ文の間に、ふたまた述語文を設定しているのが特徴的である。テ形、連用中止は「かさね文(重文)」の中に挙げられているが、ふたまた述語文の例としても「わたしは あす、かれにあい、これをわたします。」「かれは、あの山をこえて、ここにやってきた」という文が挙げられている。下線は筆者による。

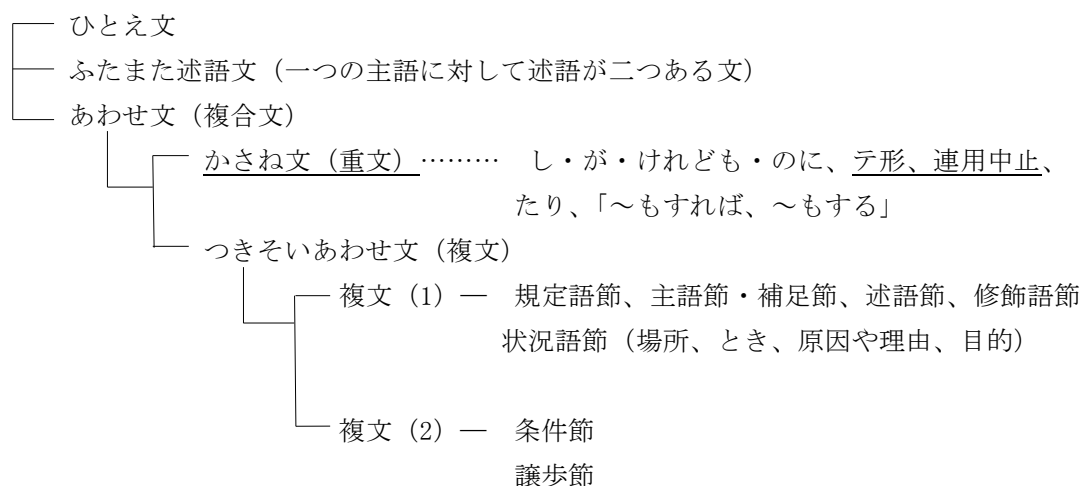


図3 高橋ほか(2005)(前田 2009 : 13 による図式化を一部改変)

なお、高橋(1983)では、「中止形がさまざまな機能をもちうるのは、中止形が中止ということ以外には無機能だからだといつかんがえがあるかもしれないが、これらの機能が文の構造のなかでやきつけられているのだということはたいせつである」という重要な指摘をしている。

寺村(1984)は、活用形とムードの種類を図4のように図式化し、連用形・テ形・タリ形を「ムードを保留し、後の文のムードにゆだねる」としている。

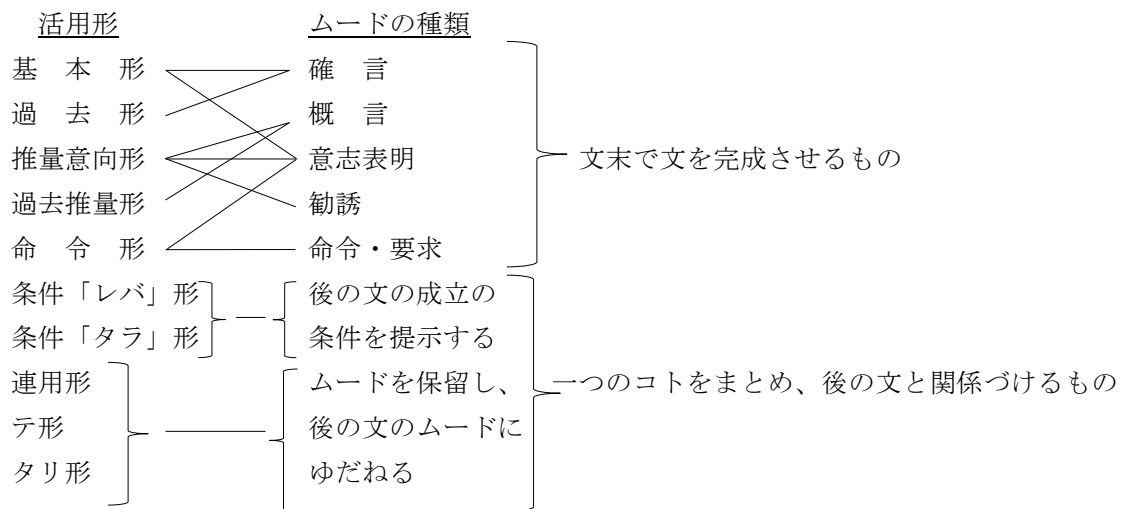


図4 活用形とムードの種類（寺村 1984 : 61）

また、寺村は複文を認め、次のような体系を図式化している。下線は筆者による。

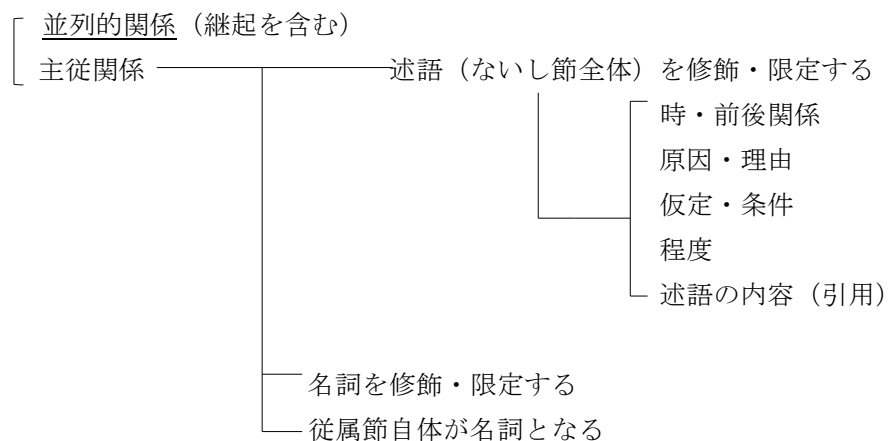


図5 節と節との意味的關係（寺村 1981:19）

以上、活用形の機能とムードを示した研究をみた。

次にみるのは、複文体系の中で、節と節の關係を示している研究である。代表的な益岡・田窪（1992）、前田（2009）において、中止節がどこに位置付けられているか確認しておく。

益岡・田窪による複文の見取り図は、図6のように表すことができ、網羅的・体系的に分類されていることがわかる。下線は筆者による。



図6 単文と複文（益岡・田窪 1992 : 4-5 をもとに図式化）

「並列節」の「順接的並列」のうち、「総記」に連用形・テ形がある。またテ形は、「原因・理由」「付帯状況・様態」といった副詞節の中にも表れるとされる。

最後に前田（2009）を紹介する。前田は、複文を「連体節」と「連用節」に分ける。



図7 複文の分類（前田 2009 : 239）

前田（2009）は、条件文、原因・理由文、逆条件文、逆原因文といった副詞節を中心に扱ったものであり、連用中止はここでは議論されていない。しかし、難しい問題として、連用中止や「て」形が、並列節としても副詞節としても用いられることを挙げている。

2.2 関係的意味の分類

関係的意味の分類を行ったものとして、南（1974）、言語学研究会（1989a）、仁田義雄（1995）、日本語記述文法研究会（2008）を取り上げる。

南（1964）は、従属節の統語的な側面を分類基準として、従属度の高いA類から従属度の低いD類まで4段階に分けている。テ形については、用法によって以下のように段階が異なることを示している。

- 〈テ 1〉A 類 動作のようす、しかた いわゆる状態副詞に似た意味「手ヲツナイデ歩ク」
 〈テ 2〉B 類 継起的または並列的な動作・状態「戸ヲバタント閉メテ出テ行ッテシマッタ」
 〈テ 3〉C 類 原因・理由「カゼヲヒイテヤスミマシタ」
 〈テ 4〉D 類 「A 社ハタブン今秋新機種ヲ発表スル予定デアリマシテ、B 社モ当然ナンラカ
 ノ対抗策ヲトルモノト思ワレマス」

言語学研究会（1989a）では、鈴木重幸の『日本語文法・形態論』にしたがい、「～シ」の形を〈第一なかどめ〉、「～シテ」の形を〈第二なかどめ〉と呼ぶ。伝統的な国語学では、これらふたつの形式を文体論的な違いにのみ求め、文法的な対立として捉えることをしていないことを批判し、「形がちがえば、意味がちがうという原則」（p. 14）にもとづきながら、多くの実例を収集し、先行句節の後続句節に対する関係的意味について詳細な分類と記述が行われている。そこでは、両者の基本を〈第一なかどめ〉は「非従属的」であり、「時間的な関係のなかにある、ふたつの動作・状態をならべる（並列の関係を表す）もの」、また〈第二なかどめ〉は「二つの動作・状態の間の複合的な従属の関係を表すもの」として捉えている。〈第二なかどめ〉の場合、その「関係」は以下のように多岐にわたる。

I 主要な動作と副次的な動作の複合

継起的な関係 「干した川魚をクシからぬいて、ムシヤムシヤ食べ始めた。」

同時的な関係 「指をおって、心当たりの娘をかぞえてみた。」

II 主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合

ふるまい状態—姿勢、服装 「一人で座って、紅茶を飲んでいた。」

「直樹のおばあさんも紋付をきて、やってきた。」

III 第二なかどめでさしだされる動作が主要な動作の特徴づけになっているばあい

a. 主要な動作のあり方あるいは様態を特徴付けている。ひとつの動作をことなる側面からとらえている 「ふと声をあげて、その一節をよみだした。」

b. 動作のし手の心理的な状態 「佐山は安心して、ウイスキーをのみました。」

c. 心理的な活動に同伴する表情やみぶり 「私は目をとじて、その情景を想像する。」

IV 第二なかどめの動詞が具体的な動作をさしだして、定形動詞がその動作を意義づけている 「子どもの世話をして、くらしした。」

以上のように大枠を設定した中で、《状態》、《ふるまい状態》、《姿勢》、《服装》、《原因結果》、《うらめ条件》、《方法》、《状況》、《時間＝状況》、《物＝空間》などの詳細な関係的意味が、実例とともに示されている。

仁田（1995）は、シテ形接続が表す多岐にわたる関係を組織づけながら記述したものである。①付帯状況、継起（②時間的継起、③起因的継起）、④並列という三類四種にまとめ、その概略を表 4 のように示している。また、中間的な例³もあげながら用法間の関係を詳細

³ 「付帯状況」の下位分類として、「し手容態」「心的状態」「し手動作」「付属状況」を挙げている。また、「起因的継起」には「目的的起因」「方法的起因」があるとしている。

に記述している。

表 4 三類四種の典型的な特徴（仁田 1995: 91）

タイプ		シテ節の表す意味	生起時関係	主体
付帯状態		主たる事象の実現の仕方	同時	同一
継起	時間的継起	時間的先行関係	継起	同一（（異種））
	起因的継起	起因的事象	継起	同一（異種）
並列		並立する事象	同時（（異時））	同一／異種

※「（（ ））」「（ ）」「／」はこの順に異主体の比率が高くなることを示す

それぞれのタイプの例文として、以下のようなものが挙げられている。

付帯状況：男ハ腰ヲ浮カシテドアヲ見ツメテイタ

時間的継起：娘ハニコヤカニ言ッテ、彼ノ前カラ立ち去ッタ

起因的継起：倉庫番ガ、背ノ高イ男ニツツカレテ喚イタ

並列：上ノ子ガ幼稚園ニ入ッテ、下ノ娘ガヤット歩き出シタ

この仁田の四分類は、その後ほかの研究者の論文や日本語教育の指導書にも先行研究として取り上げられることが多く、広く共通認識となっている。

日本語記述文法研究会（2008）は、並列、対比、前触れ、継起、原因・理由、逆接、順接条件、付帯状況を挙げている。例文番号は筆者による。

- (2) a. 日曜日、父は釣りに行き、母は買い物に出かけた。（並列）
- b. 盆地の気候は、冬は寒く、夏は暑い。（対比）
- c. 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。（前触れ）
- d. デパートに行って、くつを買った。（継起）
- e. 風邪をひいて仕事を休んだ。（原因・理由）
- f. わかっていて言わないなんて、ひどい。（逆接）
- g. 参加者は、幹事を入れて8人だ。（順接条件）
- h. 胸を張って、堂々で行進した。（付帯状況）

c. のような「ある」という静的述語が中止形になって用いられている「前触れ」の用法を、「並列」とは分けて取り上げているのは重要である。なお、静的述語の中止形の関係の意味について考察した津留崎については、2.4 で詳しく取り上げることとする。

2.3 二つの中止形をめぐって

いわゆる「連用形／テ形」、または「第1中止形（～シ）／第2中止形（～シテ）」とい

った二つの形の意味・機能上の違いに注目した研究として、寺村（1981）、言語学研究会（1989a、1989b）、益岡（2014）、日本語記述文法研究会（2008）がある。

寺村（1981）は、連用形接続とテ形接続の違いとして、次の5点を指摘をしている（p. 34-35）。

- (i) 文体的に連用形のほうが書き言葉的で、テ形のほうが話ことば的である。
- (ii) 動作・出来事の動詞の場合、テ形のほうが事の順序に沿っていることをはっきりと表す。
- (iii) 主格語や題目語が違う場合など、別々の事象を並列的に並べるのには連用形のほうが通している。（原文ママ）
- (iv) テ形のほうが理由を表すようにとれる。ただしテ形自体に「理由」という意味があるのではなく、前後の意味関係からそのように解釈できるにすぎない。
- (v) テ形には丁寧体「～しまして」「～でして」という形があるが、連用形にはない。

言語学研究会（1989a、1989b）は、一貫して「形がちがえば、意味がちがうという原則」（言語学研究会 1989a：14）にもとづき記述がなされている。結論として、第二なかどめの形は、基本的には主要な動作・状態と副次的な動作・状態との複合を表現しており、複合的な、従属関係の表現者であるとしている。それゆえに、もうひとつの動作や状態の特徴づけを表現する使用を発展させ、副詞化への移行が進行しているとしている。それに対し、第一なかどめの形は、並列関係の表現者であるとする。歴史的な観点からは、「第一なかどめの形は、並列と従属というふたつの関係を未分化のままに表現して、そこから従属的な関係のみを表現する、第二なかどめの形が派生してきたと考えることができるかもしれない。」（言語学研究会 1989b：178）としている。そして、ふたつの形の違いを文体論的なちがいにのみもとめようとする考えが、ごくかぎられた一面しかとらえていないことは、もはやいうまでもない」（言語学研究会 1989b：179）としている。

益岡（2014）は、連用中止構文における中立形の接続形式とテ形の接続形式のあいだの競合と共存の様相を明らかにしている。結論として、「中立形接続は単純列举（並列）、およびそこから語用論的に生じる連用関係（継起／因果の関係）を表す。他方、テ形接続は、「テ形」の付加（組み込み）により、広義の連用関係（「並列・時間・論理・様態」）を全面的・明示的に表す」（p. 539）としている。中立形接続とテ形接続は、「ベース形式と発展形式の分化」として捉えることができるとし、現代の話言葉において中立形接続の使用が縮小し、テ形接続が中立形接続の基本用法である並列の用法に拡大適用される傾向が認められることは、連用中止構文における“テ形接続への統合”の現象であり、テ形が連用関係を全面的に表示する汎用的な接続形式としての地位を確立していくと捉えている。

日本語記述文法研究会（2008）は、「テ形と連用形の違い」として、[用法の違い]、[助詞挿入]、[倒置]、[従属度の違い]、[副詞との連続性]、[文体的違い]の6つを挙げている。

[用法の違い] 並列および継起を表す場合は、両形ともに用いられる。原因・理由を表す場合も両方用いられるが、テ形の方が用いられやすい。逆接や順接条件の場合はテ形のみ。付帯状況はテ形のみで、連用形では継起の意味が強くなる。

[助詞挿入] 「ね」「よ」「さ」などの助詞は、テ形にのみ続くことができる（うちに帰ってね、…／*うちに帰りね、…）。

[倒置] テ形は倒置することができるが、連用形はできない。（「昨日はどうもすみませんでした、ご迷惑をおかけして／*ご迷惑をおかけし。」）。

[従属度の違い] テ形のほうが連用形よりも従属度が高い。そのため、連用形の節の中にテ形の節が含まれることが多い。

[副詞との連続性] テ形は実質的な意味を失って副詞化することがある（「急いで仕事を仕上げた。」）。

[文体的違い] 両形とも、話し言葉・書き言葉の両方で用いられるが、話しことばではテ形が好まれる。

(p. 287)

以上のように、中止形の二つの形式の違いについては詳細が明らかにされている。

2.4 静的述語の中止形

従来、中止形の研究は動詞を中心に進められてきた。一方で近年、「ある」のような運動を表さない動詞や、形容詞などの静的述語による中止形について注目した研究も現れてきた。ここではそのような静的述語の中止形に関する研究をみておく。

まず、大鹿（1986）は、早くから存在動詞の中止形の特徴について観察を行っている。たとえば、「遊び場のすみには大きな合歓の木があって、うす紅いぼうぼうした花がさいたが」のような例文について、「存在詞句」と仮の名づけを行い、先行節は、本来単文であるはずの文が句仕立てになっていることを指摘している。

次に、「独立性の高いテ形・連用形」という観点から、品詞の枠を超えて文の構えについて論じているのが白川（1990）である。白川は、「テ形・連用形の節の中には、（略）意味的には、独立文とほぼ同等の完結性を備えたものがある」として、「独立性の高いテ形・連用形」と名付けている。具体的には、「ようだ」「らしい」などのモダリティを表す助動詞、「いい」「きびしい」などの「判断形容表現」、動詞「ある」などが、「独立性の高いテ形・連用形」を作りやすいとしている。これらはいずれも静的な述語であることが注目される。さらに、後続節は「一般論→具体的」「結論→根拠」「難解な表現→平易な表現」といった「前言の補足」の機能を果たす文が多いことが指摘されている。たとえば、「この宗匠はなかなかきびしくて、連衆の差し出す付句をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ。」（丸谷才一『低空飛行』）のような例がある（p. 236）。このような中止形の用法は、従来見過ごされがちであった。

また、吉田（1996）も、テ形の用法の中には従来の分類におさまらない用法として、前項の事象を後項で言い換える「言い換え前触れ」の用法が存在すると主張している。その述語の種類は、「言語活動に関する動詞」「判断形容の述語」「内容を求める述語」の3種類

であることを明らかにしている。具体的には次のような例文が挙げられている。下線は吉田による。

- a. 言語活動を表す動詞：
中にはあの男を罵って、画のために親子の情愛も忘れてしまう、人面獣心の曲者だなどと申すものもございました。(『地獄変』)
- b. 判断形容表現の述語：
彼はいつも通り普通にやさしくて冗談も言ったし、私も笑った。(『白河夜船』)
- c. 内容を求める述語：
この温泉の町を以前に訪れたときは不精して終日湯に浸かっており、滝があるとは聞いたが見に行くことなど考えもしなかったのである。(『続明暗』)

これらは、「並列」と同様、前項と後項が同存性を保ちつつも独立性を有しているが、前項と後項が内的意味連関を有することによって他の用法との連続も見られるのが「並列」と一線を画し、既存の分類に当てはまらない用法だとしている。

最後に、津留崎 (2003a) は、従来の中止形の研究を振り返り、白川 (1990) や吉田 (1996) の研究も評価しつつ、動詞述語の研究に比べて静的述語の研究が立ち後れていることを指摘し、形容詞中止形が表す関係的意味の解明に取り組んでいる。その結果、動詞中止形との相違点にも言及し、品詞に関わらず分析できる枠組みを提示している。そこでは、形容詞の中止形の表す関係的意味を、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈》《解説》《評価》《副状態》の8つに分類している。その際に、形容詞が主に主体の特性と状態を表すことがその中止形の性格と関わりが深いとし、「時間的局在性」⁴を分析の観点として取り入れている。具体的には、奥田 (1996)、佐藤 (1997)、工藤 (2001) をもとに、文の表す対象的な内容 (=コトガラ) を、次の表のように時間軸上に局在するデキゴトと時間軸上に局在しない恒常的な特徴に分けている。

デキゴト			特徴			
運動 (動作・変化)	状態	一時的存在	恒常的存在	特性	関係	質

(津留崎 2003a: 10)

これらのコトガラの内容が先行句節と後続句節として組み合わせられたとき、さまざまな関係的意味が生まれる。たとえば、「特性－特性」という組み合わせの場合、「花子は優しくて明るい」のように、特徴を表す《並列》の文となる。また、「状態－運動」という組み合わせの場合、「痛くて声を上げた」のように、デキゴトを表す《原因》の文となる。このような分析を通じ、津留崎は形容詞中止形の表す関係的意味と、時間的局在性との関わりを明らかにしている。なお、津留崎 (1999) では名詞述語の中止形について、津留崎 (2000) ではナ形容詞の中止形について記述を行っており、静的述語の中止形の全体像を明らかに

⁴ 工藤 (2014) では、「時間的限定性」とされる。

したといえる。津留崎の一連の研究は、静的述語の中止形について網羅的に記述したものであるが、時間的限定性を観点にすえているため、動詞を含むすべての述語の中止形を捉えることができるものである。よって、本研究では関係的意味の分類については、津留崎の研究をもとに行うこととする。

2.5 否定の中止形

動詞の中止形の場合、肯定形は「シ」「シテ」の二形式であるが、否定形には「セズ」「セズニ」「シナイデ」「シナクテ」という4つの形式がある。また、近年では規範的ではないものの、「シナク」といったいわゆる「ナク中止形」⁵（金澤 2008）も存在する。

日本語学においては、否定中止形の各形式の文法的な使い分けを中心として、研究が多い。ただ、細部では研究者によって形式の整理や用法の分類等に違いが見られる。たとえば、形式については、寺村（1981）では「ズニ」を「テ形」に対応させているが、高橋ほか（2005）では「第1なかどめ」（連用形）の形としている。

表5 寺村（1981:34より抜粋）

連用形	肯定	行キ
	否定	(行カナク) 行カズ
テ形	肯定	行ッテ
	否定	行カナクテ
		行カズニ
		行カナイデ

表6 高橋ほか（2005:62より抜粋）

	みとめ形式	うちけし形式
第1なかどめ	よみ	よまず（に）
第2なかどめ	よんで	よまないで （よまなくて）

前件と後件の関係的意味については、「ナクテ」と「ナイデ」が分化していることの意味を追求した益岡（1997）や、「ナイデ」「ナクテ」「ズニ」が、補助用言用法、従属的用法、並列的用法においてどのように意味分担を行っているかを比較した日高（1995）がある。また、日本語記述文法研究会（2008）は、「ズ」を含めた四形式すべてを扱っており、肯定の中止形とほぼ同様の関係的意味を挙げている。

ここで取り上げた先行研究における否定中止形の用法の分類を整理すると、表7のようになる。「継起」「対比」「注釈」は研究者によって違いがある。

⁵ 金澤（2008）によると、「なく中止形」とは、「従来は「～（せ）ず、…」という形が規範的であった動詞の否定の連用中止法において、助動詞の部分を「ず」から「ない」に置き換えた「～（し）なく、…」という連用中止用法」（p. 14）である。

表 7 先行研究における否定中止形の意味・用法の認定

先行研究	付帯状況／手段	継起	原因	並列	対比	注釈
寺村（1981）	○	○	○	○		
益岡（1997）	○	○	○	○		
日高（1995）	○		○	○	（○）	
日本語記述文法研究会 （2008）	○	○	○	○	○	○

※（○）は形式により使用できないものがあることを表す

最後に、「なく中止形」については、金澤（1997、2008、2013）の一連の研究がある。規範的ではないとされる形でありながらも、近年、若者を中心として少しずつ広がりがあることを指摘し、その特徴を明らかにするとともに、通時的な追跡調査も行っている。

3. 日本語教育における中止形の扱いと先行研究

ここでは、まず日本語教育において規範とされる事典や教科書、指導書における中止形の取り上げ方についてみておく。先に概観した日本語学における研究の内容がどのように取り入れられ、整理されているかを確認する。次に、中止形接続の日本語教育における問題点を扱った先行研究を、観点を立ててみていくこととする。

3.1 事典、教科書、教師用参考書類の記述について

3.1.1 日本語教育事典

日本語教育に関する基本事項を網羅した百科的な事典として『日本語教育事典』（1982）がある。改訂された『新版 日本語教育事典』（2005）において、中止形に関わる項目がどのように取り上げられているか見ておく。索引には、「中止形」「中止法」という用語はなく、「中止節」「テ節」「～て」「連用形」といった用語が挙げられている。

まず、「複文」のひとつの種類として、「中止節」「テ節」が取り上げられている（p. 163、仁田義雄）。仁田（1995）では「付帯状況」「時間的継起」「起因的継起」「並列」の4分類だったが、ここでは「手段・方法」が加えられ、5分類になっている。

次に、理由節「カラ・ノデ・テ」（p. 168、前田直子）、「並列を表す形式」（p. 173、白川博之）において、それぞれ類似表現との類似点・相違点について説明がある。

否定形式に関しては、「ナク（テ）・ナイデ（デ）・ズ（ニ）」（p. 121、小林典子）という項目において各形式の使い分けの説明がある。これらの使い分けは、動詞の後ろにつける場合にのみ問題になるとされ、複文の動詞の節では「「ないで」を基本とし、例外として「なくて」の使用条件を指導するとよい」（p. 122）と述べている。「ないで」よりも「なくて」をよく使うものは、因果関係の意味のあるものであることや、連用中止形としての「なく」は動詞文では使えないので「ず」を使用する、など他の項目よりは指導に踏み込んだ記述がある。

以上のように、事典の中では、「理由」や「並列」を表す接続表現との類似点・相違点へ

の言及がなされ、また中止形の四つの否定形式それぞれの使い分けがまとめられている。意味的に近接する表現は、教育においてその使い分けの指導が重視されるため、日本語学における記述的研究の成果が事典に反映されていると言えよう。

3.1.2 日本語教科書における扱い

3.1.2.1 初級レベル

初級レベルの日本語教科書では、「わたしは〇〇です」のような単文である名詞述語文からスタートし、徐々に複文を扱っていくという「文型積み上げ式」のタイプのものが主流である。代表的な初級教科書『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を例に、中止形接続の扱いについて見ておく。取り上げられる文型は、次のようなものである。

(3) 『みんなの日本語Ⅰ』第16課 （継起・並列）

- a. 朝ジョギングをして、シャワーを浴びて、会社へ行きます。
 - b. この部屋は広くて、明るいです。
 - c. ミラーさんは、ハンサムで親切です。
 - d. ミラーさんは、28歳で独身です。
- (p. 134、136)

(4) 『みんなの日本語Ⅱ』第34課 （付帯状況）

- a. 傘を持って出かけます。
 - b. 傘を持たないで出かけます。
 - c. 朝ごはんを食べて出かけます。
 - d. 朝ごはんを食べないで出かけます。
 - e. 日曜日どこにも行かないで、うちにいます。
 - f. エレベーターに乗らないで、階段を使います。
 - g. 仕事をしないで、遊んでいます。
- (p. 70)

(5) 『みんなの日本語Ⅱ』第39課 （原因・理由）

- a. ニュースを聞いて、びっくりしました。
 - b. 遅くなって、すみません。
 - c. 問題がむずかしくて、わかりません。
 - d. 使い方がふくざつで、わかりません。
 - e. じしんで人が大勢死にました。
- (p. 112、114)

日本語学で整理された用法が（3）継起・並列、（4）付帯状況（肯定形・否定形）、（5）原因・理由の順で提示されていることがわかる。形容詞や述語名詞の中止形は、初級の段階では例文（3）b. c. d.、（5）c. d. のように、「並列」と「原因・理由」の用法のみが紹介される。（5）e. の「地震で」については、中止形接続ではなく原因・理由を表す助詞の「で」である。また、津留崎（2003b）で指摘されるように、（3）d. についても、述語名詞の中止形ではなく、「名詞＋格助詞デ」の用法である。津留崎は、初級教科書においては「彼女は

優等生で、奨学金をもらっている」のような述語名詞の中止形が「原因」を表すタイプの文は提示されていないと問題提起をしている。

もう一つのタイプの教科書を見ておこう。近年、文法積み上げ式とは一線を画すタイプの教科書も増えてきている。その中で、「自己表現活動」ができるようになることを目指したものが『NEJ テーマで学ぶ基礎日本語』（くろしお出版）である。以下に、「Unit6 section1」でのテキストを引用する。ここでは、動詞の中止形を学ぶ前に形容詞の中止形がかなり早い段階で提出されている。下線は筆者による。

1 リさん

わたしは、土曜日に、友達といっしょに、買い物に行きました。ショッピングモールは、とてもきれいで大きかったです。そして、モールの中には庭がありました。庭には、木がありました。本当に、広くてすてきなショッピングモールでした。（中略）

わたしたちは、4時間くらい買い物をしました。つかれました。そして、とてもおなかがすきました。それで、わたしたちは、ごはんを食べに行きました。ショッピングモールには、いろいろなレストランがありました。わたしたちは、中華の店に入りました。味がうすくてあまりおいしくなかったです。でも、買い物はとても楽しかったです。また、行きたいです。

(p. 86 「Unit6 section1」)

「きれいで大きかった」（並列）、「味がうすくてあまりおいしくなかった」（原因）の例が提示され、また「広くてすてきなショッピングモール」という規定の形で提示されている。解説としては、「で is the connective ending of な-adjective」「～くて is the connective form of い-adjective」という記述が同ページに添えられているにとどまっている。

この教科書では、上に見るような「マスターテキスト」と呼ばれる1人称の語りのテキストがあり、単語の意味を理解したあとは、なんどもこのテキスト文を聞き、声に出して練習し、最終的には学習者自身に置き換えて語れることを目指している。よって文法項目は、前面に出されておらず補足的に最小限の説明がなされる。

以上、初級における二つのタイプの教科書における中止形の扱いを見た。

3.1.2.2 中級レベル以降

中級レベル以降は、中止形は文法項目として明示的に取り上げられることはほとんどなく、読解教材等において、いわば学習者による自然習得に任される部分が大きいといえる。しかし、書き言葉の特徴として、中止形の二つの形式について言及する作文教材は複数ある。ここではその中の一つ、『小論文への12のステップ』（スリーエーネットワーク）を見しておく。そこでは、「書き言葉の文体 連用中止形」というセクションで、「小論文では、連用中止形がよく使われます」（p. 29）とし、次のような例文が挙げられている。

(4) 動詞 「大がかりな実験を行って、分析をした。」

→行い

イ形容詞 「東京は物価も高くて、人も多い。」

→高く

ナ形容詞 「この方法は複雑であって／複雑で、また費用もかかる。」

→複雑であり

名詞 「この文章は個人的な日記であって／日記で、論文とは言えない。」

→日記であり

(p. 29)

そして「注意」として、次のような点が挙げられている。

- ・「て形」を使った文がすべて連用中止形の文になるわけではない。連用中止形が使われるのは、主に「並列」「対立」「行為の順序」を表す場合である。
- ・連用中止形になりにくい場合は、「どのような状態で動作をするかを表すとき」「手段や方法を表すとき」である。

(p. 30)

中級学習者用に、できるだけ平易な説明になるようにポイントをしぼり記述されている。しかし、学習者にとって複雑な内容であることには変わりはないだろう。

なお、初級レベルで紹介した『NEJ テーマで学ぶ基礎日本語』の続編として刊行された『NIJ テーマ別で学ぶ中級日本語』（くろしお出版）では、モノローグのテキスト、会話のテキスト、レクチャー（講義）のテキストが用意されており、「Unit2」のレクチャー（講義）のテキストの中で、第1中止形が紹介されている。下線は筆者による。

Key sentences

- ① チョウにはチョウの生き方があり、セミにはセミの生き方があります。魚には魚の生き方があり、鳥には鳥の生き方があります。ネズミやシカやライオンにも、それぞれの生き方があります。

(Unit2 p. 22)

下線部「あり」については、「an abbreviation of あって」という短い説明が付けられている。「あり」は「あって」の省略」とするのは説明が不十分であるが、レクチャー（講義）というスタイルの中で、「並列」の用法を提示するひとつの試みになっていると考える。

以上、日本語教科書の実際を概観した。

3.1.3 教師用参考書類

教師用指導書類においては、より積極的に、指導の際に用いるのに適切な例文や、使い方の説明、留意点などが具体的に記述される。特に類似表現との使い分けについての説明

に重きがおかれる。

まず、寺村(1981)『日本語教育指導参考書 5 日本語の文法(下)』では、「並列的接続」という章において、「文と文とをつなぐおそらく最も原始的なやり方は、それらを‘ただ並べる’つなぎ方」(p. 21)であるとして、並列的接続のシンタクスについて、多くの設問を通して例文の観察を行い、並列的接続が「ただ並べる」だけでは成立しないことを確認し、それらの現象を統一的に説明するための議論を行っている。具体的には次のような点が挙げられている。

- ① ある二つの文が並列的に接続され得るためには、原則として、それらが、同一人物が、同一人物に向かって、同一のシチュエーションで言うものでなければならない。
- ② 並列される文は、同じムードのものであるのが本来である。
- ③ テンスについては、事実叙述の文で、同じテンス、つまりどちらも現在、未来の文か、どちらも過去の文は、並列接続できる。ただし、現在・未来どうし、過去どうしでも、「～て」で先行する文の表す時が後の文の表す時より後ということがはっきりしている場合は並列接続できない。
- ④ 二つの文が同一の補語のときは、原則として後の文の補語を削除する。
- ⑤ 同じ述語を持つ二つの文は、一定の条件があれば、一体化し、同一の格に立つ違う名詞を「～と(＋格助詞)」でつなぐことができる。
- ⑥ 並列接続に伴って、違う格に立つ同じ名詞については⑤の場合より定式化が難しい。

以上のように、非常に緻密な観察が行われており、母語話者の持つ並列接続の仕方の複雑なきまりごとを明らかにしている。

次に、グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』は、「【て】[N/Na で][A-くて][V-て]」(p. 237)という項目において、以下のようにポイントを絞り、記述している。

- ・前の節と後ろの節をゆるやかに結びつけるのに用いる。
- ・行為を表す文を連結する場合は、連続的に起こることを述べる。また、文脈によって対比的に使ったり、軽い理由を表したり、好意の手段や付随する状況を表すこともある。
- ・形容詞など属性や状態を表す文では、ふたつの属性を並べる場合や、「…て」の部分で軽く理由を表す場合がある。動作性の表現のあとに形容詞などの状態性の文がくると軽く理由を表す表現になることが多い。
- ・いくつかの行為や状態が交替して起こる場合、また時間の順とかかわりなく述べる場合は、「て」ではなく、「たり」を用いる。

「ゆるく結ぶ」や「軽い理由」といった表現はやや厳密性に欠けるが、類似表現の「たり」を示すなどして特徴づけている点など、現場ですぐに役立つものである。

次に、庵功雄ほか(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』では、ま

ず、「テ形」について、動作やことがらの継起や並列を表すが、他にも付帯状況、手段、原因・理由など様々に解釈されることが説明されている。そして、述語が動詞かイ形容詞の場合に、中止形に置き換えることができるとしており、意味による違いはほとんどなく、中止形のほうが「書きことば的」であると言及している。また、類義表現となる「ながら」との違いについて説明がなされている。

また、市川（2018）『日本語類義表現と使い方のポイント』では、「比較のポイント」として、次のような簡潔な表が示されている。

表 8 動詞の並列・例示 比較のポイント（市川 2018:350 より抜粋）

	書き言葉的	話し言葉的	全部 列挙	一部 列挙	動作・行為が次に つながっていく	文が切れる 感じ
～て		○	○		○	
連用中止（形）	○		○			○

※「一部列挙」については、「～たり」「～し」がこれに該当する

最後に、条件表現における「原因・理由の表現」のひとつとして、「テ形」の用法について詳しく解説している蓮沼・有田・前田（2001）『セルフマスターシリーズ7 条件表現』を取り上げる。そこでは、「テ形」と「から」「ので」の違いが詳しく説明されている。まず、述語のテ形には、話し手の感情の変化の原因を表す用法があり、前件は話し手の感情変化の原因・ひきがねとなる事柄を表し、後件は前件によって生じた話し手の感情変化や、話し手の評価を表すとしている。たとえば、「希望の大学に合格できて、とてもうれしい」のような例である（p. 119）。また、事態と事態の原因と結果を表す用法もあり、前件の結果、後件が自然に成立したり、やむを得ず行われる場合に使われるとしている。よって、後件には、「意志・命令・依頼・勧誘や、禁止・許可など、未実現の意志動作や聞き手への働きかけの表現はもちいることはできない」とし、次のような例を示し説明している。

- (6) この教室は暑くて ○勉強に集中できない（事実の叙述）
 ○勉強に集中できないだろう（推量）
 ×窓を開けてください（依頼）
 ×窓を開けよう（意志）

(p. 122)

後件のモダリティ制限は、「から」や「ので」と異なる点であり、学習者の誤用につながりやすい。学習者に向けたこのような丁寧な解説は重要である。

3.1.4 誤用例データベースと誤用例辞典

ここでは、学習者による誤用例を集めたデータベースと、誤用例辞典についてみておく。学習者の作文に見られる誤用例を収集した資料として寺村（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』（大阪大学）がある。データベース版（国立国語研究所 2011）では、誤用に関わる項目がラベル付けされており、例文の検索が可能である。中止形に関わるラベルと

しては、「接続」のうち、「テ形」「連用形」が該当する。検索を行うと、「テ形」は 169 件、「連用形」は 49 件ヒットする。文中の誤用のある箇所は下線で示され、「誤用の種類」が示される。誤用のラベルは、「使い方が間違っている場合」「使うべきでないのに使っている場合」「使うべきなのに使っていない場合」などに分類されている。詳しい分析や指導法までは書かれていないため、基礎的な資料としての役割が大きいが、学習者によく見られる使用例が集められており、誤用の分類がなされていることは非常に価値がある。例を挙げると、次の a. ～d. に見るように、他の文法形式を使うべきところに「テ形」を使用しているというものが多い。

- a. この証拠をそろって、彼女は真犯人だと考えざるをえない。(5724 *テ形／ート)
- b. この表を見たらわかって、日本人の平均寿命は年年に伸びている。(5726 *テ形／ーヨウニ)
- c. このごろ人造衛星をつかって、それでは天気予報がよくできる。(5749*テ形／ーノデ)
- d. もし、いつか私がほんどに医者になって、父と母もきっと喜びがるでしょう (5753*テ形／ータラ)
- e. 仕事が、八月九日に始まり、様々のことがわからなかった。(5833 *連用形)

次に、誤用例に注目して編まれた辞典として、市川 (1997)『日本語誤用例文小辞典』、市川編著 (2010)『日本語誤用辞典』がある。これらは、教育現場ですぐに役立つよう、誤用例とともに誤用の背景や指導のポイントがまとめられている。市川編著 (2010) から、中止形に関する部分を一部抜粋する。なお、アルファベットの例文記号は筆者による。

(7)

- a. 誤 寒くて、ヒーターをつけよう。〈タイ〉

正 寒いから、ヒーターをつけよう。

原因・理由を表す「から/ので」にすべきところに「て」を用いている誤用が多く見られる。(中略) 理由を表す「て」では、後件(主節)の因果関係を示すためには、「て」では不十分で理由説「から/ので」を使う必要がある。(p. 391)

- b. 誤 江南の秋は落ち葉を楽しむ季節です。庭に静に座って、落ち葉がさっさと落ちる音も聞こえます。〈中国〉

正 江南の秋は落ち葉を楽しむ季節です。庭に静に座ると、落ち葉がさっさと落ちる音も聞こえます。

条件表現で表すべきなのに「て」を用いている誤用である。(中略)「と」「ば」「たら」すべてに共通することは、前件に「きっかけ・要因・条件」があって、後件(主節)でその結果について述べるということである。学習者はその意味的な関係を十分に理解せず、何にでも「て」を使ってしまう。(p. 397)

c. **誤** 仕事が、八月九日に始まり、様々のことがわからなかった。〈マレーシア〉

正 仕事が、八月九日に始まったが、様々なことがわからなかった。

前件・後件が逆接関係にある場合にも、「連用中止（形）」を用いる学習者がいる。

「連用中止（形）」では逆接関係は表せないで、逆接の形式（「が」「けれども」「のに」「ながら（も）」など）を用いることを指導する。（p. 774）

母語の情報も付したうえで、実際の誤用例と訂正案と誤用についての解説がなされており、現場の教師にはすぐに役立つものとなっている。ただ、解説には若干主観的なものも見られる。たとえば、c. の例の場合は、先行節・後続節が明らかな逆接関係かという疑問が残る。このような順接・逆接があいまいな文での中止形接続の使用を誤用とすることについては、議論が必要であると思われる。

3.2 日本語学習者による中止形接続の使用に関する先行研究

ここでは、日本語学習者による中止形接続の使用についての問題点を扱った先行研究について整理する。その際、どのような観点や問題意識を持っているか、データは何か、どのような方向付けをしているかに注目する。観点として、(1) 文章・談話における接続助詞、(2) 関係的意味、(3) 二つの形式の相違点、(4) 静的述語の中止形、の4点を設ける。

3.2.1 文章・談話における接続表現

学習者による産出された文章・談話をデータとして複文全体の使用を観察し、複文に関する問題点は何か、談話を作る際に問題になることは何かについて探った研究は多く、田代（1995）、渡邊（1996）、秋口・鄭（2002）、塩入（2012）、庵・宮部（2017）などがある。いずれも中止形接続への言及がある。

田代（1995）では、中上級日本語学習者の文章表現の不自然さやわかりにくさは何によるものかを解明するために、日本語学習者と日本語母語話者にセリフのない漫画を見せてストーリー説明の作文を書かせ、比較を行っている。その結果、日本語母語話者は「て」と連用形接続を組み合わせて使っているのに対し、学習者には「て」への偏りが見られるとしている。

渡邊（1996）は、日本語学習者と日本語母語話者を対象に、四コマ漫画を見せ、その内容を口頭で説明したものをデータとし、談話展開のスタイルを視点と文の連接から分析している。結論として、学習者の日本語のわかりにくさは、母語話者に欠落部分の推測や誤りの補正という作業を必要とさせることだと結論づけている。その中で特に、時間の流れを形成しない不完全な「て」形が顕著にみられたとの指摘がある。

秋口・鄭（2002）では、被調査者（中国語・韓国語・日本語母語話者）に3分程度の音声のないビデオを見せ、その内容を書かせた作文をデータにしている。調査結果として、田代（1995）と同様に、「日本語母語話者はテ形接続よりも連用形接続を多く用いるのに対して、学習者はテ形接続を用いる傾向があった」（p. 53）としている。

塩入（2012）は、日本語作文とその母語訳から成る「作文対訳DB」（国立国語研究所）を用い、中国語母語話者による従属節選択の誤用傾向を調査している。従属節の誤用延べ188

例のうち、中止節に関するものが最多で 53 例であり、活用の誤りを差し引いても、最も誤りの多い形式であったとしている。その上で、条件節との選択に関わる誤用や、文を終わらせるべきところで接続をしている誤用が多いと指摘している。

庵・宮部 (2017) は、日本語学習者にとって、複文に関する困難点は何かという問題意識のもと、「JCK 作文コーパス」⁶を調査し、複文の意味類型ごとの分布を明らかにしている。そこでは、複文の意味的類型として、「並列、継起、条件、原因・理由、逆接・対比、時、目的、その他」という 8 つの類型が設定されており、中止形としては否定形式も含め、「て」「なく (て)」「ず (に)」が取り上げられている。ただ、連用中止節については「省略する」(p. 61) とあり、また、「継起」と「原因・理由」の意味類型を担う形式としては、中止形は対象形式として取り上げられてはいない⁷。

3.2.2 関係的意味について

関係的意味に関しては、付帯状況、原因・理由といったものに注目される傾向がみられる。これは、日本語教育においては誤用の観察から出発することが多く、誤用は類似表現との使い分けから起こるため、説明が求められるからであろう。

具体的には、付帯状況について考察したものに中野 (1997)、吉永 (1997) がある。いずれも、付帯状況の意味についての下位分類、使用される動詞の分類を行っている。また原因・理由に関しては、台湾人学習者による「て」形接続の誤用を焦点に分析した吉田 (1994)、「て」の使用実態を「ので」と比較し考察した張 (1998) がある。作文指導の便宜として、「原因性をはっきりさせたいのなら、制約の少ない「ので」「から」を使わせる方が安全だろう」(吉田 1994 : 102) との指摘がある。

3.2.3 二つの中止形をめぐって

中止形の二つの形式に注目した調査としては、まず、3.2.1 で見た田代 (1995)、秋口・鄭 (2002) がある。いずれも、日本語母語話者はテ形と連用形を併用し、連用形が多く現れるのに対し、学習者はテ形の使用への偏りがあるという結論に至っている。秋口・鄭は、中国語母語学習者については、中国語には接続を表す形式なしに文がつないでいけるため、「て」の使用範囲広くなる可能性があるとしている。また韓国語学習者については、韓国語には「て」に該当する接続表現が存在するために「て」が多用されるのではないかと推測している。

林 (2005) は、日本語教育において書き言葉では「連用形」を用いることが指導されるが、実際にはテ形のほうが多く出現するものもあることに注目し、調査を行っている。論述文 (CASTEL/J の論説文 (講談社)) のデータを使用し、43 語の動詞についてテ形と連用形の出現状況を分析している。その結果、連用形よりもテ形の方が多く出現したものは、「A. 連用

⁶ 「JCK 作文コーパス」とは、日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者がそれぞれ書いた計 180 本の作文コーパスである。学習者の日本語レベルは、JLPT N1 相当以上の力を持つとされており、2000 字以上の「説明文」「意見文」「歴史文」という三つのジャンルの作文を収めている。詳細については、<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>を参照のこと。

⁷ 「継起」としては、「てから、たあと、まえ」の 3 つ、「原因・理由」としては「から、ので、ために、のだから、からこそ、以上」が取り上げられている。

形が一拍のもの（「いる」「くる」等）、「B. 文法的〈機能語〉（「～による」「～をめぐる」等）、「C. 付帯状態（「だまる」「ならぶ」等）、「D. 機能語的なもの（「～とちがう」「～につぐ）」であるとしている。

また、中野（1997）は、日本語母語話者と日本語学習者によるシテ形接続と連用形接続の使用の使い分けの実態を、日本人学生と、香港・韓国の大学生を対象にしたアンケート調査により明らかにしている。その結果、日本語母語話者に関しては、文体の違いだけではない使用状況の相違が表出され、両形式の使い分けの棲み分けがみられたとしている。一方、学習者は、時間的継起と並列において、両形式を同程度に使用していたとし、「シテ形の意味機能が多岐にわたっていることを知っている学習者はシテ形を選択すれば誤りが少ないと踏む」とし、シテ形の過剰般化を指摘している。使用の意識をアンケートによって調査しているため、実際の使用との照らし合わせが必要であると思われる。

以上のように、第1中止形・第2中止形の使用については、日本語母語話者に比べて、学習者は第1中止形の使用率が低いことが指摘されている。また、書き言葉においてテ形が多く出現する動詞についても詳細が明らかになっている。

3.2.4 静的述語の中止形

津留崎（2003b）は、日本語教育における中止形の扱いについて現状を批判的に考察した論考である。そこでは、「外国語の学習では、(1) ある形がどの意味で使われているのかを判断すること、(2) 同じ意味を表す（ように見える）いくつかの形のうち、どれを使うのが適切なのかを判断することが、常に問題になる」（p. 144）とし、中止形における（1）の問題について、日本語研究と教育との関わりを考察している。そして、日本語学の研究において、中止形の関係的意味については動詞を中心に研究がされてきており、形容詞や述語名詞の中止形の研究は遅れているため、それが教科書にも反映された結果、現状では形容詞や述語名詞の中止形は教師の内省に頼って指導されている印象があると指摘している。

日本語教育において、動詞の関係的意味を応用して形容詞や述語名詞を扱うことは、それほど問題視されていなかった。それは、誤用として特に認識されなかったり、大きな読解のさまたげになるというような観察が少なかったことによるだろう。しかし、誤用とまではいえなくとも、違和感が感じられる例文も存在するのは事実である。津留崎のように、静的述語の中止形に注目して、学習者の作文を見てもみることは必要であると考えられる。

3.2.5 否定の中止形

否定の中止形「セズ」「セズニ」「シナイデ」「シナクテ」については、その使い分けや指導法に関し、日本語教育でも早くから問題点として取り上げられている。まず、北川（1976）は、ナイデとナクテについてどのように指導するべきか議論している。北川は、主語の異同、動詞が意志動詞か無意志動詞かという観点から分析を行い、学習者への指導の際には、ナイデは動詞のみに接続することと、どういう場合に「なくて」が動詞とともに現れるか、また制限されるかを指導するべきであると主張している。また、小林（2003）は、ナクテ、ナイデ、ナク、ズニ、ズに関する言語研究の変遷を、伝統的な国語学の流れと、その対論としてある意味的な差異の観点から追及する流れという二つの流れとして捉え、研究史を

概観している。そして、各形式を比較した結果、学習者にとっては、形態的な違いや文型によって指導するほうがわかりやすいと主張している。たとえば、「名詞文、い形容詞文、な形容詞文、存在文→ナクテ、ナク」「動詞文はナイデを基本とする」「ナル、スル／サセルにつく場合はナクを使う」など、学習者に提示すべき情報をまとめている。

学習者作文コーパスを用いた研究としては、庵・宮部（2017）があり、学習者による複文の組み立てかたについて調査を行っている。そこでは、複文の意味類型の一つである「並列」の中の、「て」「なく（て）」「ず（に）」が取り上げられ、「よりフォーマルな文体で使われる「ず（に）」は中国語話者に少なく、よりインフォーマルな文体で使われる「なく（て）」は中国語話者に多い」（p. 62）とし、フォーマルな場面で使われる形式（「ず（に）」）を使うことが習得上の困難点であると指摘している。

最後に、「なく中止形」の日本語学習者の使用について記述した研究として、金澤（2008）がある。そこでは、「なく中止形」が母語話者ばかりでなく日本語学習者の中でもすでに見られ、特に、超上級学習者には母語話者とかなり似通った使われ方がなされることを指摘している。その現象を「隠れた文法性判断能力」とも呼ぶべき無意識の意識が醸成されいるらしい」（p. 15）と肯定的に評価をしている点は興味深い。

4. 本研究の位置づけ

ここまで、中止形の接続表現に関する現代日本語学・日本語教育学の先行研究や、日本語教科書、参考書類などできるだけ幅広く取り上げて整理を行った。

日本語教育において、日本語学習者による中止形接続に関する研究は、学習者が産出した文章や談話を資料とした研究が進められてきている。特に中国語母語話者によるテ形に関する誤用については研究が進んでいる。しかし、テ形と連用形の現れ方については、学習者は日本語母語話者に比べ、連用形よりもテ形をよく使うということが指摘されているが、それ以上のことはほとんど明らかにされていない。データについても、ストーリーテリングや、意見文に限られる傾向がある。また、動詞以外の静的述語、すなわちイ形容詞・ナ形容詞・述語名詞に関する調査は、管見の限り見られないようである。つまり、十分な量のデータにもとづく網羅的な調査研究はほとんどないといえる。

よって、本研究では、日本語学習者と日本語母語話者による 12 の作文タスクから成る質・量ともに整った「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（通称「YNU 書き言葉コーパス」）をデータとし、動詞・形容詞（イ形容詞・ナ形容詞）・述語名詞による中止形接続について網羅的な調査・分析を行う。このコーパスが本研究にとって最適であると考えられる理由は、タスク別の作文コーパスであることに尽きる。書く目的や媒体は何か、読み手が特定か不特定か、疎遠か親しいか、といったタスクの特徴の違いが、中止形の選択にどう関わるのかを観察することができるのである。分析には、「形式」「関係的意味」「作文タスクの類型」「学習者の習熟度レベル」を観点として取り上げ、中止形の選択にこれらのファクターがどのように相関するのかを明らかにする。本研究における「関係的意味」は津留崎（2003a）による枠組みであり、「時間的限定性」の観点にもとづくものである。「時間的限定性」とは、「すべての述語を捉えている意味・機能的カテゴリーで、偶発的（accidental）な一時的〈現象〉か、ポテンシャルな恒常的（permanent）な〈本質〉かの

スケールの違いである」(工藤 2012 : 157) と定義されるものであるが、述語全体を視野に入れることができるカテゴリーである。

本研究の意義としては、上記の観点を用い、学習者の中止形接続の実態を品詞ごとに丁寧に分析・記述することにより、これまで指摘されていない新たな点が明らかになり、教育への示唆が得られると考える。

5. 研究の方法

本研究では、日本語学習者と日本語母語話者によって書かれた作文コーパスを調査対象とし、中止形がどのように使われているかを量的・質的に調査し、分析する。近年、日本語教育の分野においても、コーパスを活用した研究が盛んである。特に学習者の作文や発話を収録した学習者コーパスと呼ばれるものには関心が高まっている。李・石川・砂川(2018)では、学習者コーパスとは、「学習者による目標言語の産出実例を収録したデータベース」を指すとし、その意義として、言語教育、言語習得研究、日本語研究への貢献を挙げている。

現在、学習者の作文を収集したコーパスについては、一般公開されているものとして、「作文対訳 DB」(「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」、国立国語研究所)、「東京外国語大学日本語学習者言語コーパス」(伊集院郁子氏)、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(伊集院郁子氏)、「YNU 書き言葉コーパス」(金澤裕之氏)、「I-JAS」(「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」、国立国語研究所)、「JCK 作文コーパス」⁸などがある。このうち、本研究が調査対象として選んだ作文コーパスは、「YNU 書き言葉コーパス」である。以下に「YNU 書き言葉コーパス」の特徴と、研究対象として選んだ理由について述べる。

「YNU 書き言葉コーパス」は正式名称「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」の通称である。「YNU」とは、横浜国立大学(Yokohama National University)の頭文字であり、金澤裕之氏の監修の下、同大学において構築された作文コーパスである。

このコーパスの特徴は、「(i) レイティング付きの、(ii) ある程度多数の学習者による、(iii) 各種書き言葉資料を集めた、もの」(金澤編 2014: 3)であるということである。大学生の日常における「書く」という言語活動に注目し、日本人大学生(30名)と同大学に所属する留学生(韓国語母語話者 30名、中国語母語話者 30名)を対象にした書き言葉の資料が収められており、その数は、母語別各グループ 360 編ずつ、計 1080 編である。

留学生の日本語レベルについては、大学の講義を受けることができ、一般的には上級と称されるレベルであるとしている。調査対象の留学生 60 名のうち、7 割の 44 名が 1 級(N1 を含む)合格者であるとされている。学習者は、4 つの観点(タスクの達成度、タスクの詳細さ・正確性、読み手への配慮、体裁・文体の適切性)に基づく作文の総合評価により、それぞれ上位群 10 名・中位群 10 名・下位群 10 名の 3 グループに分け、ラベル付けがされている。中止形の使用は、「文法」が含まれている「タスクの詳細さ・正確さ」、また、そ

⁸ 科学研究費補助金「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」(2013 年度～2015 年度、基盤研究(C)、研究課題番号: 25370577、研究代表者: 金井勇人)の助成を受けて制作されたものである。

の文章のスタイルにふさわしい文体か否かを見る「体裁・文体」といった評価項目と関わってくるであろうが、最終的な評価判定は4つの観点により総合的になされるため、文法や文体は評価を支える一部分であるといえる。

収録されている作文は、12のタスクに基づいており、日常で起こり得るさまざまな「書く」という活動の中から一定の場面を選んで抽出されている。それぞれ、「自発型」か「頼まれ型」か、「読み手」はだれか、「文章の長さ」は長いかな否か、などの観点から選定が加えられ、最終的に12種類のタスクが作成されている。母語別の総形態素数は、日本語母語話者 79447、韓国語母語話者 81356、中国語母語話者 88828 である。

タスクの内容は、次の通りである。

【タスクの内容】

- 〈タスク 1〉 面識のない先生に図書を借りる
- 〈タスク 2〉 友人に図書を借りる
- 〈タスク 3〉 デジカメの販売台数に関する図を説明する
- 〈タスク 4〉 学長に奨学金増額の必要性を訴える
- 〈タスク 5〉 入院中の後輩に励ましの手紙を書く
- 〈タスク 6〉 市民病院の閉鎖について投書する
- 〈タスク 7〉 ゼミの先生に観光スポット・名物を紹介する
- 〈タスク 8〉 先輩に起こった出来事を友人に教える
- 〈タスク 9〉 広報紙で国の料理を紹介する
- 〈タスク 10〉 先生に早期英語教育についての意見を述べる
- 〈タスク 11〉 友人に早期英語教育についての意見を述べる
- 〈タスク 12〉 小学生新聞で七夕の物語を紹介する

(金澤編 2014: 53)

以上のタスクを、自発型・頼まれ型、読み手が特定か不特定か、また、疎遠(目上)であるか親しい相手(同僚・友人)であるかといった観点から整理すると、次のような概略図になる。

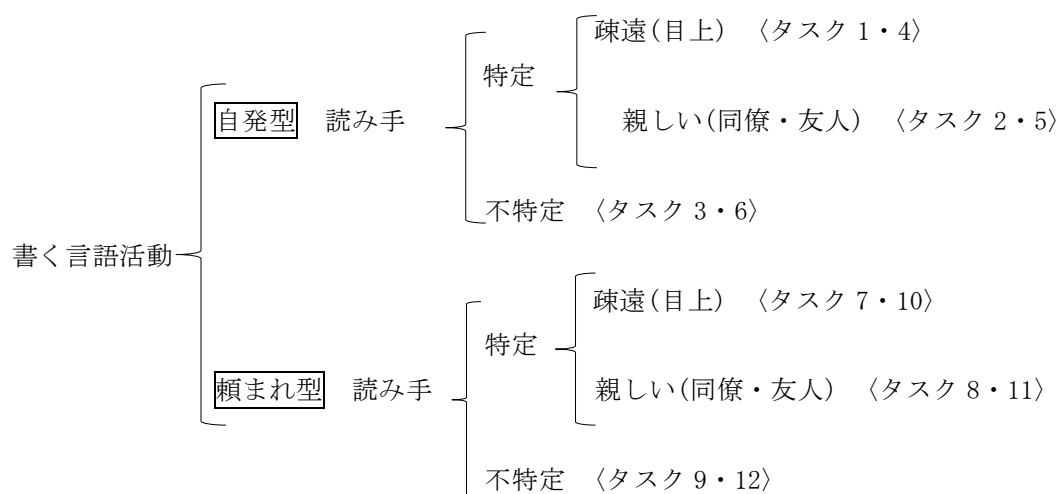


図8 書く言語活動の分類とタスクの関係(金澤編 2014: 7 一部改編)

以上のように、「YNU 書き言葉コーパス」は、日本語母語話者と日本語学習者の両方のデータが量的・質的にも整っており、バランスの取れた設計がなされているため、日本語母語話者と学習者間、また韓国語母語話者と中国語母語話者間、また習熟度でレベル分けされた学習者のグループ間での比較を行うことが可能である。さらに、作文は複数のジャンルや異なった読み手に対する「書く場面」が設定されているため、本研究の目的である中止形接続の二つの形式の使い分けについて、どのような要因が相関するのかを調査するのに適していると考えられる。

本研究が対象とするのは、高橋ほか(2005: 63-64)に定義される、1つの主語に対して述語が2つ以上ある文(「ふたまた述語文」と、主語と述語のある節がふたつ以上ある文(「あわせ文」)に現れた中止形である。調査方法は、次のような手順による。まず、「YNU 書き言葉コーパス」の1080の作文データ(テキストファイル)を1文ずつ縦に並べたExcelファイルを作成し、中止形接続が現れた文を目視にて抽出した。また漏れがないよう、作文の全テキストファイルを対象にUniDic(unidic-mecab)Ver. 20.2により形態素解析を行い、確認した。次に中止形の述語の品詞、出現位置、後続節の述語のムード、動詞についてはヴォイス、アスペクト形式などの文法的特徴、及び関係的意味のタグ付けを行い、母語・形式・学習者の習熟度によるグループ分け(上位群・中位群・下位群)の別により集計を行った。

6. 本研究の構成

本研究は7つの章から構成される。

第1章は序論として、本研究の目的、中止形接続についての先行研究、日本語教育における中止形の扱い、考察と記述の前提について述べる。第2章、第3章、第4章では、動詞の中止形について扱う。まず第2章においては、叙述文を中心に、関係的意味と形式との関わりについて考察する。第3章においては、作文タスクの内容と形式との関わりについて述べる。第4章では、動詞の否定中止形である「ズ」「ズニ」「シナイデ」「シナクテ」の

四形式と、「ナク中止形」の使用状況について、関係的意味、形式、タスクの内容から分析し、考察する。第5章、第6章では、静的述語の中止形について述べる。第5章では、イ形容詞について動詞と同様に、関係的意味、形式、タスクの内容から分析し、考察する。第6章では、第5章のイ形容詞の分析結果を踏まえながら、ナ形容詞と述語名詞の中止形の調査結果を示し、静的述語全体の記述を行う。第7章では、結論として、本研究が明らかにしたことと今後の課題について述べる。

第2章

動詞による中止形接続について

—関係的意味と形式の相関—

1. 本章の目的

本章では、上級日本語学習者の動詞中止形の使用の特徴について、主に叙述文における関係的意味に注目し、日本語母語話者と量的・内容的な比較をしながら考察を行い、使用状況を明らかにする。「関係的意味」とは、「先行節（の中止形の語）が後続句節（の述語）の表す事柄に対して、どのような意味を担っているか」（津留崎 2003b:151）をいう。

なお以下においては、高橋ほか（2005）にならい、「連用形」を「第1中止形」、「テ形」を「第2中止形」と呼ぶ。

2. 先行研究

日本語教育学における中止形の研究は、動詞の「テ形」の誤用例分析に重点を置いたものと、近年特に質・量ともに整ってきた、日本語母語話者と学習者による作文コーパスの調査・分析によるものとに大別される。誤用分析の研究では、まず、「テ形」による「原因・理由」・「継起」の用法について分析を行ったものに、吉田（1994）、吉永（2006）がある。また、漫画を見せてそのストーリーを説明させ、そこで中止形の使用を考察したものに田代（1995）、渡邊（1996）がある。さらに、「作文対訳DB⁹」という学習者作文コーパスを使って中国語母語話者の誤用傾向を調査した研究として塩入（2012）が挙げられる。これらにおいて、特に誤用の要因についての研究は、継起、原因・理由、条件といった意味の側面、動作主体の異同、文の切れ続きといった観点から進められてきた。

次に、近年の日本語母語話者と学習者による質・量が比較的整えられた作文コーパスの調査・分析を行ったものとしては、橋本（2015）、庵・宮部（2017）がある。橋本（2015）では、「YNU 書き言葉コーパス」の日本語学習者の作文をデータとし、そこに現れた形態素や表現の出現頻度をもとに、学習者に指導すべき項目について検討している。そこでは、接続助詞についても言及されており、「て・で」は、最も出現頻度の高いものとの調査結果がある。しかし、形態素解析（UniDic-1.3.12 Mecab 版）により形式を抽出しているため、出現数の中には、補助動詞の「テ形」も含まれているようである。

⁹ 『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース（ver.2）』（国立国語研究所、2001）

庵・宮部（2017）は、「JCK 作文コーパス」¹⁰を調査し、複文の意味類型ごとの分布を明らかにしている。そこでは、複文の意味的類型として、「並列、継起、条件、原因・理由、逆接・対比、時、目的、その他」という8つの類型を設定している。中止形については、「て」の他に「なく（て）」「ず（に）」という否定形式も取り上げられている点は注目されるが、連用中止節については「省略する」（p. 61）とある。また、「継起」と「原因・理由」の意味類型を担う形式としては、中止形は対象形式として取り上げられてはいない¹¹。

以上のように、中止形に関しては研究が多いものの、形式・関係的意味・作文タスクといった観点からの網羅的な調査はまだ少なく、日本語母語話者と学習者との比較調査としても、記述が十分であるとはいえない。

本章では「YNU 書き言葉コーパス」を調査対象とし、日本語母語話者と学習者でどのような使用の特徴が見られるのかについて、主に叙述文における関係的意味を分析の観点とし記述を行う。記述は、用例の大部分を占める叙述文を中心に行うが、叙述文以外のムードについても触れることとする。それにより、上級日本語学習者の文法能力がどのように日本語母語話者に近接しているのか、また、不自然な使用の原因は何かについて明らかにしたい。

3. 関係的意味の種類とその特徴

述語の中止形が担う関係的意味について詳細な記述を行っている研究として、津留崎（2003a）が挙げられる。津留崎は、従来の中止形の研究は動詞述語に偏っており、形容詞など静的述語の中止形の研究が立ち後れていることを指摘し、形容詞中止形が表す関係的意味を明らかにしている。また、動詞中止形との相違点にも言及し、品詞に関わらず分析できる枠組みを提示している。そこでは、形容詞の中止形の表す関係的意味を、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈》《解説》《評価》《副状態》の8つに分類している。その際に、形容詞が主に主体の特性と状態を表すことがその中止形の性格と関わりが深いとし、「時間的局在性」¹²を分析の観点として取り入れている。具体的には、奥田（1996）、佐藤（1997）、工藤（2001）をもとに、文の表す対象的な内容（＝コトガラ）を、次の表のように時間軸上に局在するデキゴトと時間軸上に局在しない恒常的な特徴に分けている。

デキゴト			特 徴			
運動（動作・変化）	状 態	一時的存在	恒常的存在	特 性	関 係	質

（津留崎 2003a: 10 再掲）

¹⁰ 「JCK 作文コーパス」とは、日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者がそれぞれ書いた計180本の作文コーパスである。学習者の日本語レベルは、JLPTのN1相当以上の力を持つとされており、2000字以上の「説明文」、「意見文」、「歴史文」という三つのジャンルの作文を収めている。詳細については <http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>を参照のこと。

¹¹ 「継起」としては、「てから、たあと、まえ」の3つ、「原因・理由」としては「から、ので、ために、のだから、からこそ、以上」が取り上げられている。

¹² 工藤（2014）にて整理され、現在では「時間的限定性」と言われることが多い。

これらのコトガラの内容が先行句節と後続句節として組み合わせられたとき、さまざまな関係的意味が生まれる。たとえば、「特性－特性」という組み合わせの場合、「花子は優しくて明るい」のように、特徴を表す《並列》の文となる。また、「状態－運動」という組み合わせの場合、「痛くて声を上げた」のように、デキゴトを表す《原因》の文となる。このような分析を通じ、津留崎は形容詞中止形の表す関係的意味と、時間的局在性との関わりを明らかにしている。本研究では、日本語母語話者と学習者ではこの組み合わせかたに違いが出る可能性があるのではないかと考え、分析の観点とすることにした。

津留崎が示した関係的意味の分類は、形容詞述語を分析した結果によるものだが、時間的局在性において動詞述語は、基本的に「運動」を表し、それ以外の場合も「状態」「存在」「特性」「関係」の範囲に収まるため、動詞述語の関係的意味の枠組みとしてそのまま用いることができる。

そこで、ここではさきに挙げた 8 つの関係的意味の特徴を、津留崎による表「形容詞中止形の表す関係的意味と先行・後行句節の組み合わせ及び主体の異動」(2003:27)を参考に、動詞述語(「運動」)についての部分を加えて表 1 のように整理した。各関係的意味の特徴は津留崎(2003a)による。例文は、津留崎を参考に動詞述語を使い作例したものである。例文末の()には文の内容が特徴を表すかデキゴトを表すかを示した。

表 1 動詞中止形の表す関係的意味と先行・後行句節の組み合わせ及び主体の異同

関係的意味とその特徴	先行句節と後続句節のコトガラの組み合わせ・例文	主体
《並列》 中止形述語と後続述語が意味的にも構文的にも対等である。先行・後続句節の入れ換えが可能。	特性－特性 「花子はしっかりしていて、明るい。」(特徴) 状態－状態 「その部屋には人影も見え、物音も聞こえた。」(デキゴト) 運動－運動 「花子が料理を作り、太郎が飲み物を準備した。」(デキゴト)	異・同
《前提》 後続句節において述べられる内容が、先行句節において述べられた内容を前提として成り立っている。先行句節と後続句節の順序を入れ替えると不自然。	特性－特性 「その子はやせていて、幼さを残している。」(特徴) 特性－運動 「父はしゃれていて、毎日ネクタイを変えていた。」(特徴) 存在－特性 「そのカニにはハサミがふたつあって、一方が他方より大きい。」(特徴) 存在－存在 「その家は母屋がふたつあって、納屋もある。」(特徴) 存在－状態 「昔々、天国に美しい女性がいて機織りをしていた。」(デキゴト) 状態－状態 「山々は吹雪き、窓の外は何も見えなかった。」(デキゴト)	異・同

《先行事態》 先行・後続句節において述べられる二つのデキゴトが継起関係となる。	状態－運動 「安心して、すぐ帰宅した。」(デキゴト) 運動－運動 「ご飯を食べて、お風呂に入った。」(デキゴト) ※運動－運動の場合は、同一主体でどちらも意志動詞か、異主体でどちらも無意志動詞になる¹³。	異・同
《原因》 先行・後続句節が因果関係を持つ。下位分類として、二つのデキゴトに因果関係と時間的先後関係がある《先行原因》、先に述べられる内容が後に述べられる内容が想定できる《条件》、後続句節が判断を述べ、先行句節がその根拠を表す《根拠》がある。	先行原因： 状態－運動 「くたくたに疲れて、ベッドに倒れ込んだ。」(デキゴト) 運動－運動 「バスに乗り遅れて、遅刻した。」(デキゴト) ※運動－運動の場合、どちらか一方が無意志動詞でなければならない¹⁴。	異・同
	条件： 特性－特性 「花子はしっかりしていて人望がある。」(特徴) 状態－状態/繰り返し 「足がずきずきと痛み、ゆっくりしか歩けない。」(デキゴト)	異・同
	根拠： 特性－判断 「歴史に精通していて、博識だ。」(特徴) 状態－判断 「強い香水が匂って、大嫌いだった。」(デキゴト) 運動－判断 「それは五色に輝き、きれいなものだった。」(デキゴト)	同
《注釈》 語り手が後続句節の具体的な内容から抽出し判断した特性や状態を、聞き手への注釈として述べる。	特性－状態/運動/繰り返し 「古典に精通していて、よく文学の講師をつとめている。」(特徴) 運動－運動 「彼女は口悪く罵って、二度と来るなと言った。」(デキゴト)	同
《解説》 後続句節の内容に対し、聞き手に向けた解説を述べる。《関係解説》は主体と他との関係を述べ、《原理解説》は、デキゴトの原因や原理を述べる。	関係解説： 関係－名詞述語/特性/運動 「体格は父にあやかって立派だ。」(特徴) 関係－運動/習慣 「兄とは違って、弟はゲームばかりしている。」(デキゴト)	同
	原理解説： 特性－運動 「彼はかなり身長があつて、私を見下ろすような形になった」(デキゴト)	同
《評価》 陳述副詞を含む先行句節が、後続句節の内容に対する語り手の心的態度を表す。前置きの陳述成	特性－運動 「小学校高学年にもなると、さすがにしっかりしていて、よく手伝いをする。」(特徴) 存在－状態 「その小さな店は案内客もいて、こみあっていた。」(デキゴト)	同

¹³ 仁田 (1995:107) の指摘による。

¹⁴ 仁田 (1995:111) の指摘による。

分となる。先行句節は主観性が《注釈》よりさらに強い。		
《副状態》 主体の主たる状態や動作が後続句節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を、先行句節において述べる（動詞中止形では「付帯状況」とされ、動作の様子を詳しく述べる）。	状態－状態/運動 「花子は震えて、涙を流している。」（デキゴト） 運動－状態/運動 「ベンチに座って、話をする。」（デキゴト）	同

以上、形容詞中止形の場合における津留崎が示した 8 つの关系的意味について、動詞中止形に置き換えた場合に述語のタイプの組み合わせがどうなるかの一覧を示した。

なお、津留崎（2003a）は、小説をデータにしたものだが、動詞中止形と形容詞中止形の違いについて、すでに以下の点が指摘されている。

- ①《先行事態》《先行原因》《副状態》の先行・後続句節は、ともに時間軸上のデキゴトが述べられる時間的な関係であり、動詞の中止形の用例に多い。
- ②形容詞は特性を表すため、先行・後続句節の間に、非時間的な関係をもつ例が多く存在する。従来、動詞では指摘されなかった《注釈》《解説》《評価》の例が多く現れる。
- ③動詞と形容詞の中止形は、非典型的な例も含めると、表す关系的意味は品詞の違いに関わらず、かなり重なっている。

以上の点について、今回の作文コーパス調査の結果とも比較したいと考える。

4. 調査

4.1 調査対象コーパスについて

本研究の調査対象である「YNU 書き言葉コーパス」は、横浜国立大学（Yokohama National University）の留学生（韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 30 名）と、日本人大学生（30 名）を対象とし、場面や読み手の異なる 12 の作文タスクを課したものである。90 名×12 編タスクの計 1080 編の作文がテキストファイルで収められており¹⁵、量・質ともに均整のとれたコーパスであるといえる。留学生の日本語レベルは、大学の講義を受けること

¹⁵ 母語別の総形態素数は、日本語母語話者 79447、韓国語母語話者 81356、中国語母語話者 88828 である。

ができ、一般的には上級と称されるレベルである¹⁶。

4.2 調査方法

調査対象とした形式は、動詞の第1中止形と第2中止形の肯定形である。第2中止形については、「水着を着て（泳ぐ）」といった副動詞（高橋ほか2005）も含む。対象から外したのは、「急いで」「きわめて」などの副詞、「正直言って」などの固定化した陳述語、「～ては」「～てから」のように第2中止形に助詞がついたもの、「（～に）に関して」「（～に）ついて」などの後置詞、「遅れてごめん。実は昨日、飲み過ぎて。」のような言いさし文¹⁷である。

調査方法としては、まず「YNU 書き言葉コーパス」の1080の作文データ（テキストファイル）を1文ずつ縦に並べたExcelファイルを作成し、中止形の現れた文を目視にて抽出した。次に出現位置、述語のモード、ヴォイス、アスペクト形式などの文法的特徴及び関係的意味にもとづきタグ付けを行い、母語・形式別に集計を行った。

関係的意味の分類について、《注釈》《解説》《評価》の3つは、津留崎（2003a）において先行句節が「陳述成分¹⁸」に近づくことが共通の特徴として位置づけられているため、本研究では、集計上は《注釈等》として一つにまとめた。なお、関係的意味は、相互に連続するものであり、《先行事態》か《原因》か、《並列》か《前提》かなど、分類の難しい用例もあるが、筆者の判断でいずれかに分類した。また学習者の用例の中には、語彙的意味から関係的意味は類推できるものの、不自然な用例も現れた。これらについても集計に含めたうえで、その要因について考察を行う。

以下、次節において、概観（4.3.1）、叙述文における動詞中止形の使用状況（4.3.2）、叙述文以外のモードにおける使用状況（4.3.3）、の順に調査結果を述べる。

4.3 調査結果

4.3.1 概観

まず「YNU 書き言葉コーパス」全体において、動詞の第1中止形と第2中止形がどのような割合で出現するかについて概観を示すと、表2のようになる。

表2 母語・形式別動詞中止形の使用回数と使用率

	第1中止形 (～シ)	第2中止形 (～シテ)	中止形合計
日本語	401(44%)	508(56%)	909(100%)
韓国語	225(27%)	617(73%)	842(100%)
中国語	226(21%)	835(79%)	1061(100%)

¹⁶ 調査対象の留学生60名のうち、7割の44名が1級（N1を含む）合格者であるとされている。

¹⁷ 「言いさし文」とは、「ちょっと来てくれる？心細くて。」（白川2009:1）のように従属節のみで終結した文のことである。

¹⁸ ここでは、津留崎（2003a）の「「陳述」を文の叙述内用に対する語り手の態度とし、文中で陳述を表す成分を陳述成分」とする（p.29）という定義にしたがう。

日本語母語話者については、第1中止形より第2中止形の使用率が高くなっているが、両者に量的な差はあまりないといえる。一方、学習者の場合は、韓国語母語話者、中国語母語話者ともに第1中止形の使用は20%台にとどまるが、第2中止形の使用は70%台を占め圧倒的に多くなっている。カイ二乗検定¹⁹の結果、1%水準で有意差が認められ、残差分析の結果、日本語母語話者の第1中止形の使用が有意に多く、韓国語母語話者・中国語母語話者の第2中止形の使用が有意に多かった ($\chi^2(2)=56.809$, $p<.01$)。このことは、先行研究での指摘と一致するが、さらに明確な比率として明らかになったといえる。

次に、後続節のモード別の集計を見る。今回は後続節が終止節（主節）の場合に限定している。文のモードは、「叙述」「働きかけ」「疑問」「希望」「意志」「遂行（感謝・謝罪）」の6種とした。それぞれの例文を示しておく。例文はコーパス中の日本語母語話者によるものである。

〈叙述〉私が以前子どもを産んだ際、市民総合病院にお世話になり、少しでも体調が悪くなった時、気軽に行くことができました。 (タスク_06_J007 日本語)

〈働きかけ〉

みなさんも、毎日一生けんめいがんばって、7月7日の日におねがいごとをかなえてもらいましょう。 (タスク_12_J001 日本語)

〈疑問〉3か月も入院してて、そろそろ嫌になりはじめてませんか？

(タスク_05_J006 日本語)

また、リハビリに 5時間かけて毎日通わなければならないのでしょうか。

(タスク_06_J016 日本語)

〈希望〉病院が閉鎖したあとの、この町のこと、住民のことを考えて、結果を出してほしいです。 (タスク_06_J003 日本語)

〈意志〉以上のことを踏まえ、私たち総会では以下のことを提案します。

(タスク_04_J007 日本語)

近々美味しい物でも持って会いに行くよー！

(タスク_05_J028 日本語)

〈遂行（感謝・謝罪）〉

いつもご指導いただき、ありがとうございます。 (タスク_07_J030 日本語)

突然メールを差し上げて、申し訳ありません。 (タスク_01_J012 日本語)

結果は表3のようになった。

¹⁹ js-STAR version 9.0.4j (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用した。

表 3 後続節のムード別使用回数と使用率

ムード 母語・形式		叙述	働きかけ	疑問	希望	意志	遂行	合計
日本語	第 1 中止形	244 (97%)	2 (1%)	1 (0%)	0 (0%)	2 (1%)	3 (1%)	252 (100%)
	第 2 中止形	227 (88%)	16 (6%)	4 (2%)	5 (2%)	3 (1%)	4 (2%)	259 (100%)
	中止形合計	471 (92%)	18 (4%)	4 (1%)	5 (1%)	5 (1%)	7 (1%)	510 (100%)
韓国語	第 1 中止形	135 (94%)	4 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1%)	8 (5%)	149 (100%)
	第 2 中止形	334 (87%)	21 (5%)	3 (1%)	3 (1%)	15 (4%)	8 (2%)	384 (100%)
	中止形合計	469 (88%)	25 (5%)	3 (1%)	3 (1%)	17 (3%)	16 (3%)	533 (100 %)
中国語	第 1 中止形	126 (94%)	2 (2%)	2 (2%)	0 (0%)	2 (2%)	1 (0%)	133 (100%)
	第 2 中止形	465 (85%)	33 (6%)	9 (2%)	3 (1%)	8 (1%)	30 (5%)	548 (100%)
	中止形合計	591 (87%)	35 (5%)	11 (2%)	3 (0%)	10 (1%)	31 (5%)	681 (100%)

表によると、後続節のムードのうち、日本語母語話者・学習者とも「叙述」が中心となっており、いずれも全体のほぼ 9 割を占めている。残りの 1 割にあたる「叙述」以外のムード（働きかけ・疑問・希望・意志・遂行）の内訳を見てみると、母語話者・学習者間に量的な差はあまりない。ただ、韓国語母語話者による「意志」と、韓国語・中国語両母語における「遂行（感謝・謝罪）」の用例が若干多かった。また、蓮沼・前田・有田（2001）で指摘されているように、動詞中止形の後続節に未実現の意志や働きかけの表現は使うことができないなどのムード制限があるが、その制限に反した次のような不自然な用例が複数見られた。

- (1) 最近は急に寒くなって風邪に気を付けてください。

(タスク_05_C038_中国語下位群)²⁰

- (2) その本が図書館にはなく先生の研究屋（→室）にあることを知り、お借り願ひします。

(タスク_01_K038_韓国語中位群)

このような叙述以外のムードにおける問題点については、4.3.3 で後述する。

4.3.2 叙述文における使用状況

4.3.2.1 関係的意味別の使用状況

ここでは、叙述のムードにおける関係的意味別の使用回数と使用率を見る。関係的意味の分類は、3 節で述べたように、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈等²¹⁾》《副状態》の 6 分類とした。結果は表 4 のようになった。なお、図 1 は、第 1 中止形における母語別・関係的意味別使用率を表した図、図 2 は、第 2 中止形における母語別・関係的意味別使用率を表した図である。

²⁰ 学習者による例文は、タスク番号・個人識別番号・母語、また必要に応じてレベル（グループ）の情報を記す。

²¹ 「注釈」のほか、「解説」「評価」も含む。

表 4 関係の意味別動詞中止形の使用回数と使用率

関係の意味 母語・形式		並列	前提	先行事態	原因	注釈等	副状態	合計
日本語	第 1 中止形	40 (16%)	28 (12%)	114 (47%)	50 (21%)	3 (1%)	8 (3%)	243 (100%)
	第 2 中止形	14 (6%)	9 (4%)	97 (43%)	55 (24%)	3 (1%)	49 (22%)	227 (100%)
韓国語	第 1 中止形	20 (15%)	6 (5%)	62 (48%)	36 (28%)	2 (2%)	4 (3%)	130 (100%)
	第 2 中止形	9 (3%)	16 (5%)	148 (45%)	107 (33%)	1 (0%)	46 (14%)	327 (100%)
中国語	第 1 中止形	26 (20%)	8 (6%)	58 (44%)	29 (22%)	6 (5%)	4 (3%)	131 (100%)
	第 2 中止形	32 (7%)	20 (4%)	216 (48%)	122 (27%)	8 (2%)	56 (12%)	454 (100%)

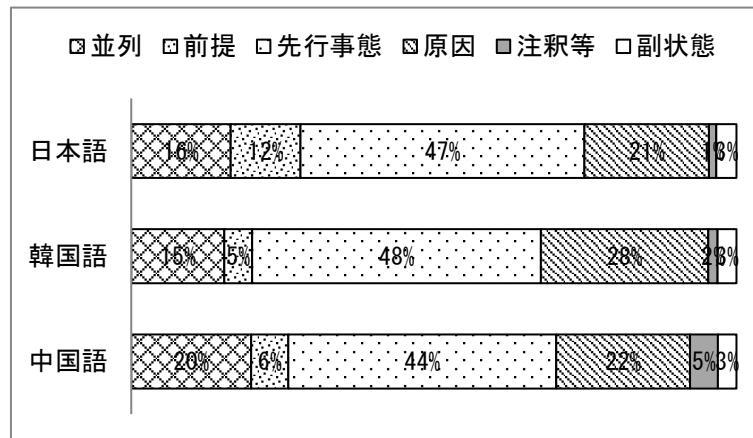


図 1 関係の意味別・動詞第 1 中止形の使用率

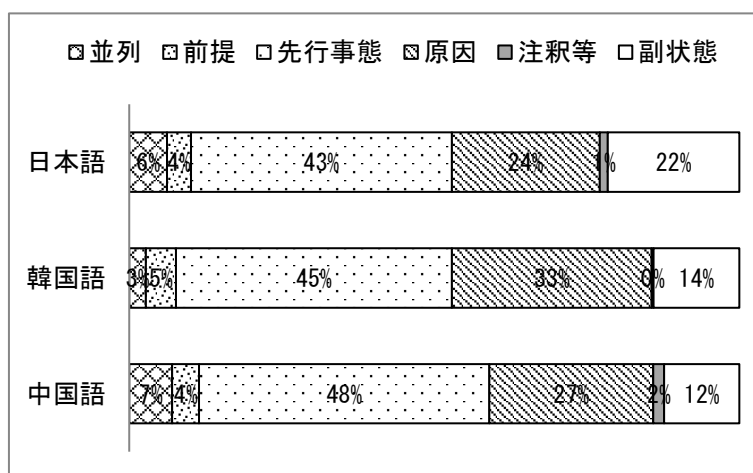


図 2 関係の意味別・動詞第 2 中止形の使用率

まず、日本語母語話者について、使用率の高いものを順に挙げると、第1中止形では《先行事態》、《原因》、《並列》となる。《前提》についても学習者と比較すると高い割合といえる。一方、第2中止形では、《先行事態》《原因》、《副状態》の順となる。第2中止形に《副状態》が多いのは、「魚を焼いて食べる」のような手段・方法を表す例が多いため、これらは第1中止形では置き換えができない用法（「*魚を焼き食べる」）であるため、結果は妥当であると考えられる。

学習者について見てみると、使用率の高いものの順位は、第1中止形、第2中止形ともに母語話者とまったく同じ結果となった。このことは、上級日本語学習者の使用傾向が母語話者と近いものであることを示唆している。津留崎（2003a）における、《先行事態》《原因》《副状態》が動詞述語に特徴的であるという指摘は、本コーパスにおいて、日本語母語話者・学習者ともに確認されたといえる。

次に、それぞれの関係的意味別に、第1中止形と第2中止形の比率をみる。図3が「並列」、図4が「前提」、図5が「先行事態」、図6が「原因」、図7が「注釈など」、図8が「副状態」である。

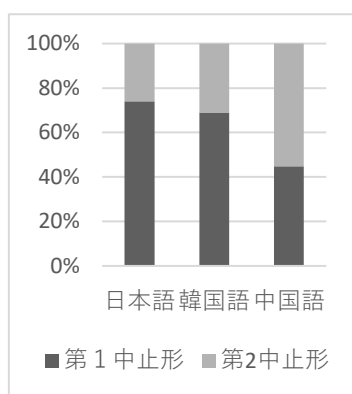


図3 並列

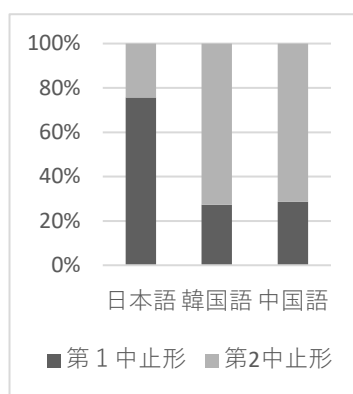


図4 前提

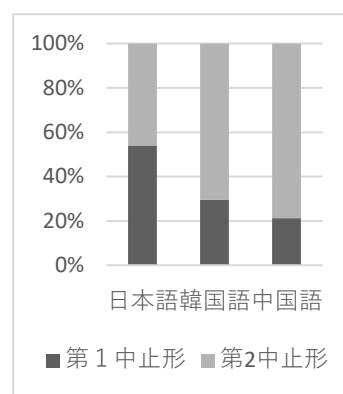


図5 先行事態

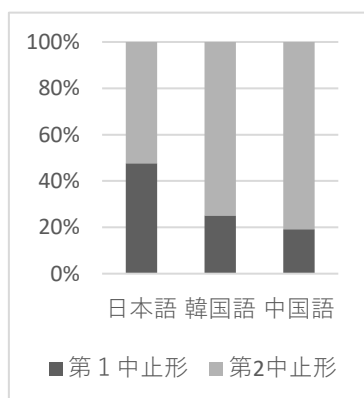


図6 原因

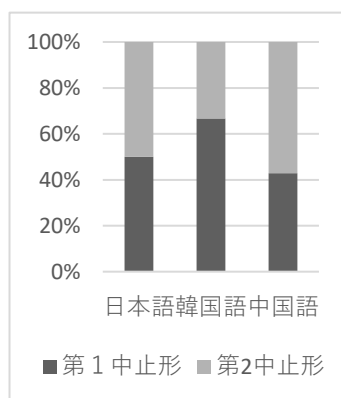


図7 注釈等

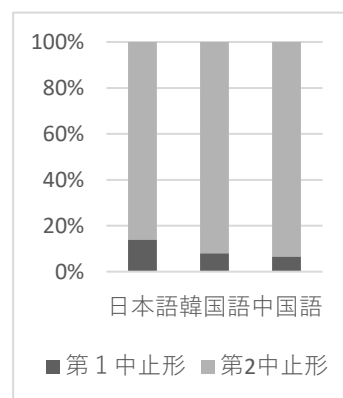


図8 副状態

日本語母語話者の特徴としては、《並列》と《前提》において第1中止形が多く用いられ、

《先行事態》《原因》においても、やや第1中止形の使用率が高い。一方、《副状態》では第2中止形の使用が中心となる。学習者の場合は、《並列》を除くと、すべて第2中止形の使用が中心である。なお《注釈》に関しては用例数が非常に限られているため、ここでは議論から除く。

日本語母語話者と学習者と比較した場合、特に注目されるのは、図4の《前提》である。日本語母語話者は第1中止形の使用が7割を超えているのに比べ、学習者の場合は2割強にとどまり、その差が顕著である。図3の《並列》においては、学習者も日本語母語話者と同様に第1中止形の使用が多くなっていることと対照的である。

なお、《前提》については、形容詞の中止形を分析した津留崎（2003a）において、ク中止形（第1中止形）のほうがクテ中止形（第2中止形）に比べ非常に多いことが指摘されているが（p. 26）、今回の日本語母語話者の結果は動詞においても同様のことがいえることがわかった。その要因として、《前提》で用いられる動詞の特徴として、静的述語の「存在」をあらわす「ある」の頻度が高いことが指摘できる。日本語母語話者の使用には次の例文のような、「ある」の第1中止形「あり」の使用が顕著であった。

- (3) この病院には、産婦人科やリハビリテーション科といったものがあり、これらは、近隣の町には、ありません。（タスク_06_J003 日本語）
- (4) 世界遺産に指定されているお寺がたくさんありどれも一つ一つ特徴があって見えて飽きません。（タスク_07_J001 日本語）

母語別に、《前提》における「ある」の使用回数をまとめると表5のようになる。

表5 「前提」における動詞「ある」の中止形の使用回数

	第1中止形 「あり」	第2中止形 「あって」	合計
日本語	19 (28)	1 (9)	20 (37)
韓国語	2 (6)	13 (16)	15 (22)
中国語	0 (8)	9 (20)	9 (28)

() 内は、全使用数

表5によると、日本語母語話者は前提で使用された全動詞37例のうち、20例（67%）が「ある」であり、そのうち19例が「あり」という第1中止形であった。韓国語母語話者の場合、全動詞22例中15例（68%）が「ある」で日本語母語話者と同様の割合であるが、そのうち「あり」は2例と少なかった。中国語母語話者は全28例中「ある」は9例（32%）あるが、そのうち「あり」の使用はなかった。このことが、日本語母語話者と学習者で、《前提》における第1中止形の使用差の要因となっていることが指摘できる。

しかし、《並列》と《前提》で学習者の中止形の使い分けに差があったことについては、明らかになったとはいえないため、引き続き調査する必要がある。

4.3.2.2 学習者に見られた不自然な用例について

ここでは、関係的意味の観点から、学習者に見られた不自然な用例について記述しておく。塩入（2012）では、「て形」は日本語の文接続の際にとりあえず学習者が選択する最も安易な形式であり、誤りも多くなっている。」（p. 26）と指摘されているが、本調査においても、第2中止形の使用例に不自然なものが多く見られた。ここでは比較的数の多かった《先行事態》と《原因》について取り上げ、先行句節と後続句節の述語のタイプの組み合わせに注目してみていく。まず、《先行事態》の用例では次のような不自然な例があった。

(5) そして、昔の朝鮮時代に王が住みながら国政を行った古宮は地下鉄3号線のギョ
ンボクグン駅でお降りになってごらんできます。（タスク_07_K036 韓国語上位群）

(6) 留学生会の皆で投票して、大部分の留学生は奨学金の増えるのが支持します。
（タスク_04_C025 中国語下位群）

《先行事態》の場合の組み合わせは通常「状態－運動」「運動－運動」となるが、(5)は「運動－特性」となっている。もし、「お降りになれば」「お降りになると」のようにすると許容されるだろう。(6)については、「運動－運動」となっており述語のタイプの組み合わせとしては可能であるが、先行・後続句節の主体が異主体でかつどちらも意志動詞となっているために不自然になっている。

次に、《原因》については次のような不自然な用例が見られた。先行節と後続節の間に因果関係があると思われるものである。

(7) それ以外には留学のため日本へ来て留学生達に対しては一番重要なのは学習で
す。（タスク_04_C026 中国語下位群）

(8) しかし、「織女」は結婚しなければならない年齢になって、相手がいない。
（タスク_12_C020 中国語下位群）

(7)の「運動－判断」、及び(8)「運動－存在」はいずれも、《原因》の組み合わせとしてはないものであるため、不自然に感じられる。また、いずれも因果関係であることを明示したほうがよいところで、中止形を用いることにより、曖昧になっていることも指摘できる。(7)は、「留学に来た{から／からには／ので}、一番必要なのは学習だ」、(8)は、「結婚しなければならない年齢になった{が／のに}、相手がいない」のようにすると明確になるだろう。相手に伝わる文章を書くという目的においては、論理関係を表す接続表現、たとえば「～ので」「～ために」「～のに」などと合わせ、いずれを選択するかという判断が上級学習者には必要となってくる。

以上、関係的意味の枠組みを観点に使用状況を観察した。

4.3.2.3 動詞中止形のヴォイスとアスペクトについて

形容詞と異なり、動詞にはヴォイスやアスペクトがあるため、中止形にもそれが反映される。(9)は受動形、(10)は継続相の例である。

(9) お寿司は、世界でも sushi と言われ、日本の代表的な料理として親しまれています。
(タスク_09_J007 日本語)

(10) 若者は牛を持っていて、せっせと畑をたがやしていました。
(タスク_12_J009 日本語)

ここでは、動詞の中止形におけるヴォイスとアスペクトの現れ方について、日本語母語話者と学習者を比較する。なお、今回はヴォイスについては受動形と非受動形の使用比率、アスペクトについては完成相と継続相の使用比率についてのみ調査を行った。まず、受動形・非受動形の別による集計結果は表5のようになった。

表6 動詞中止形のヴォイス（受動形・非受動形）の使用数と使用率

ヴォイス 母語・形式		受動形	非受動形	合計
日本語	第1中止形	10 (4%)	233 (96%)	243 (100%)
	第2中止形	11 (5%)	216 (95%)	227 (100%)
	中止形合計	21 (4%)	449 (96%)	470 (100%)
韓国語	第1中止形	2 (2%)	128 (98%)	130 (100%)
	第2中止形	26 (8%)	302 (92%)	328 (100%)
	中止形合計	28 (6%)	430 (94%)	458 (100%)
中国語	第1中止形	4 (3%)	127 (97%)	131 (100%)
	第2中止形	16 (4%)	439 (96%)	455 (100%)
	中止形合計	20 (3%)	566 (97%)	586 (100%)

日本語母語話者・学習者のいずれも、中止形合計については非受動形が90%以上を占めている。ただし、学習者の用例の中には、次のような不自然な例が存在する。

(11) 中身は肉、野菜、海産物などで作り、すごく豪華な味です。
(タスク_09_C010 中国語中位群)

(12) この牽牛と織女が渡った橋、鳥と鵲が作ったといって「鳥鵲橋」と呼ばれています。
(タスク_12_K009 韓国語上位群)

(13) 新入社員歓迎会の時、鈴木先輩がみんなに飲ませてすごく酔っぱらいになった。
(タスク_08_C022 中国語下位群)

(14) 当然、父の会社が倒産されて、うちはもう家もなくなった時があるんだ。
(タスク_05_K020 韓国語下位群)

(11) (12) (13) は、受動にすべきところでそうっていない例である。一方 (14) は、「倒産して」と能動にすべきところ、受動になっている例である。この例の場合は、学習者は「倒産する」ことを被害と考え、受動形を使ったと推測できる。よって初級者には見

られない上級者ゆえの誤用だと思われる。

次に、アスペクト形式について、完成相（スル）・継続相（シテイル）の別による集計結果は表 7 のようになった。

表 7 動詞中止形のアスペクト形式（完成相・継続相）の使用数と使用率

母語・形式 \ 相		完成相	継続相	合計
日本語	第 1 中止形	196 (92%)	18 (8%)	214 (100%)
	第 2 中止形	201 (93%)	15 (7%)	216 (100%)
	中止形合計	397 (92%)	33 (8%)	430 (100%)
韓国語	第 1 中止形	112 (97%)	4 (3%)	116 (100%)
	第 2 中止形	295 (98%)	6 (2%)	301 (100%)
	中止形合計	407 (98%)	10 (2%)	417 (100%)
中国語	第 1 中止形	124 (97%)	4 (3%)	128 (100%)
	第 2 中止形	412 (96%)	19 (4%)	431 (100%)
	中止形合計	537 (96%)	23 (4%)	560 (100%)

表 7 によると、日本語母語話者・学習者ともに、完成相が 9 割を超えている。中止形の合計数について、日本語母語話者と学習者に有意な差があるのかをしてみる。表 8、9 は表 7 から抜粋した数値である。

表 8 日本語母語話者・韓国語母語話者

	完成相	継続相
日本語	397	33
韓国語	407	10

表 9 日本語母語話者・中国語母語話者

	完成相	継続相
日本語	397	33
中国語	537	23

まず、表 8 について、カイ二乗検定の結果、日本語母語話者の方が韓国語母語話者より継続相の使用が多かった ($\chi^2(1) = 11.160$, $p < .01$)。また表 9 について、日本語母語話者の方が中国語母語話者より継続相の使用が多かった ($\chi^2(1) = 5.151$, $p < .05$)。結論として、学習者は、日本語母語話者より継続相の使用が少ないことが明らかになった。学習者の用例の中には、継続相にすべきところに完成相を使い不自然になっているものが見られた。

(15) この学期〇〇先生の環境分野の授業を取って最後レポートを書かなければいけないんだ。
(タスク_02_C008 中国語下位群)

(16) 面白いのは、先輩がその時からずっと寝て今日の朝 10 時に起きたということがある。
(タスク_08_K020 韓国語下位群)

一方で、完成相とすべきところに継続相を使用しているために、不自然に感じられる用

例も存在する。

(17) で歌っている最中に倒れて気を失っていて病院まで搬送された。

(タスク_08_C040 中国語中位群)

(18) 販売量は 2012 年までこの 2 年間を経て、2004 年の販売量を戻っていて、100 千台くらい販売していた。

(タスク_03_C020 中国語下位群)

以上の事例は、ヴォイス及びアスペクトのそれぞれの習得と関連させて観察していく必要がある。

4.3.3 叙述以外のムードについて

今回の調査によると、4.3.1 において表 3 で見たように、中止形接続を含む文の後続節は叙述のムードが 9 割を占めており、「疑問」「意志」「働きかけ」といった叙述以外のムードは 1 割にとどまった。ただ、先行研究で指摘されているように、叙述以外のムードには、学習者による誤用例が現れやすい。ここでは、コーパス中に現れた「疑問」「希望」「意志」「働きかけ」「遂行（感謝・謝罪）」のムードについて、順に見ていくことにする。

(1) 疑問のムード

ここでの「疑問」とは、質問の他に、疑似疑問文も含まれている。まず、日本語母語話者の用例は、次のような「副状態」に限られていた。

(19) また、リハビリに 5 時間かけて毎日通わなければならないのでしょうか。

(タスク_06_J016 日本語 再掲)

一方、学習者には不自然な用例が見られた。

(20) いきなりメールして、元気？ (タスク_02_C002 中国語上位群)

(21) みんなこの話を知り、どう思うでしょうか。 (タスク_12_C043 中国語中位群)

(22) 先生の研究室にこの本があると聞いて、先生にこの本を借って（→借りて）もよろしいでしょうか？ (タスク_01_C025 中国語下位群)

いずれも中国語母語話者によるものである。

(2) 希望のムード

「したい」などの希望のムードについて、日本語母語話者の例文は以下のように「副状態」に限られていた。

(23) ただ私は姉よりも少し心に余裕があるのでこの場を借りて訴えたい。

(タスク_06_J001 日本語)

- (24) 病院が閉鎖したあとの、この町のこと、住民のことを考えて、結果を出してほしいです。
(タスク_06_J003 日本語)

学習者の場合は、日本語母語話者の傾向と異なり、「原因」も見られた。

- (25) 実は今環境に関するレポートを書いていて、「環境学入門」という本を参考したいのです。
(タスク_01_K023 韓国語下位群)
- (26) さて、2011 年度を迎え、韓国人留学生会からのお願いをお伝えしたいと思います。
(タスク_04_K003 韓国語中位群)

不自然とまでは言えないが、若干、座りの悪さが感じられる。

(3) 意志のムード

「しよう」「する」などの意志のムードの文については、先の表 3 では、韓国語母語話者の使用数が比較的多いのが特徴的であった。たとえば、メールの前書きとして述べる文が多く見られた。

- (27) 田中先生にお願いがありまして、このようにメールします。
(タスク_01_K003 韓国中位群)
- (28) 伊藤先生がこの前僕に観光のおすすめをたのんでまして今メールします。
(タスク_07_K025 韓国語下位群)

ただ、次のようなやや不自然な例も見られた。

- (29) 私は早期英語教育はあまり良くないかと思って反対します。
(タスク_10_K009 韓国語上位群)

(4) 働きかけのムード

後続節が指示や依頼、勧誘といった働きかけのムードの文について、後続節が働きかけの場合、日本語母語話者については、次のように先行節が「副状態」を表すものがほとんどである。

- (30) また、駅の近くにもうどん屋さんはあるのですが、車を借りるなどして、駅から遠く離れた個人で経営しているお店にも行って見て下さい。
(タスク_07_J024 日本語)

ただ、一例のみ、先行節が原因になっているものがあつた。話し言葉的な文である。

(31) この本を使って、レポートやろうと思ってた、借してもらえない？

(タスク_02_J005 日本語)

学習者による不自然な用例は、先行節が原因を表している場合に多い。

(32) その本が図書館ではなく先生の研究屋にあることを知り、お借り願います。

(タスク_01_K038 韓国語中位群)

(33) 最近は急に寒くなって風邪に気がつけてください。

(タスク_05_C038 中国語中位群)

(5) 遂行（感謝・謝罪）のムード

ここでは後続節が「ありがとうございます」や「すみません」など感謝や謝罪の文を見る。表3では中国語母語話者による第2中止形での使用の割合が高かったが、次の例のように、自然な文であった。

(34) 突然メールを差し上げまして申し訳ありません。

(タスク_04_C0047 中国語上位群)

(35) この前本を貸してくださってありがとうございます。

(タスク_10_C047 中国語上位群)

不自然な例は少なかったが、次のような例も若干見られた。

(36) 突然メールを送って、大変失礼致します。 (タスク_01_C026 中国語下位群)

以上、叙述以外のムードについて見てきた。学習者については、下位群・中位群の学習者による不自然な例が観察された。特に、先行節が「原因」の場合であることが指摘できる。後続節が叙述以外の場合、日本語母語話者については「原因」のものは1例を除いて現れなかった。初級レベルに限らず、中・上級レベルにおいても指導の項目としておくのが望ましいであろう。

5. 本章のまとめ

本章では、「YNU 書き言葉コーパス」を対象とし、日本語母語話者と学習者の動詞中止形の使用の特徴について、特に先行研究で明らかになっていなかった関係の意味による使用状況について調査をした。その結果、上級日本語学習者は、日本語母語話者にかなり近い使用分布の特徴を示すことがわかった。

今回の調査で明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

- ① 日本語母語話者は、第1中止形の使用率が学習者に比べて高い。学習者の場合は、第2中止形の使用率が第1中止形のそれを大きく上回る。
- ② 後続節（終止節）のモードについて、日本語母語話者も学習者も「叙述のモード」が9割を占める。叙述以外のモードでは、学習者のほうが「働きかけ」での使用が多く、母語別にみると、韓国語母語話者は「意志」が多く、中国語母語話者は、「ありがとうございます」や「すみません」といった「遂行（感謝・謝罪）」が多い。
- ③ 関係的意味別の使用状況は、上級学習者は「前提」を除くと、日本語母語話者と似た傾向を示すことがわかった。日本語母語話者は「前提」において動詞「ある」の第1中止形「あり」の使用が顕著であった。学習者には不自然な用例が一部存在し、その要因としては述語のタイプの組み合わせに問題があることがわかった。
- ④ 動詞中止形における受動・非受動、また完成相・継続相の現れ方について量的な比較をしたところ、完成相・継続相に関して日本語母語話者と学習者の間に有意な差が見られ、日本語母語話者の継続相の使用が多かった。
- ⑤ 叙述以外のモードについて、学習者については、下位群、中位群の学習者による不自然な例が観察された。特に、先行節が「原因」の場合であることが指摘できる。

学習者による不自然な用例については、理解に支障をきたすほどではないと感じられるものもある。ただ、文脈の中で、より論理関係を明確にしたほうが相手に明確に伝わるといった場合は、そのような形式が選択できるように指導していくことも必要だろう。

今後の課題としては、次のことが挙げられる。まず、今回の調査で見られた学習者による不自然な用例についての分析をさらに精査し、その要因と自然な文を作るための指導法を提示することである。また、質問紙調査やインタビューなども行い、学習者が実際にはどのような意識で二つの中止形を使い分けているのかも調べる必要がある。さらには、今回扱えなかった関係的意味と作文タスク（グラフ説明、昔話、意見文などの「話題」との相関についても、明らかにしたいと考える。

第3章

動詞による中止形接続について

—タスクと形式の相関—

1. 本章の目的

本章では、「図書館に { 行って／行き } 本を借りた。」のような、動詞による中止形接続の二つの形式の使い分けについて、作文タスクとの相関について分析・考察を行う。ここでの作文タスクとは、「YNU 作文コーパス」における、読み手の親疎関係、伝達手段（メール、手紙、レポート）など、読み手や内容の異なる作文のことを指す。

両形式の差は、たとえば「第1中止形と第2中止形のはたらきは、それほどちがわない。前者は文章語的であって、はなしことばではあまりつかわない。」（高橋ほか 2005:128）というように説明されることが少なくない。また一方で、日本語記述文法研究会編（2008）では、並列および継起を表す場合は、テ形・連用形ともに用いられるが、原因・理由を表す場合にはテ形の方が用いられやすいこと、また付帯状況を表す場合はテ形が用いられ、連用形では継起の意味が強くなるといったことも指摘されている（pp. 287-289）。

日本語教育においてこの二形式については、主に中級レベルにおいて、書き言葉の指導の際に取り上げられる。そこでは、日本語の文章のスタイル（文体）はその文章の種類・内容や読む人に応じて書き分けること、中でも論文では連用中止形がよく使われることなどが指導される（友松 2008:29-30）。日本語学習者にとっては、前件・後件との意味関係に加え、文体までも考慮し二形式を使い分けることは、難しいことであることが窺える。

本章では、「YNU 書き言葉コーパス」を用い、日本語母語話者及び日本語学習者による動詞第1中止形と第2中止形（肯定形）について、作文タスクとの関連に注目し、計量的に調査・分析することでその使用実態を明らかにする。なお、一般的に、「連用形」、「テ形」という用語が用いられることが多いが、本研究においては、中止という機能を共有していることを重視し、高橋ほか（2005）にならい、「行き」の形を「第1中止形」、「行って」の形を「第2中止形」と呼ぶことにする。

2. 先行研究

ここでは、日本語教育的観点からの研究において本研究の調査と関連の深いものとして、田代(1995)、秋口・鄭(2002)、林(2005)を取り上げる。

まず、日本語学習者の第1中止形・第2中止形の使用について調査したものに、田代(1995)、秋口・鄭(2002)がある。いずれも、中国語母語話者・韓国語母語話者・日本語母

語話者を対象に、作文を書かせて調査を行っている。

田代(1995)では、中上級日本語学習者の文章表現の不自然さやわかりにくさは何によるものかを解明するために、被調査者(韓国語・中国語・日本語各母語話者 30 名)にセリフのない漫画を見せて、300 字程度のストーリー説明の作文を書かせ、比較を行っている。その結果、接続助詞類の使用において、日本語母語話者は「て」と連用接続を組み合わせて使っているのに対し、学習者、特に中国語母語話者に「て」への偏りが見られるとしている。その理由としては、中国語には接続を表す形式なしに文がつないでいけるため、「て」の使用範囲が母語話者より広いことが考えられることを挙げている。また、韓国語学習者については、「て」に該当する接続表現が存在するために「て」が多用されることが推測されるとしている。

秋口・鄭(2002)では、被調査者(中国語母語話者 10 名、韓国語母語話者 20 名、日本語母語話者 10 名)に 3 分程度の音声のないビデオを見せ、その内容を 400 字程度の作文にまとめさせている。そして、その中で場面展開の部分を抜粋し、テ形接続の数、視点、日本語母語話者、学習者それぞれに多い表現、といった観点から分析を行っている。このうち、テ形接続について、「日本語母語話者はテ形接続よりも連用中止形接続を多く用いるのに対して、学習者はテ形接続を用いる傾向があった」(p. 53)としている。

林(2005)は、書き言葉においてテ形のほうが多く出現するものにはどのようなものがあるかを明らかにするために、学習者が実際に書く機会の多い論述文(CASTEL/J の論説文(講談社)のデータを使用)でのテ形と連用形の使用実態を調査している。その結果、連用形よりもテ形の方が多く出現したものは、「A. 連用形が一拍のもの」「B. 文法的〈機能語〉」「C. 付帯状態」「D. 機能語的なもの」であるとしている。さらに林はテ形・連用形両形の意味・機能的差異に注目し、異なり語数 43 語を対象に動詞を分析し、動詞の違いが両形の使用差にどのように関与しているかという質的な特徴を明らかにしている。

以上のように、第 1 中止形・第 2 中止形の使用については、日本語母語話者に比べて、学習者は第 1 中止形の使用率が低いことが指摘されている。また、書き言葉においてテ形が多く出現する動詞についても詳細が明らかになっている。

これらの先行研究を踏まえ、本章では「YNU 書き言葉コーパス」を用い、動詞中止形について特に次の三点について調査結果を示したいと考える。

- ①先行研究で行われたストーリー説明以外の文章における使用について
- ②読み手の対象の違いによる中止形の現れ方について
- ③学習者のレベルと中止形の使用との相関について

調査対象の「YNU 書き言葉コーパス」は、日本語母語話者と日本語学習者の両方のデータが量的・質的にも整っており、また、複数のジャンルや、異なった読み手に対する「書く場面」が設定されているため、本研究の目的である、動詞の二つの中止形の使い分けを明らかにする際に、どのような要因が関連するのかを調査するのに適していると考ええる。

3. 調査

3.1 調査概要

本研究の調査対象である「YNU 書き言葉コーパス」は、留学生（韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 30 名）と、日本人大学生（30 名）を対象とし、場面や読み手の異なる 12 の作文タスクを課したものである。90 名×12 編タスクの計 1080 編の作文がテキストファイルで収められており²²、量・質ともに均整のとれたコーパスであるといえる。留学生の日本語レベルは、大学の講義を受けることができ、一般的には上級と称されるレベルである。

このコーパスの最大の特徴は、タスク別の作文コーパスであるということである。各タスクは、日常で起こり得るさまざまな「書く」という活動の中から抽出されたものである。具体的なタスクの内容は、以下のようなものである。

【タスクの内容】

- 〈タスク 1〉 面識のない先生に図書を借りる
- 〈タスク 2〉 友人に図書を借りる
- 〈タスク 3〉 デジカメの販売台数に関する図を説明する
- 〈タスク 4〉 学長に奨学金増額の必要性を訴える
- 〈タスク 5〉 入院中の後輩に励ましの手紙を書く
- 〈タスク 6〉 市民病院の閉鎖について投書する
- 〈タスク 7〉 ゼミの先生に観光スポット・名物を紹介する
- 〈タスク 8〉 先輩に起こった出来事を友人に教える
- 〈タスク 9〉 広報紙で国の料理を紹介する
- 〈タスク 10〉 先生に早期英語教育についての意見を述べる
- 〈タスク 11〉 友人に早期英語教育についての意見を述べる
- 〈タスク 12〉 小学生新聞で七夕の物語を紹介する

（金澤編 2014: 53）

たとえば〈タスク 1〉であれば、次のような指示文（母語に翻訳されたもの）をもとに作文を書いている。

〈タスク 1〉「面識のない先生に図書を借りる」

あなたが借りたいと思っている『環境学入門』という本が図書館ではなく、面識のない田中先生の研究室にあることがわかりました。レポートを書くためにはどうしてもその本が必要です。田中先生にそのことをメールでお願いしてください。

12 のタスクを、「読み手」を軸に整理し一覧表にすると、表 1 のようになる。読み手は、「特定」か「非特定」であるか、また「特定」の場合は親疎関係において「疎・目上」であるか、「親・友人」であるかに分けられる。

²² 母語別の総形態素数は、日本語母語話者 79447、韓国語母語話者 81356、中国語母語話者 88828 である。

表 1 タスクの内容と読み手

タスク 番号	内容	読み手
1	面識のない先生に図書を借りる（メール）	特定・疎 （目上）
4	学長に奨学金増額の必要性を訴える（メール）	
7	ゼミの先生に観光地や名物を紹介する（メール）	
10	先生に早期英語教育について意見を述べる（メール）	
2	友人に図書を借りる（メール）	特定・親 （友人）
5	入院中の後輩に励ましの手紙を書く	
8	先輩に起こった事件を友人に教える（携帯メール）	
11	友人に早期英語教育について意見を述べる（メール）	
3	レポートでデジカメの販売台数に関する図を説明する	不特定
6	市民病院の閉鎖について新聞に投書する	
9	広報紙で国の料理を紹介する	
12	小学生新聞で七夕の物語を紹介する	

本研究では、以上のようなタスクの特徴が、動詞の二つの中止形の使い分けにどのように関与しているかについて明らかにする。

3.2 調査方法

「YNU 書き言葉コーパス」の全作文を対象に、動詞の第 1 中止形（「～シ」）・第 2 中止形（「～シテ」）が現れた文に目視にてタグ付けを行い、タスク別に集計を行った。

動詞の第 1 中止形と第 2 中止形が用いられている例としては、具体的には次のようなものがある。例文末の（ ）内の情報は「タスク番号、個人番号、母語、グループ（上・中・下位群）」を表している。

第 1 中止形の例：

- (1) a. この度はお伺いしたいことがありメールを送らせていただきました。
（タスク_01_J001 日本語）
- b. お忙しいところ、大変すみませんが、去年行われた留学生会議のご報告をいたしたいと思い、メールをお送りします。 （タスク_04_K006 韓国語上位群）
- c. 就活と卒論の忙しい時期になり、交通事故に遭って二か月以上入院したら不安になりますものね！ （タスク_05_C047 中国語上位群）

第 2 中止形の例：

- (2) a. 今日はお願いがあってメールをしました。 （タスク_02_J013 日本語）
- b. 図書館にあるのかなあと思って探してみたけどなくてね…。
（タスク_02_K019 韓国語下位群）

- c. この図を見ると、A 社は 2006 年時は一度最低点になって、今はまた回復する。
(タスク_03_C025 中国語下位群)

ここで、今回調査の対象とした形式について述べておく。日本語記述文法研究会(2008)によると、第 1 中止形と第 2 中止形は、用法が重なる部分とそうでない部分がある(pp. 287-289)。その記述を参考に、本研究における関係の意味との対応を表 1 にまとめた。表内の例文は作例である。なお、関係の意味の用語は津留崎(2003a)による。

表 2 第 1 中止形と第 2 中止形の意味・用法

関係の意味	例文	第 1 中止形 (～シ)	第 2 中止形 (～シテ)
先行事態	夕食後、風呂に {入り／入って}、歯をみがいた。	○	○
原因	事故のニュースを {聞き／聞いて}、驚いた。	○	○
並列	兄はジムに {行き／行って}、弟は釣りに行った。	○	○
副状態	{座り／座って} 話をした。 ふたりはソファに {座り／座って}、話をした。	× 継起の読み が強まる	○ ○

集計の際には、両者の用法が重なる並列、先行事態(継起)、原因・理由、副状態(付帯状況)の一部を対象とした。副状態について、「{*座り／座って} 話す」(姿勢)、「{*歩き／歩いて }、川をわたる」(手段)のように従属度が高く副詞に近づいているものは、第 1 中止形に置き換えられない。このように、そもそも第 1 中止形に置き換えられない第 2 中止形の用法は、集計に含めなかった²³。ただし、「ふたりはソファに { 座って／座り }、話を続けた。」のように、継起か付帯状況かが意味的にあいまいになり、第 1 中止形に置き換えることができるものは集計に含めた。

3.3 調査結果

3.3.1 概観

表 3 は動詞・肯定形の第 1 中止形、第 2 中止形の使用回数と使用率である。

²³ 今回、集計から除いたものには、他に次のようなものがある。①「[名詞] +であって／[名詞] +であり」の形のもの。②「私も将来が不安になったから大丈夫かなあと思つて。」のように、言いさしになっているもの。③「～てから」「～て以来」「～てか」「～ての」のように、第 2 中止形が助詞等と複合化したもの。④「～により／～によって」「～に対し／～に対して」のような後置詞的な機能語。

表3 母語別第1・第2中止形の使用回数と使用率²⁴

	第1中止形 (～シ)	第2中止形 (～シテ)	中止形合計
日本語	401(51%)	379(49%)	780 (100%)
韓国語	225(27%)	599(73%)	824 (100%)
中国語	226(22%)	788(78%)	1014 (100%)

日本語母語話者については、両形式の比率はほぼ同じとなっている。一方、学習者の場合は、韓国語母語話者・中国語母語話者ともに第1中止形の使用は20%台にとどまり、第2中止形の割合が70%割を超えている。カイ二乗検定²⁵の結果、1%水準で有意差が認められ、残差分析の結果、日本語母語話者による第1中止形使用、韓国語母語話者・中国語母語話者の第2中止形が有意に多かった ($\chi^2(2) = 185.351, p < .01$)。

つまり、書き言葉において、日本語母語話者は学習者比べて第1中止形の使用率が高く、また反対に、学習者は第2中止形の使用率が高いという傾向があることがわかる。このような傾向は、先行研究で明らかにされていたことと重なる。

次にあげる表4は、表3の内訳の詳細を表したものであり、母語・タスク別に見た二つの中止形の使用頻度とその割合を示している。この表においては、読み手を基準とし「疎遠」「親しい」「不特定」というグループでタスクを並べた。網掛け部分が割合の数値である。

²⁴ 本章では、第1中止形と第2が置き換え可能なものを集計している。よって、第2中止形の数値は、第2章における表2「母語・形式別の使用回数と使用数」の数値よりも少なくなっている。

²⁵ js-STAR (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用。

表 4 動詞第 1 中止形・第 2 中止形の母語・タスク別使用頻度

タスク 番号	タスク内容／ 読み手		日本語母語話者				韓国語母語学習者				中国語母語学習者			
			第 1 中止	第 2 中止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中止	第 2 中止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中止	第 2 中止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)
〈1〉	図書（上）	疎 遠	11	9	55%	45%	3	26	10%	90%	7	22	24%	76%
〈4〉	奨学金（上）		32	7	82%	18%	29	17	63%	37%	28	33	46%	50%
〈7〉	観光（上）		24	21	53%	47%	7	31	18%	82%	13	40	25%	73%
〈10〉	意見（上）		20	11	65%	35%	12	16	43%	57%	11	27	29%	68%
〈2〉	図書（友）	親 し い	0	13	0%	100%	0	17	0%	100%	0	19	0%	100%
〈5〉	手紙（友）		6	88	6%	94%	14	90	13%	87%	20	125	14%	86%
〈8〉	出来事（友）		0	53	0%	100%	0	79	0%	100%	2	88	2%	98%
〈11〉	意見（友）		0	14	0%	100%	1	26	4%	96%	1	9	10%	90%
〈3〉	グラフ説明	不 特 定	48	5	91%	9%	36	32	53%	47%	30	25	55%	45%
〈6〉	新聞投書		35	10	78%	22%	29	22	57%	43%	12	44	21%	79%
〈9〉	料理説明		58	45	56%	44%	39	99	28%	72%	39	142	22%	78%
〈12〉	昔話（七夕）		167	103	62%	38%	69	144	32%	68%	63	214	23%	77%
合計			401	379	51%	49%	239	599	29%	71%	226	788	22%	78%

以下、タスクと二つの形式の使い分けの傾向を探るため、項目に分けて記述していく。

3.3.2 どのタスクで第1中止形がより使われているか

どのタスクで第1中止形がより使われていたかを母語別にみてる。まず、日本語母語話者について、第1中止形の使用率が高いタスクから降順に並べると、図1のような結果になった。横軸の数字はタスク番号を表す。

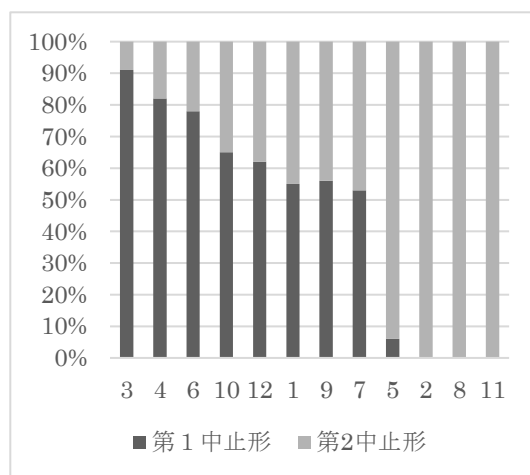


図1 日本語母語話者

第1中止形の使用率が最も高かったものは、〈タスク3〉グラフ説明であった。次いで〈タスク4〉学長への意見文、〈タスク6〉新聞への意見投書、と続く。タスク3～7までと、タスク5～11で量的に大きな変化がある。〈タスク5・2・8・11〉は、読み手が親しい友人宛に書かれたものであり、これらは〈タスク5〉を除けば全て第2中止形が使用されている。

学習者と比較し、特に特徴的なことは、〈タスク1〉先生への図書貸与依頼での第1中止形の使用率の高さである。次のような使用が多く見られた。

- (3) a. この度はお伺いしたいことがありメールを送らせていただきました。
(タスク_01_J001 日本語)
- b. 今回、『環境学入門』という本をお借りできないかと思い、連絡を差し上げた次第であります。
(タスク_01_J003 日本語)
- c. 『環境学入門』という本を授業のために使いたいと考え、図書館で探したところ、田中先生の研究室にあることが分かりました。
(タスク_01_J003 日本語)

また、第2中止形の使用も9例あったが、そのうち4例は次のような丁寧化されたものであった。

(4) a. 本日、田中先生にお願いがありまして、メールさせていただきました。

(タスク_01_J016 日本語)

b. この本は図書館にはなく、田中先生がお持ちでいらっしゃるということを聞
きまして、よろしければお借りできないかと思い、ご連絡させていただきました。
た。

(タスク_01_J018 日本語)

読み手が友人など親しい関係であり、かつ、メールで書く設定の〈タスク 2・8・11〉は、第1中止形の使用が1件も現れていなかった。ただし、親しい相手(後輩)に手紙を書く想定 of 〈タスク 5〉には、例(6)のような第1中止形の使用も見られた。親しい相手にはあるが、手紙文であること、また相談内容に答えるという真摯で改まった態度が必要になることが影響していると考えられる。

(5) a. 交通事故に遭い、2ヶ月近くも入院していると聞きました。

(タスク_05_J003 日本語)

b. そこから、私は、何かすっきりした気持ちになり、卒業論文も無事に提出することができました。

(タスク_05_J003 日本語)

c. あなたも、焦らず、今の状況をしっかりと受けとめ、やれることから、やっていって下さい。

(タスク_05_J003 日本語)

次に学習者について見てみる。図2は韓国語母語学習者、図3は中国語母語学習者のものである。横軸の図の数値はタスク番号であり、その並びは便宜的に、先に見た日本語母語話者(図1)の順番と揃えてある。そうすることで、母語話者と比較した時の学習者の特徴を見てみたいと考える。

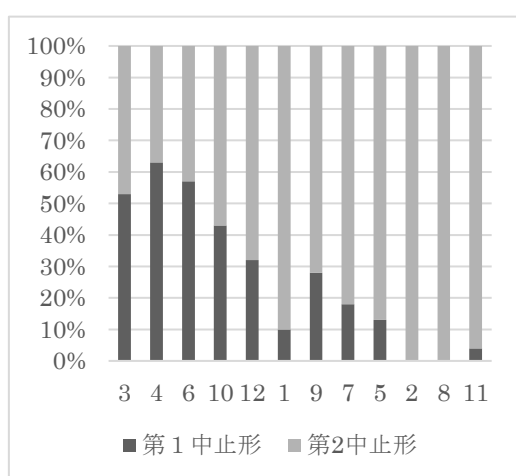


図2 韓国語母語学習者

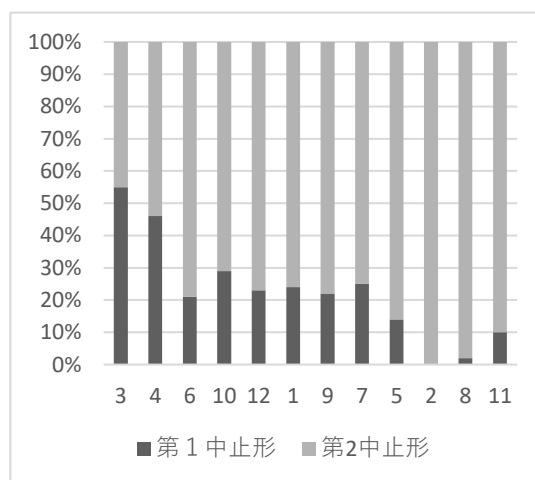


図3 中国語母語学習者

まず、韓国語母語学習者についてであるが、第1中止形の使用率の高いものの上位5つのタスクは、母語話者と重なっており、〈タスク4〉学長への意見文、〈タスク6〉新聞への意見投書、〈タスク3〉グラフ説明と続く。母語話者との違いは、全体として第1中止形の使用率が低いことが挙げられる。特に先生への図書貸与依頼である〈タスク1〉について、第1中止形の使用率が9パーセントと低いことが特徴的である。〈タスク4〉学長への意見文では6割を超える第1中止形の使用があるため、同じ目上であっても読み手の違いによる差は、母語話者より大きく開いている。これが読み手の違いのみによるものなのか、図書貸与の依頼文と奨学金増額の意見表明を含んだ依頼文との違いによるものなのかは、ここでは断定できないため引き続き考察を続けたいと考える。

続いて、中国語母語学習者の場合、全体的に、韓国語母語学習者と比較してもさらに第1中止形の使用率が低くなっている。中止形が多く用いられたタスクの上位は、〈タスク3〉グラフ説明、〈タスク4〉学長への意見文、〈タスク10〉先生への意見文、である。〈タスク8・2〉の友人へのメールを除くと、中間に位置するものはいずれも2〜3割の使用に止まっていることが特徴的である。

3.3.3 読み手の親疎関係との相関について

ここでは、「先生」や「学長」といった「疎遠(目上)」である読み手に対して書いた文章と、「友人」や「同僚」といった「親しい関係」の読み手に対して書いた文章とでは、どのような違いがあるかについて見る。

図4は、「疎遠(目上)」である読み手に対して書かれたもの、すなわち〈タスク1・4・7・10〉の件数を合計し、母語別に集計した結果である。一方、図5は、「親しい関係」(同僚・友人)を読み手として書かれた〈タスク2・5・8・11〉についてのものである。

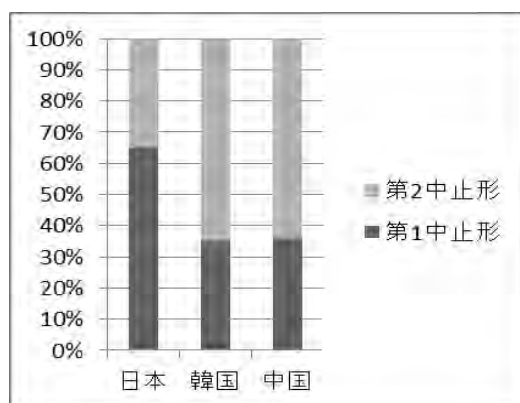


図4 疎遠(目上)

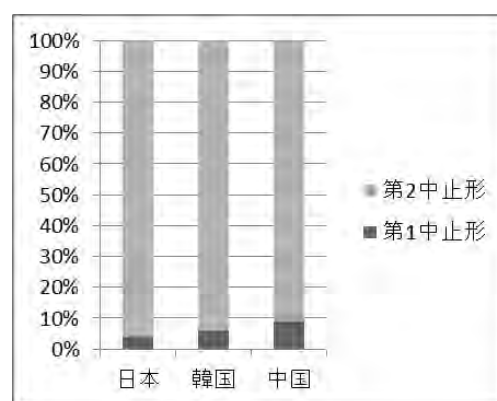


図5 親しい(友人)

図4・図5によると、日本語母語話者・学習者ともに、「疎遠(目上)」と「親しい(友人)」とでは、二つの形式の使い分けが非常に明確であることがわかる。詳細を見ていく。

図4では、日本語母語話者の第1中止形の使用率が高くなっており、6割を超える。一

方、学習者の場合は、韓国・中国とも4割以下であり、母語話者と比較すると、両形式の割合の比率が逆転している。ここから、母語話者は、「疎遠(目上)」の読み手の文章には、積極的に第1中止形を用いていることがわかる。一方、図6によると、母語話者・学習者いずれも、第1中止形の使用は非常に少なく、ほぼ第2中止形が用いられていることがわかる。しかし、図4・図5を比較して見れば、学習者が二つの中止形を使い分けについて理解し、使い分けようとしていることが明確にわかる。

学習者の文の中で、第2中止形を用いている文の中には少し不自然に感じられるものがある。次のような例は、第1中止形を用いた方が落ち着きがよいようである。

- (6) a. 私は早期英語教育はあまり良くないと思って反対します。
(タスク_10_K009 韓国語上位群)
- b. 年齢が若い子供は、新しいものに対する好奇心に満たして、勉強したい気持ちが強いです。
(タスク_10_C050 中国語下位群)

また、親しい関係で第1中止形が使われている例のうち、文末が常体の文で、第1中止形を取っているものがあった。これは、日本語母語話者には見られなかったタイプである。以下のような例があった。

- (7) a. 今皆卒論と仕事の準備をしているから、李さんはきっと今ごろすごく不安だと思い、私も似っている経験があったから、その気持ちがよく分かる。
(タスク_05_C002 中国語上位群)
- b. 自分のいとも小学校前に英語の幼稚園に通ってたけど、性格形成に何も問題なく、しかも英語によるプライドができ、これからの学校生活にもすごく役に立っていると聞いたわ。
(タスク_11_K035 韓国語中位群)
- c. 先週は特に業務が多くて鈴木さん体調悪そうだったけど、つい、カラオケ中に意識不明の重体で倒れ、病院に運ばれたんだけどやっと今日少し回復して、自分が病院に運ばれたことに気づいたらしい。(タスク_08_C049 中国語上位群)
- d. それで、鈴木が急救車に乗り、病院まで運ばれた。
(タスク_08_C054 中国語中位群)

例文(7) a、b は、文全体からみて、この部分にのみ堅さが感じられる。例文(7) c、d は、いわゆる日記、あるいは報告書といったテキストであれば違和感のないものであるが、親しい友人に向けて書く場合、堅さが現れるため若干の不自然さが感じられる。

3.3.4 読み手が不特定な場合について

ここでは、「不特定な読み手」に対して書かれた文章についてみる。読み手が不特定な場合とは、レポート、新聞投書、昔話である。それぞれジャンルの異なる文章である

ため、それぞれを図に表した。

まず、〈タスク 3〉グラフ説明の結果を図 6 で、〈タスク 6〉新聞への意見投書を図 7 で示す。

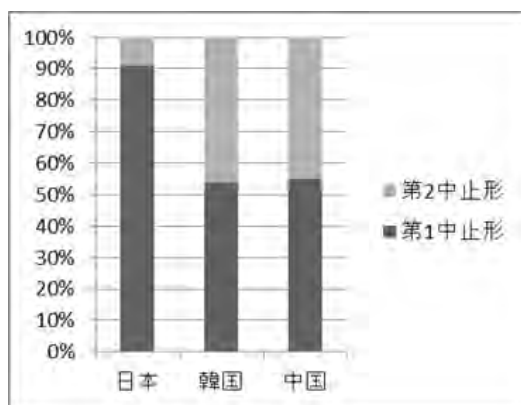


図 6 タスク 3 グラフ説明

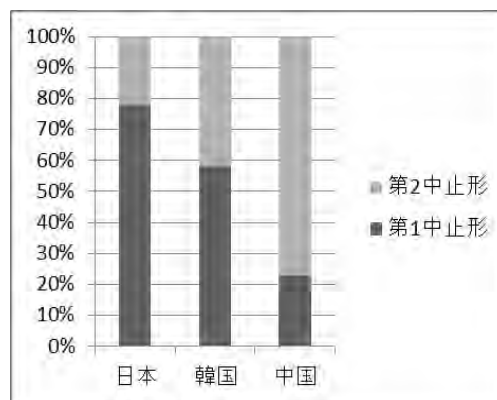


図 7 タスク 6 新聞への意見投書

グラフによると、まず、日本語学習者は〈タスク 3〉における第 1 中止形の使用が顕著である。〈タスク 3〉の作文では、レポートの一部であるグラフの説明としての体裁が求められている。学習者について、韓国語母語話者については、図 6・図 7 とではあまり違いが見られない。中国語話者は、〈タスク 6〉における第 2 中止形の使用が顕著である。

学習者の中には、次にあげるように第 2 中止形の使用の中で、レポートに使用する文体としては不自然さを感じさせる文が見られた。

- (8) 2004 年の時、デジタルカメラは 100 千台を販売していたが、2 年間を経て、2006 年販売量を激しい減下してしまって 60 千台をしか販売なかった。

(タスク_03_C0020 中国語下位群)

ただこれは、形式の問題ではなく「～してしまう」という主観的な感情を表す補助動詞を使用したという語彙的なことからくる不自然さである。

次に、〈タスク 6〉新聞への意見投書の図 7 について見てみる。このタスクは、病院閉鎖に対する反対意見や、存続を求める要望を伝える「新聞投書」の作文である。日本語母語話者は 8 割近くが第 1 中止形を用いているが、韓国語母語学習者になると 6 割を切り、中国語母語学習者になると約 2 割となっている。中国語母語学習者の例をあげる。

- (9) a. この病院が閉鎖されたら、この地区および近くの地区の住民にとって、大きな問題になって、大変不便になると思います。

(タスク_06_C002 中国語上位群)

- b. ちゃんとその原因を探して、改善法を検討したほうがいいと思います。
(タスク_06_C003 中国語上位群)
- c. 病院なんかを閉めたりして、区民の生活を不便にさせるのは、絶対間違い
です。
(タスク_06_C003 中国語上位群)

〈タスク 6〉について、特に日本語母語話者と中国語母語学習者の開きが大きくなった要因は何であろうか。一つの要因として可能性があるのは、「新聞投書」というものをどのように捉えていたかである。筆者は、ある中国人大学院生から、中国では日本の新聞における「投書欄」というものに該当するものはあまり無く、馴染みがないため、それほど「文体」を意識していないのではないか、というコメントを得た。実際に「新聞投書」をどのようなイメージで捉えて作文を書いたかは、フォローアップインタビューが必要になるだろう。ただ、中国語母語話者の作文の中には、書き出し部分が、「〇〇新聞社」「新聞社殿」になっているものや、「お忙しい所すいません」「はじめまして、〇〇と申します」というようなものが見られた。つまり、新聞社宛であったり個人宛のような書き方になっているものが複数存在していたのである。そのような、「新聞投書」に対する捉え方の違いが、文体に反映された可能性はある。なお、韓国語母語話者の場合、そのような例は「〇〇新聞へ」というものが1例しか現れなかった。

次に、図 8 で〈タスク 9〉代表的な料理についての紹介、図 9 で〈タスク 12〉昔話(七夕)について見てみる。

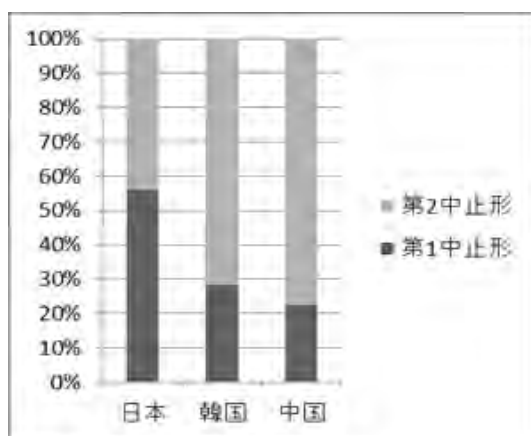


図 8 タスク 9 料理紹介

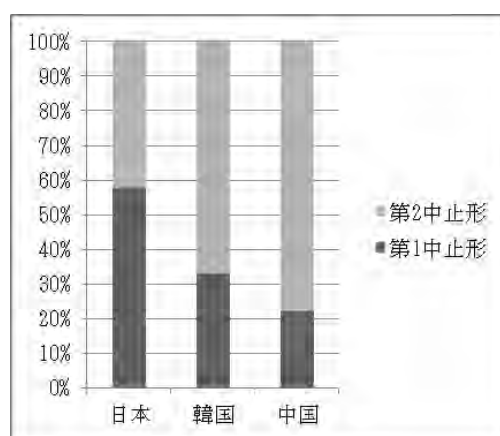


図 9 タスク 12 昔話 (七夕)

図 8 と図 9 を比較すると、全体的によく似た結果となっている。まず、日本語母語話者について、いずれも第 1 中止形が第 2 中止形の使用を上回っている。しかし、先に見た図 6、図 7 における第 1 中止形の使用率よりは低くなっている。これは、料理紹介、昔話紹介といったタスクが、いずれも比較的柔らかい書き言葉であるからだと考えられる。保田ほか (2012) によると、書き言葉であっても語りかけている印象を与える表現があり、そ

れを「語りかけ性」(p. 43)と呼んでいる。保田らによる『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いた調査によると、「語りかけ性」を有するものには啓蒙書や指導書のほかに、昔話やいわゆるハウツーものがあることが明らかにされており、料理紹介と昔話には「語りかけ性」という点で共通点があるといえる。

日本語母語話者が用いた中止形の例文を〈タスク 9〉より挙げる。

第 1 中止形：

- (10) a. お米は十分にとぎ、分量よりやや少なめの水を入れ、30 分以上浸します。
(タスク_09_J009 日本語)
- b. 作り方は、そばの実を乾燥させてつぶしたものを水等と混ぜ合わせながら薄くのばし、更に折りたたんだものを専用の包丁で細く切り、麺を作りま
す。
(タスク_09_J026 日本語)

第 2 中止形：

- (11) a. そしてわさびを少しおいて、その上にさしみをのせて、さらに握ります。
(タスク_09_J003 日本語)
- b. 野菜に味がしみてとっても美味しいですよ。
(タスク_09_J028 日本語)

観察してみると、第 1 中止形を中心に用いる人、第 2 中止形を中心に用いる人、どちらも同じ割合で出現する人、といった個人差が見られる。しかし、比較的軟らかい書き言葉の文章において、第 1 中止形の使用率が高いというのは、日本語母語話者の特徴であると指摘できる。一方、学習者については韓国語・中国語母語話者のいずれも第 2 中止形の使用が 7 割を超えている。このタスクは、不特定の読み手に向け書かれたたものではあるが、第 2 中止形の使用が第 1 中止形を大きく上回る結果となっている。

以上、読み手が不特定な場合について個別に見てきた。日本語母語話者については、いずれのジャンルにおいても、第 1 中止形の使用率が高いが、特に「グラフ説明」というレポートについてはそれが徹底されていた。一方、学習者には、レポートの文に関しては文体に配慮する意識があることが窺えるが、その他のものについては母語話者とは大きく開きが出ていた。特に、中国語母語学習者の場合はそれが顕著で、第 2 中止形の使用が中心となっていることがわかった。読み手が不特定な場合といっても、それぞれのテキストにはレポートのような論説文から、「語りかけ性」が強く現れる傾向のある料理紹介や昔話といったものまでであるため、個々についてはさらに深く分析する必要がある。これについては今後の課題とする。

3.3.5 学習者のレベル別の使用状況

「YNU 書き言葉コーパス」では、書き言葉のための独自の評価基準を決め、全作文を評価している。その評価項目として、「《1》タスクの達成」「《2》タスクの詳細さ・正確さ」

「《3》読み手配慮」「《4》体裁・文体」の四つが設定されており、それにより総合評価が行われている。中止形の使用は、「文法」が含まれている「《2》タスクの詳細さ・正確さ」、また、その文章のスタイルにふさわしい文体か否かを見る「《4》体裁・文体」といった評価項目と関わってくるであろうが、最終的な評価判定は《1》～《4》により、総合的になされるため、文法や文体は評価を支える一部分であるといえる。

以上のような観点からの総合評価によって、学習者は、上位群・中位群・下位群の3つのグループ（各10人）に分けられている。このコーパスに参加している留学生は、一般的に上級とされるレベルであるが、さらにその中でのレベル差をグルーピングしていることになる。ここでは、その学習者の日本語のレベル差が動詞中止形の現れ方とどう関連しているのかについて見ておきたい。学習者の動詞中止形の使用率を、母語別・レベル別に集計したものが表5になる。

表 5 学習者の母語別・レベル別の動詞第 1・第 2 中止形の使用率

タ ス ク	上位群								中位群								下位群							
	韓国語				中国語				韓国語				中国語				韓国語				中国語			
	第 1 中 止	第 2 中 止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中 止	第 2 中 止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中 止	第 2 中 止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中 止	第 2 中 止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中 止	第 2 中 止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)	第 1 中 止	第 2 中 止	第 1 中止 (%)	第 2 中止 (%)
〈1〉	1	9	10%	90%	4	4	50%	50%	2	11	15%	85%	2	9	18%	82%	0	9	0%	100%	1	9	10%	90%
〈4〉	17	4	81%	19%	15	14	52%	48%	10	8	56%	44%	14	10	58%	42%	2	6	25%	75%	4	9	31%	69%
〈7〉	4	10	29%	71%	4	12	25%	75%	3	11	21%	79%	8	20	29%	71%	0	9	0%	100%	3	8	27%	73%
〈10〉	8	3	73%	27%	5	5	50%	50%	4	9	31%	69%	3	15	17%	83%	0	6	0%	100%	5	7	42%	58%
〈2〉	0	3	0%	100%	0	11	0%	100%	0	10	0%	100%	0	4	0%	100%	0	5	0%	100%	0	4	0%	100%
〈5〉	7	30	19%	81%	10	38	21%	79%	7	36	16%	84%	8	34	19%	81%	0	35	0%	100%	2	53	4%	96%
〈8〉	0	26	0%	100%	1	21	5%	95%	0	26	0%	100%	1	31	3%	97%	0	26	0%	100%	0	36	0%	100%
〈11〉	0	11	0%	100%	1	3	25%	75%	1	7	13%	88%	1	1	50%	50%	0	7	0%	100%	0	5	0%	100%
〈3〉	18	5	78%	22%	11	3	79%	21%	12	13	48%	52%	17	9	65%	35%	6	13	32%	68%	3	13	19%	81%
〈6〉	21	5	81%	19%	6	13	32%	68%	7	6	54%	46%	3	14	18%	82%	1	10	9%	91%	4	17	19%	81%
〈9〉	25	29	46%	54%	14	34	29%	71%	12	41	23%	77%	20	51	28%	72%	2	28	7%	93%	7	57	11%	89%
〈12〉	36	51	41%	59%	41	73	36%	64%	30	47	39%	61%	19	65	23%	77%	3	45	6%	94%	2	74	3%	97%

この表5をもとに、横軸を4.3.2における日本語母語話者の図に揃え、母語別・レベル別に6つの図にして以下に示す。それぞれ、図11 韓国語上位群、図12 韓国語中位群、図13 韓国語下位群、図14 中国語上位群、図15、中国語中位群、図16・中国語下位群、である。

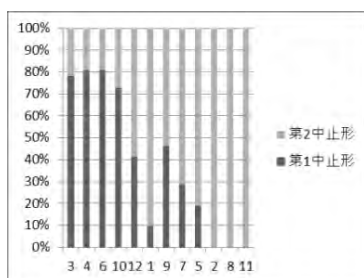


図10 韓国語 上位群

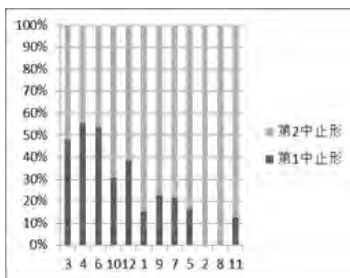


図11 韓国語 中位群

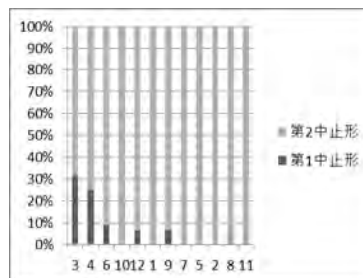


図12 韓国語 下位群

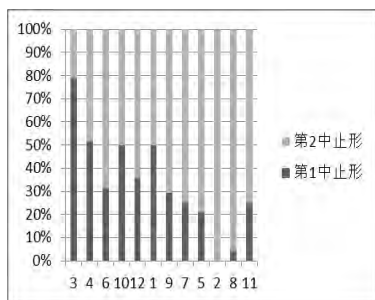


図13 中国語 上位群

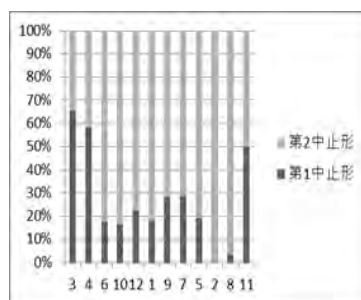


図14 中国語 中位群

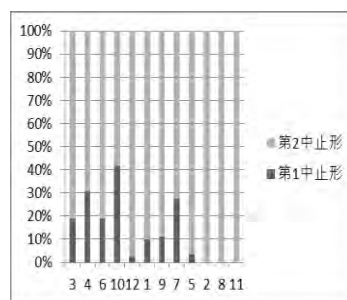


図15 中国語 下位群

これらの図を概観すると、韓国語母語学習者・中国語母語学習者いずれにおいても、レベルが上がるにつれ、第1中止形の使用率が増えていることが分かる。特に、韓国語母語話者の上位群の図については、〈タスク1〉の第1中止形使用率の低さを除けば、概ね、3.3.1で見た図1の日本語母語話者のものと似た傾向を示している。よって、第1中止形の使用数は、日本語の習熟度と相関しており、第1中止形の使用が多いことは、一般的な上級学習者とされるグループの中でも、さらに上位群に特徴的なものであると指摘できる。

4. 本章のまとめ

本章では、「YNU 書き言葉コーパス」の日本語母語話者及び日本語学習者のデータを用い、動詞第1中止形と第2中止形の使用実態について調べた。その結果、以下のようなことが明らかになった。

- ①日本語母語話者は、学習者に比べて全体的に第1中止形を用いる傾向が強い。中止形全体に占める第1中止形の使用率は日本語母語話者の場合、5割を超えるが、上級日本語学習者の場合、その半分に近い2割～3割にとどまっている。

②タスク別に見て、日本語母語話者は読み手が疎遠（目上）であるか、親しい関係であるかといった点によって両中止形を使い分ける顕著な傾向が見られた。すなわち、読み手が疎遠（目上）である場合は第1中止形を積極的に用い、読み手が友人など親しい間柄の場合は、第2中止形を用い、第1中止形を交えることは見られない。

③読み手が不特定な場合、レポート、新聞投稿といった書き手が改まった態度で書くタスクについて、学習者については、レポートの場合は第1中止形使用への意識が窺えるが、日本語母語話者の積極的な使用に比べると大きな差があることがわかった。料理紹介や、昔話といった丁寧体が多用される比較的柔らかい書き言葉の文体においても、その傾向が見られた。

④上級日本語学習者の中でも、さらに上位群・中位群・下位群とレベル分けした際に、上のレベルに行くほど第1中止形の使用率が高くなり、日本語母語話者の使用の特徴と近づくことが明らかになった。

①については既に先行研究で傾向が明らかにされていたことであつたが、②～④については、本研究の調査にて明らかになったことである。

残されている課題も多い。まず、レポート・新聞投稿・料理紹介・昔話といった、読み手が不特定な場合のジャンルの異なりについては、日本語母語話者の使用傾向を踏まえたうえで調査する必要がある。また、同一文中に第1中止形・第2中止形の両方が用いられている場合についても、どのような傾向があるのかを見なければならない。さらに、母語による中止形使用への影響についても田代(1995)で指摘されていた点を含め、韓国語と中国語の特徴がどのように反映されているかを検証する調査が必要であろう。

以上の点に注目して、引き続きデータを分析し記述を進めていきたいと考えている。最終的にそれらを踏まえ、日本語母語話者と日本語学習者による述語中止形の使用傾向の違いを明らかにし、教育現場に還元できるようにしたい。

第4章

動詞の否定中止形をめぐって

1. 本章の目的

動詞の中止形の場合、肯定形は「シテ」と「シ」の二形式があるが、否定形は「セズ」「セズニ」「シナイデ」「シナクテ」の四形式がある。

- (1) 携帯電話を { 持たないで / *持たなくて / 持たずに } 家を出た。
(2) 彼女と一週間連絡が { ?取れないで / 取れなくて / 取れず } 心配した。

(1)では「持たなくて」が使えず、(2)では「取れないで」が不自然となり、各形式で利用できる条件が異なっている。また、近年では規範的ではないものの「シナク」といったいわゆる「ナク中止形」(金澤 2008)も存在する。このような複雑な様相を見せる動詞の否定中止形について、日本語学習者はどのように使い分けているのだろうか。

本章では、「YNU 書き言葉コーパス」を用い、日本語母語話者と比較しながら、上級日本語学習者による動詞の否定中止形の使用状況について明らかにする。

第2章、第3章では、「第1中止形」「第2中止形」という二つの形式の違いを軸に比較・分析を行ってきた。否定中止形についても、「ズ」「ズニ」を第1中止形、「ナクテ」「ナイデ」を第2中止形として扱う研究もある(高橋ほか 2005、日本語記述文法研究会 2007、庵・宮部 2017 など)。しかし、本研究では、意味的には「ズニ」と「ナイデ」が交替が可能であることや、規範的ではない「ナク」を第1中止形として扱うかどうかについて検討が必要なこともあり、第1中止形、第2中止形としてまとめることはせず、各形式を個別に集計し、分析することとする。

2. 先行研究

日本語教育の現場においても、否定中止形については早くから問題点として取り上げられている。まず、北川(1976)は、「日本語教授において頭痛の種になりかねないもの」(p. 57)として、ナイデとナクテについてどのように指導すべきか議論している。北川は、主語の異同、動詞が意志動詞か無意志動詞かという観点から分析を行い、学習者への指導の際には、ナイデは動詞のみに接続することと、どういう場合に「なくて」が動詞とともに現れるか、また制限されるかを指導すべきであると主張している。

また、小林（2003）は、ナクテ、ナイデ、ナク、ズニ、ズに関する言語研究の変遷を、伝統的な国語学の流れと、その対論としてある意味的な差異の観点から追及する流れという二つの流れとして捉え、研究史を概観している。そして、北川（1976）の意見に賛同し、学習者にとっては、形態的な違いや、文型によって指導するほうがわかりやすいと主張している。指導のための具体的な整理として以下の6点を挙げている。

- 1) 名詞文、い形容詞文、な形容詞文、存在文→ナクテ、ナク
- 2) 動詞文→ ナイデ、ナク（テ）、ズ、ズニ。動詞文はナイデを基本とする。
- 3) ナル、スル／サセルにつく場合はナクを使う。例）煙草を吸わなくなった。
- 4) 条件や、因果に関係する文型ではナクテが好まれる。
- 5) ナイデは補助動詞、やりもらいなどにつく場合以外の接続では、ズニに置き換えられる。
例）心配しないでください。→×心配せずにください。
心配しないで勉強できた。→心配せずに勉強できた。
- 6) 動詞を並列的に述べる場合は、ズを使い、ナイデ、ナクテ、ズニは使わない。

小林の研究は、現場で教える立場からの疑問点から出発し、先行研究を整理した上で各形式の使用条件を丁寧に分析し、教育へ還元しようとしている。

学習者作文コーパスを用いた研究としては、庵・宮部（2017）がある。そこでは、意見文・説明文・歴史文（時系列文）の学習者作文コーパスである「JCK コーパス」²⁶を用い、学習者による複文の組み立てかたについて調査を行っている。本研究と関わる部分では、複文の意味類型の一つである「並列」の中の、「て」「なく（て）」「ず（に）」が取り上げられている。日本語・韓国語・中国語の母語別の集計結果は、表1のように示されている。

表1 並列節の分布 否定

	なく（て）	ず（に）
日本	51 ↓	35 ↑
韓国	106	24
中国	136 ↑	15 ↓

↑:有意に多い、↓:有意に少ない

（庵・宮部 2017:表6 「並列節の分布」より抜粋）

この表から、「よりフォーマルな文体で使われる「ず（に）」は中国語話者に少なく、より

²⁶ 「JCK 作文コーパス」とは、日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者がそれぞれ書いた計180本の作文コーパスである。学習者の日本語レベルは、JLPT N1相当以上の力を持つとされており、2000字以上の「説明文」、「意見文」「歴史文」という三つのジャンルの作文を収めている。詳細は<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>を参照のこと。

インフォーマルな文体で使われる「なく（て）」は中国語話者に多い」（p. 62）とし、フォーマルな場面で使われる形式（「ず（に）」）を使うことが習得上の困難点であると指摘している。この調査の問題意識は本研究と重なるものであるが、形式を二つにまとめているため、個別の特徴については改めて調べる必要がある。

最後に、現代日本語の表現において規範的ではないものの、若者を中心として少しずつ広がりつつある「なく中止形」について記述した金澤（1997、2008、2013）を紹介する。「なく中止形」とは、「従来は「～（せ）ず、…」という形が規範的であった動詞の否定の連用中止法において、助動詞の部分を「ず」から「ない」に置き換えた「～（し）なく、…」という連用中止用法」（金澤 2008：14）と定義される。具体的には次のような例文が挙げられている。

(3) 最初は何の味もしなく、一体これからどうなるのだろう、と少し不安になるが、
辛抱強く噛んでいるうちに少しずつバラバラになり、…

（東海林さだお『キャベツの丸かじり』朝日新聞社、1989 年）

金澤は、この「なく中止形」は、母語話者ばかりでなく日本語学習者の中でもすでに見られ、学習者のレベルが高くなると、母語話者とかなり似通った使われ方がなされると指摘している。そしてそれは、上級日本語学習者の「隠れた文法性判断能力」の現れであるとし、肯定的に評価している。規範的な形ではないにもかかわらず、母語話者に似た文法性判断能力として評価される点は非常に興味深い。本稿においても「なく中止形」を調査項目として取り上げることにする。

3. 調査

3.1 調査概要

本調査では「YNU 書き言葉コーパス」を用い、日本語学習者の動詞否定中止形の使用状況について、母語話者と比較しながらその特徴を明らかにする。調査対象の「YNU 書き言葉コーパス」は、上級日本語学習者（韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 30 名）と日本人大学生（30 名）による、場面や読み手の異なる 12 の作文タスク 1080 編（90 名×12 タスク）からなるデータである。留学生の日本語レベルは、大学の講義を受けることができ、一般的には上級と称されるレベルである。またそれぞれの作文について一定の基準に基づき評価を行い、達成できたタスクの数に応じて、留学生を「上位群」「中位群」「下位群」の 3 つのグループに分けている。以上のように、本コーパスは、さまざまなタスクによる作文が質・量ともに整っており、今回の調査にふさわしいと考える。

調査方法としては、コーパスの全作文を対象に動詞の否定の中止形、すなわち「（シ）ナクテ」「（シ）ナイデ」「（セ）ズ」「（セ）ズニ」「（シ）ナク」の 5 形式について、文字列検索及び UniDic-1.3.12（Mecab 版）による形態素解析を用い集計を行った。分析は、①関係的意味と各形式の相関、②タスクと各形式の相関、という観点から行う。

3.2 調査結果

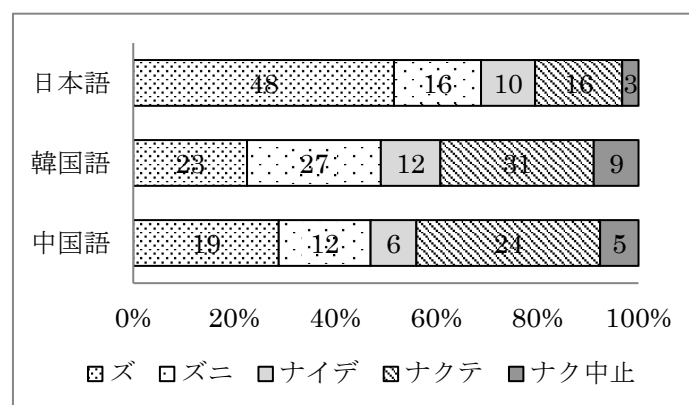
3.2.1 概観

まず、動詞の否定中止形の使用回数と使用率について、母語別に概観する。結果は表2のようになった。図1は表2をグラフ化したものである。

表2 母語・形式別使用回数と使用率

	ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク中止	合計
日本語	48 (51%)	16 (17%)	10 (11%)	16 (17%)	3 (3%)	94 (100%)
韓国語	23 (23%)	27 (26%)	12 (12%)	31 (30%)	9 (9%)	102 (100%)
中国語	19 (29%)	12 (18%)	6 (9%)	24 (36%)	5 (8%)	66 (100%)

図1 母語・形式別使用回数と使用率



日本語母語話者については、「ズ」の使用が51%と全体の半数を占め、「ズニ」「ナクテ」はいずれも17%で、「ナイデ」は11%となっている。一方、学習者については、最も多いのは「ナクテ」で、韓国語母語話者が30%、中国語母語話者が36%である。「ナクテ」に次ぐ形式として、韓国語母語話者は、「ズニ」「ズ」の順、中国語母語話者は「ズ」「ズニ」の順となっている。また数は少ないが、すべての母語話者に「ナク中止形」の使用が見られた。全体の傾向として、日本語母語話者は「ズ」を積極的に用いているが、学習者はそうではなく、「ナクテ」の使用率が高いことがわかる。

3.2.2 学習者のレベル別の使用状況

ここでは、学習者の習熟度のレベルによる使用状況を見る。「YNU 書き言葉コーパス」では、書き言葉のための独自の評価基準を決め、全作文を評価している。評価項目は、「タスクの達成」「タスクの詳細さ・正確さ」「読み手配慮」「体裁・文体」の四つであり、それにより総合的な評価が行われている。否定中止形の使用は、「文法」が含まれている「タスクの詳細さ・正確さ」、また、その文章のスタイルにふさわしい文体か否かを見る「体

裁・文体」といった評価項目と関わってくるであろうが、最終的な評価判定は総合的になされるため、文法や文体は評価を支える一部分であるといえる。

その学習者のグループ別（上位群・中位群・下位群）により集計すると、結果は表3のようになった。図2は、表3をグラフ化したものである。

表3 グループ（学習者レベル）・形式別使用回数と使用率

	ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク中止	合計
上位群	25 (36%)	16 (23%)	6 (9%)	15 (21%)	8 (11%)	70 (100%)
中位群	16 (32%)	13 (26%)	3 (6%)	16 (32%)	2 (4%)	50 (100%)
下位群	1 (2%)	10 (21%)	9 (19%)	24 (50%)	4 (9%)	48 (100%)

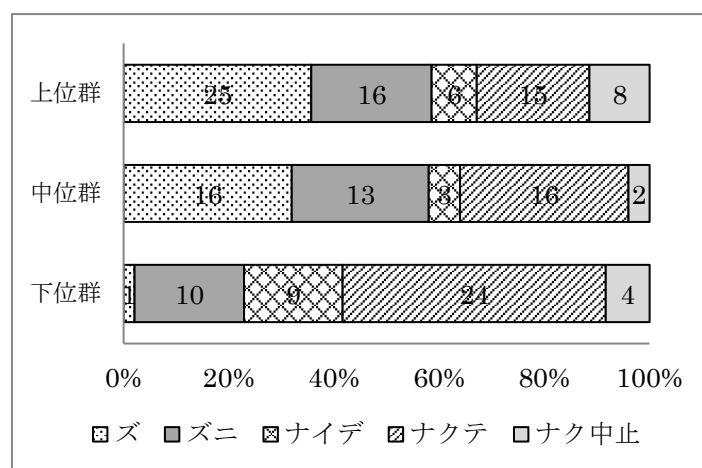


図2 グループ（学習者レベル）・形式別使用回数と使用率

3つのグループを比較して、もっとも違いが顕著なのは「ズ」の使用である。上位群は日本語母語話者同様に「ズ」の使用率が最も高くなっている一方、下位群における「ズ」の使用は1例にとどまり、「ナクテ」の使用が最も多くなっている。「ナク中止形」の使用について注目すると、どのグループにも使用が見られるが、上位群がやや多いことが指摘できる。これは上級学習者の文法性能力が母語話者に似てくるという金澤（2008）の指摘と合致する。

3.2.3 関係的意味と形式との相関について

3.2.3.1 動詞の否定中止形と関係的意味

ここでは、関係的意味による各否定中止形の使用状況について見ていく。「関係的意味」とは、「先行節（の中止形）の語が後続節（の述語）の表す事柄に対して、どのような意味を担っているかを言う」（津留崎 2003b:151）と定義されるものである。具体的には、「副状態」（付帯状況にあたる）、「先行事態」（継起にあたる）、「原因」、「並列」、「前提」

などがある。否定形式の場合、肯定形式とは異なる点として、継起関係である「先行事態」の読みがされにくくなるということがある。庵ほか（2000）では、「継起を表す「～て」に対応する否定の形はありません」（p. 441）としており、小林（2003）では、「継起は、否定の場合、原因や代替の意味になる。」（p. 25）としている。益岡（1997）では「赤上げて、白上げないで、赤下げる」（下線は筆者による）のような例を「継起」として認めているが、これは手順を示す特殊な例である。

また、否定中止形に特徴的な用法として、「対立」「交替」という分類を立てるものもある（小林 2003、市川 2007）。庵ほか（2000）では（5）は「並立」とされ、日高（1995）は（7）「並列」の下位に位置付け「対比構文」と呼んでいる。

（4）本人が来ないで、代理人が現れた。（市川 2003「交替・代替」）

（5）彼女は高校に行かないでカラオケに行っていたようだ。

（小林 2003、庵ほか 2000「並立」）

（6）太郎は合格しないで、次郎は合格した。（庵ほか 2000「並立」）

（7）この子は親に似ないで、おじいさんに似ている。（日高 1995「対比構文」）

なお、益岡（1997）では（5）のような例は、付帯状況における「意味の拡張」とされている。このように、動詞の否定中止形と関係的意味について、先行研究による用法の捉え方は一致していない。本研究では、「先行事態」を認め、「対立」「代替」は「副状態」「並列」の中での意味の拡張と捉え、項目は立てず、「副状態」「先行事態」「原因」「並列」の4つを枠組みとして見ていくことにする。これらの関係的意味は相互に明確に分かれるものではなく、連続性が認められる。

以下に、それぞれの関係的意味の特徴と、例文を示す。なお、特に明記のないものは作例であり、コーパス中の実例には文末にタスク番号と学習者情報（母語・グループ）を付す。

〈副状態〉

いわゆる付帯状況にあたる。主体の主たる状態や動作が後続節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を先行節で述べる。同主語であり、先行句節・後行句節ともに意志動詞である。（10）は対比性の意味を帯びる。

（8）鍵を掛けずに家を出た。

（9）ソースをかけないで食べる。／タクシーを使わずにここまで来た。（手段）

（10）彼女は学校に行かずにカラオケに行っていた。

「ナイデ」「ズニ」が中心的に用いられ、「ズ」は一部不自然となる。小林（2003）は、「付帯状況の場合は、ズは座りが悪い。ズニと言う。」としている。

〈先行事態〉

先行・後続節において述べられる二つのできごとが継起関係となる。否定中止形の場合、時の経過を表す状況語や、タラ節、トコロ節など（二重下線部）が示される場合にのみ明確になる。

(11) 2人はとても深く愛し合っていたので、いつも一緒にいて離れようとせず、やがてしごとをするのをやめてしまいました。 (タスク_12_J027 日本語)

(タスク_08_J007 日本語)

(12) 授業のレポートにどうしても必要なのですが、図書館には所蔵されておらず、調べたところ先生が研究室にお持ちだとわかりました。(タスク_01_J027 日本語)

同時性の「ナイデ」「ズニ」では継起性を表しにくく、「ナクテ」「ズ」の場合が中心となる。しかし、動詞肯定形の場合は非常に用例数が多いが、否定中止形の場合は中心的な用法ではない。

〈原因〉

先行節と後続節が因果関係を持つ。

(13) 熱が下がらなくて、会社を休んだ。

小林（2003）では「原因の場合は、ズニは座りが悪い。ズと言う。」とされている。「ナクテ」「ズ」の使用が中心的である。

〈並列〉

先行節と後続節が意味的に独立し、対等な文。(15)は対比性を帯びる。(17)は、前後を入れ替えると不自然になるため、「前提」的であるが、このような例も今回は並列として扱う。

(14) 姉は肉が食べられず、私は魚が食べられない。

(15) 親が来ないで子どもが来た。

(16) ただし、普通ののり巻きとちがうのは食べやすい大きさに切り分けられておらず1本ののりまきを手で持って食べる点です。 (タスク_09_J013 日本語)

3.2.3.2 関係的意味別の使用状況

ここでは、まず「ナイデ」「ナクテ」「ズニ」の使用状況を関係的意味との関連を観察する。「ズ」については、鈴木（1976）で指摘されるように、切れ方が大きく、ゆるやかに下の語句と結びつくため、関係的意味があいまいになる。よって、表には含めず、本項の

最後に記述する。また、「ナク中止形」は、3.2.4にて詳細を述べることにする。

関係的意味別に集計した結果は、表4のようになる。太枠は、その形式が使用できないか、使用制限のある部分である。

表4 関係的意味別の使用状況

	日本語			韓国語			中国語		
	ナイデ	ナクテ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ズニ
副状態	10	0	14	12	3	23	5	1	10
先行事態	0	3	0	0	1	0	0	0	0
原因	0	10	2	0	20	2	1	19	1
並列	0	0	0	0	3	0	0	0	0
分類不可	0	0	0	0	4	2	0	4	1
合計	10	16	16	12	31	27	6	24	12

関係的意味ごとに使用の傾向を見ていく。まず、「副状態」については、日本語母語話者、学習者ともに「ナイデ」と「ズニ」の使用が中心であり、比較すると「ズニ」のほうが多くなっており、似た傾向を示している。使用が制限される「ナクテ」については、学習者にのみ使用が見られ、不自然な用例となっていた。

(17) 仕事もしなくてずっと泣きました。 (タスク 12_12_K040 韓国語中位群)

(18) 牛郎も牛の面倒を見なくて、毎日織女と会うばかりです。

(タスク_12_C010 中国語下位群)

これらの用例について、許容度には個人差があるかもしれないが、日本語母語話者にはこのような場合「ナクテ」の使用は見られず、「ナイデ」「ズニ」が用いられていた。

(19) 日本語3人はとても仲良くなり、仕事をしないで、毎日、遊んでばかりいました。 (タスク_12_J029 日本語)

(20) そして、ふたりはそれ以降、全く仕事をせずに、遊んでばかりでした。

(タスク_12_J003 日本語)

このような例が多かったのは、すべてタスク12の「昔話」のストーリー説明の中で、「仕事をしないこと」と「遊ぶこと」の対比した事態が並べられている。これは、タスクの内容と関係的意味にかかわる点だと考えられ、その観点からも考察が必要である。

次に、「先行事態」については用例数は少なく、日本語母語話者に3例、韓国語母語話者に1例見られた。これらは、起因的継起とも考えられ「原因」との中間的な位置にある

ものだと考えられる。

- (21) なんか鈴木先輩、会社の人たちにお酒すすめられて断れなくて、めっちゃ飲んでたら、カラオケで倒れちゃって救急車で運ばれたんだって。

(タスク_08_J007 日本語 再掲)

- (22) しかし、図書館にはその本が置かれてなくて、調べてみたら先生の研究室にその本があることが分かりました。

(タスク_01_K025 韓国語下位群)

「原因」については、日本語母語話者も学習者も、「ナクテ」の使用が中心となっている。使用に制限のある「ズニ」「ナイテ」は、以下のような用例が見られた。(24) (25) については、不自然な用例である。

- (23) あの人あまりお酒強くないのに、上司からだったから断ること出来ずに飲んじゃったみたい。

(タスク_8_J24 日本語)

- (24) 神さまたちは新しい服をもらえないで、今の服もぼろぼろになった。

(タスク_12_C010 中国語下位群)

- (25) また、小学生は物事を理解する力がまだ足りずに、理解力が更に深まる中学生の時期から、英語を勉強するのがより効果的だと思います。

(タスク_10_C033 中国語上位群)

(23) については、「出来る」が運動動詞ではないため、許容される文となっていると考えられる。(24) は「もらえなくて」とすべき文である。(25) は、「理解する力が足りないこと」は「中学から英語を勉強するのが効果的」と考える根拠にあたるため、中止形ではなく「足りないため」など理由・根拠を明示できる形式が適する。また、学習者には、不自然な「ナクテ」の用例が見られた。

- (26) 先生のご好みがどうかちょっとわからなくて、まず代表的なところについて話します。

(タスク_07_K032 韓国語下位群)

- (27) 産婦人科と再活治療科など特定の人しか行かなくて少し遠くにあってもよさそうに考える人がいるかも知れない。だがそれはとんでもないことである。

(タスク_06_K038 中位群韓国)

- (28) 最近、不況が多岐に渡り、その同じ悪影響で私達の住域の病院が経済的うまくまわらなくてこの地域には1つしかない総合病院をやめることは、今、地域政府の態度からのぞけるだろう。

(タスク_06_C0045 中国語下位群)

「ナクテ」が先行節・後行節の事態の因果関係を表す条件は、後件が無意志性の場合に

限られる。上の例は、いずれも主節が意志や推量になっている。このような場合、前件は判断の根拠となるが、中止形にはそれを明確に表す機能はないため、不自然になっている。

「～ため」や「～ので」など、他の理由表現に変える必要がある。

「並列」については、「ズ」が中心的に用いられるため、この表においては韓国語母語話者の「ナクテ」3例のみであった。

分類が困難であった「分類不可」の用例については次のような例があった。

(29) 私は英語の学習に興味や楽さを感じずにだんだん英語が嫌いになりました。

(タスク_10_C003 中国語中位群)

(29) は、「セズ」を用いているが、少しすわりの悪さを感じさせる。「だんだん」という時間の経過を表す状況語があるため、副状態の「ズニ」より「ズ」に置き換えたほうがより自然になるのではないだろうか。

最後に、表に含めなかった「ズ」について、関係的意味ごとにいくつか使用例を挙げる。

「並列」

(30) 2人は悲しみに明け暮れ、おりひめははたを織ろうとせず、ひこぼしも牛の世話をしようとしません。

(タスク_12_J021 日本語)

(31) 今回の会議でそのことについて議論し、調べたところ、本大学の留学生の4割が現在奨学金を受給しておらず、今まで一回の奨学金を受給したことのない留学生も2割ほどいました。

(タスク_04_K010 韓国語上位群)

(32) 去年、僕も就職うまくできず、卒論にもなかなか進まなかった。

(タスク_05_C005 中国語中位群)

(33) ただし、普通ののり巻きとちがうのは食べやすい大きさに切りわけられておらず、1本ののりまきを手で持って食べる点です。

(タスク_09_J013 日本語再掲)

「原因」

(34) また、もし閉鎖された場合、日常的に病院通いをしている市民は新たな医者を見つけなければならず、大きな負担となる。

(タスク_06_J027 日本語)

(35) 僕の場合はバスケットで腕を折ったんですが、きき手の方だったのでテストの答案も書けず、すごく不安でした。

(タスク_05_K027 韓国語上位群)

(36) なかなか魯さんの入院している病院に見舞いに行けず、申し訳なく思っています。

(タスク_05_C049 中国語上位群)

また日本語学習者には不自然な用例がほとんど見られなかった。唯一、不自然だったのは次の例である。

(37) どうしようと思っている時、どこからわからず、数え切れない雀が遠方から飛んできた。
(タスク_12_C054 中国中位群)

(38) 生活のためにアルバイト三つや四つをせず、勉強に集中させることができます。
(タスク_04_C040 中国語中位群)

(37) は、「どこからか」「どこからともなく」ということを言い表したいものだと考えられるため、文法というより語彙的な誤用であると考えられる。(38) は「せず」がやや不自然に感じられる。奨学金を求める文脈での文であるが、「アルバイトをしないで」や「アルバイトをすることなく」にしたほうがよいだろう。

3.2.4 タスクの種類と形式との相関について

ここでは、「YNU 書き言葉コーパス」の作文の類型をもとに、読み手が特定されているかどうか、また特定されている場合、目上に対するものか（特定・疎）、友人に対するものか（特定・親）について、使用される形式がどのようなものになるのかを見る。

はじめに、12 のタスクの内容と読み手についてまとめると、表 5 のようになる。

表 5 タスクの内容と読み手（再掲）

	内 容	読み手
1	メールで面識のない先生から図書を借りる	特定・疎
4	メールで大学の学長に奨学金増額の必要性を訴える	
7	先生に故郷の観光地や名物についてメールで伝える	
10	先生に対して早期英語教育の是非について意見を述べる	
2	メールで親しい友人から図書を借りる	特定・親
5	入院中の後輩に励ましの手紙を書く	
8	友人に起こったできごとを親しい第三者に報告する	
11	友人に対して早期英語教育の是非について意見を述べる	
3	デジタルカメラの販売台数に関するグラフを説明する	不特定
6	市民病院の閉鎖に対して反対の意見を新聞社に投書する	
9	広報紙で料理の作り方を紹介する	
12	小学生新聞の昔話コーナーで物語（七夕）を紹介する	

タスクごとに各形式を集計すると、表 6 のようになる。

表 6 否定中止形のタスク・形式別の使用状況

母語・形式 タスク番号・内容		日本語母語話者					韓国語母語話者					中国語母語話者				
		ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク 中止	ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク 中止	ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク 中止
1	図書（上）	5	0	0	0	2	1	0	0	0	4	2	0	0	0	0
4	メール（上）	3	0	0	0	0	2	0	0	2	0	2	1	0	0	1
7	観光地案内（上）	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0
10	意見（上）	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	2	0	0	0
	小計	9	0	0	0	2	5	1	0	3	4	8	3	0	0	1
2	図書（友）	0	0	0	3	0	0	0	0	2	1	0	0	0	2	1
5	手紙（友）	10	7	4	6	0	5	10	7	10	0	5	8	4	13	0
8	携帯メール	0	1	0	4	0	2	2	0	1	0	0	0	0	1	0
11	意見（友）	0	1	0	1	0	1	2	0	1	0	0	0	0	1	0
	小計	10	9	4	14	0	8	14	7	14	1	5	8	4	17	1
3	グラフ説明	5	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	1
6	新聞投書	3	1	2	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0
9	料理紹介	6	1	0	0	0	0	2	0	0	1	1	1	0	0	0
12	昔話	18	5	4	0	1	8	9	5	11	1	1	0	2	6	2
	小計	32	7	6	1	1	9	12	5	12	3	5	1	2	7	3

表 6 をもとに、「特定・疎」「特定・親」「不特定」に注目して整理する。まず、「特定（疎・親合計）」か「不特定」かの違いによる使用数は、次のようになった。

表 7 読み手が「特定（親疎）」か「不特定（レポート・投書）」かの違いによる使用数

		ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク中止	計
日本語	特定	18	9	4	14	2	47
	不特定	32	7	6	1	1	47
韓国語	特定	13	15	7	14	5	54
	不特定	10	12	5	13	4	44
中国語	特定	13	11	4	17	2	47
	不特定	6	1	2	7	3	19

日本語母語話者は、「特定」「不特定」にかかわらず「ズ」の使用がもっとも多い。特に「不特定」における「ズ」の使用数は突出している。表 6 によると、「昔話」に 18 例と多く現れていることがわかる。「ナクテ」に関しては、「不特定」での使用は 1 例のみで、「特定」での使用が多い。一方、学習者にはそのような使用差は現れておらず、特に韓国語学習者については、「特定」と「不特定」で大きな差は見られない。

次に、読み手が特定（疎）か特定（親）かの違いによる使用数は、表 8 のようになった。

表 8 読み手が「特定（疎）」か「特定（親）」かの違いによる使用数

		ズ	ズニ	ナイデ	ナクテ	ナク中止	計
日本語	特定（疎）	10	0	0	0	2	12
	特定（親）	9	9	4	14	0	36
韓国語	特定（疎）	5	1	0	4	4	14
	特定（親）	8	14	7	14	1	44
中国語	特定（疎）	8	3	0	0	1	12
	特定（親）	5	8	4	7	1	35

表 8 によると、「特定（疎）」において、日本語母語話者は「ズ」の使用に偏っている。学習者にも、母語話者ほどではないがその傾向が見て取れる。韓国語学習者については、規範的な形式ではないが「ズ」の代わりに用いられる「なく中止形」の使用が、4 例現れている。これは、読み手が目上の人である文章であり、改まって書いた際に現れたことが窺える。

「特定（親）」において、日本語母語話者は「特定（疎）」の場合と対照的に、ナク中止形以外の形式すべてに使用が見られ、その中で「ナクテ」の使用数がもっとも多くなって

いる。そして学習者についても、同様の傾向が見られる。よって、上級日本語学習者は日本語母語話者と同様に親疎関係が使い分けに影響しているといえる。

3.2.5 「なく中止形」の使用状況

「なく中止形」とは、動詞の否定の連用中止法において、助動詞「ず」ではなく、助動詞「ない」を使った「～（し）なく、…」の形をいう（金澤 1997: 105）。「なく中止形」に前接する動詞の特徴は、先行する動詞（句）が状態的な意味を表す場合が多いことと、対応する肯定形式を持たず定型的な性格を持つ表現になっていることであるとしている。

本稿では、金澤（2013）で整理された分類をもとに集計することにした²⁷。

- A. 動詞「～する」
 - B. 動詞「～いる」
 - C. 動詞「～できる」
 - D. 補助動詞「いる」
 - E. 動詞＋助動詞「られる」
 - Z. A～E 以外の動詞（句）（「落ちつかなく」「一面にすぎなく」「足りなく」等）
- （金澤 2013: 91）

「なく中止形」の使用状況を母語別に見ると表 9 のようになる。結論から述べると、日本語母語話者は D タイプ（補助動詞「～ている」）のみが現れ、学習者は C～Z にかけて複数の種類が現れた。

表 9 「YNU 書き言葉コーパス」に現れた「なく中止形」

前接動詞のタイプ （金澤 2013）	日本語（全 3 例）	韓国語（全 9 例）	中国語（全 5 例）
A. 動詞「～する」			
B. 動詞「～いる」			
C. 動詞「～できる」		「できなく」(2)	「できなく」
D. 補助動詞「いる」	「置いていなく」 「おいてなく」 「していなく」	「置いてなく」(3) 「置かれてなく」 「決まってなく」	
E. 動詞＋助動詞「られる」			「食べられなく」
Z. それ以外の動詞（句）		「変わらなく」 「伸びなく」	「進まなく」(2) 「変わらなく」

²⁷ 金澤（2013）では、「～ていなく」は取り上げられるが、「～てなく」は除かれている。本調査では「～てなく」の出現も観察するため集計に含めた。

日本語母語話者の使用例をあげる。いずれも、「D. 補助動詞「いる」」の否定形である。

(40) 図書館には置いてはなく、田中先生の研究室にあるという話をお聞きました。

(タスク_01_J019 日本語)

(41) しかし、「おりひめ」は、自分自身の服や髪、お化粧品などは何もしてはなく、
仕事ばかりしていました。

(タスク_12_J003 日本語)

(42) 図書館を探してみましたが、おいてなく、田中先生の研究室にあるという話を
伺いましたので、メールさせて頂きました。

(タスク_01_J007 日本語)

次に、学習者の使用例をあげる。

(43) そして彼は牛の面倒を見ないから、畑の仕事もできなく、食べ物もどんどんな
くなりました。

(タスク_12_K003 韓国語中位群)

(44) しかし、その本は大学の図書館は置いてなく、取り寄せるには1週間以上かかる
そうです。

(タスク_01_K039 韓国語上位群)

(45) 神様は服も着れなくて、牛肉を食べられなく、みんな怒ってしまった。

(タスク_12_C008 中国語下位群)

(46) 【(個人名)】は最近論本を書いています、なかなか進まなく、悩んでいます。

(タスク_02_C061 中国語中位群)

韓国語母語話者の場合、D タイプのうち「してはなく」の縮約形としての「してなく」も出現したことが日本語母語話者の傾向と似ていた。「していない」の書き言葉的な中止形は「していず」ではなく「しておらず」にしなければならない。その点が、学習者にとっては難しく、ナク中止形が現れると推察される。今回の調査に限っては、中国語母語話者についてはD タイプは見られなかった。「なく中止形」の出現に母語の影響があるかどうかについては、さらにデータを集める必要がある。

学習者による「なく中止形」の使用は、初級には現れないが、上級になり書き言葉の文体に慣れるにしたがって、母語話者と同様に無意識に現れてくる形式だといえる。文体を意識がするゆえに現れた現象であるとも考えられる。レポートや論文執筆の指導の際には、注意を促すことが必要であろう。

4. 本章のまとめ

本章では、上級日本語学習者の動詞否定中止形の使用状況について、関係的意味及びタスクの観点から分析を行った。その結果、全体としては、日本語母語話者は「ズ」の使用率が突出して高く、学習者は「ナクテ」の使用率が高いことがわかった。

どのような関係的意味で使用しているかについて、日本語母語話者と学習者の使用率に大きな違いはなかったが、学習者には形式を混同した不自然な用例が観察された。

タスクによる使い分けについては、読み手が「特定」か「不特定」か、に関して、日本語母語話者は「不特定」において「ズ」の使用数が高かったが、学習者の場合そのような使用差は現れなかった。読み手の親疎関係による各形式の使い分けは、日本語母語話者は非常に明確で、「疎」の場合は「ズ」の使用が突出していた。日本語学習者も、「親」の場合に「ナクテ」が多く用いられており、使い分けの基準があることがわかった。

規範的ではない形式の「ナク中止形」については、日本語母語話者にも学習者にも使用が確認された。特に韓国語学習者の使用が比較的多く、目上の人への改まった文章での使用が確認された。これは文体を意識がするゆえに現れた現象であるといえる。

否定形式は、コーパス中の用例数が限られるため、カイ二乗検定などを使った統計的な分析はできなかった。引き続き他コーパスを併用するなどして用例を収集する必要がある。さらに、このような複数ある否定中止形を学習者がどのような意識をもって使い分けているのか、形式選択の動機を尋ねるアンケートやインタビュー調査を行い、明らかにしたいと考える。

第 5 章

イ 形容詞による中止形接続について

1. 本章の目的

従来、用言の中止形については、動詞を中心に多くの研究がなされてきたが、津留崎（2003a）では、中止形の表す関係的意味の全体像を明らかにするためには、動詞以外の品詞についても研究が必要であることを指摘し、形容詞中止形の関係的意味について詳細な分析を行っている。日本語教育においても、指導内容は動詞の中止形であり、研究についても動詞の「テ形」「連用形」をテーマとするものが多い。学習者による形容詞中止形の使用実態については、未だ明らかにできていないといえる。津留崎（2003b）では、形容詞中止形には動詞と異なる特徴があるにも関わらず、教材では特に配慮はなされていないことが指摘されている。

本章では、上級日本語学習者による形容詞の二つの中止形の使用状況について、関係的意味や作文タスクの種類の観点から調査し、使用の傾向や動詞との相違点を明らかにする。

2. 先行研究

従来、中止形の研究が動詞を中心に行われていた中で、「独立性の高いテ形・連用形」という観点から、品詞の枠を超えて文の構えについて論じているのが白川（1990）である。そこでは、「ようだ」「らしい」などのモダリティを表す助動詞、「いい」「きびしい」などの「判断形容表現」、動詞「ある」などが、「独立性の高いテ形・連用形」を作りやすいとされている。これらはいずれも静的な述語である。そして、後続節は「一般論→具体的」「結論→根拠」「難解な表現→平易な表現」といった「前言の補足」の機能を果たす文が多いことが指摘されている。たとえば、「この宗匠はなかなかきびしくて、連衆の差し出す付句をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ。」（丸谷才一『低空飛行』）のような例がある（白川 1990: 236）。このような中止形の用法は、従来見過ごされがちであった。

津留崎（2003a）では、小説の用例をデータとし、形容詞の中止形が文中でどのような関係的意味を表すのか、また形容詞の品詞性がそれとどのように関わっているのかについて、「時間的局在性」²⁸の観点を取り入れ記述を行っている。そこでは、白川が指摘したタ

²⁸ 文の表す対象的な内容を、時間軸上に局在するか否かの特徴から「運動（動作・変化）・状態・一時的な存在・恒常的存在・特性・関係・質」に分けるとしている。

イプの文も、「前提」「注釈」といった関係的意味に組み込まれ、より包括的・体系的な分類が示されている。

日本語教育の観点からは、津留崎（2003b）が中止形の問題点を論じており、初級教科書における形容詞や述語名詞の中止形の扱いについて、「現状では動詞中止形の表す関係的意味にあてはまる用法のみが取り上げられている」（p. 145）としている。たとえば、「この公園は広くて新しい。」のような「並列」の例と、「このパソコンは、軽くて便利です。」のような「根拠」の例が区別なく並べられているため、誤用を生む可能性があることを指摘している。また中級以降についても、初級では扱われていない中止形の用法が文章中に現れている場合に、特に説明はないとしている。たとえば、「招待状も、二人の気持ちを伝える大変いいもので、二人がにこにこしながら「来てくださいね」と言っているようだった。」（『テーマ別中級から学ぶ日本語』第2課）のような文の先行節は、後続節の印象を先にまとめて述べる「注釈」の用法として扱うべきだとする。津留崎氏はこのような現状について、学習者は「習うより慣れろで、経験によって理解していく」（p. 151）ことになり、教師側の内省に頼った指導があることに問題提起をしている。そのほかに、日本語学習者による中止形使用についての調査研究としては、秋口・鄭（2002）がある。そこでは、ストーリー説明の作文において、日本語母語話者は連用中止形接続を多く用いるのに対し、初・中級レベルの学習者はテ形接続を用いる傾向があったことが報告されている。ただ、品詞の別については言及はない。

以上の先行研究の指摘から、形容詞を含めた静的な述語の中止形の研究は、日本語教育の観点からもさらに進める必要があると考える。

3. 調査

3.1 調査概要

本研究の調査対象は、「YNU 書き言葉コーパス」である。このコーパスは、横浜国立大学の留学生（韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 30 名）と日本人大学生（30 名）による 90 名×12 タスクの計 1080 編の作文がテキストファイル形式で収められている。留学生の日本語レベルは、大学の講義を受けることができ、一般的には上級と称されるレベルである²⁹。また留学生の作文については、4 つの観点（「タスクの達成度」「タスクの詳細さと正確さ」「読み手への配慮」「体裁・文体の適切性」）に基づき総合的な評価を行い、達成できたタスクの数に応じて、「上位群」「中位群」「下位群」の 3 つのグループに分けている。本研究ではこれを上級学習者の中でのさらなるレベル分けと捉え、適宜分析の観点として用いることとする。

二つの中止形の呼び方について、動詞での議論と統一するためには、「大きく」を第 1 中形、「大きくて」を第 2 中止形とするべきであるが、ここでは形式を明示した呼び名である「ク中止形」「クテ中止形」を用いることとする。

²⁹ 調査対象者の留学生 60 名のうち、7 割の 44 名が 1 級（N1 含む）合格者である。

調査の目的は、次の二点である。

- ①「関係の意味」と「形式（ク中止形・クテ中止形）」の相関について、母語話者と学習者の傾向の違いを明らかにする
- ②「タスクの種類」と「形式（ク中止形・クテ中止形）」の相関について、母語話者と学習者の傾向の違いを明らかにする。

3.2 調査方法

調査方法としては、まず「YNU 書き言葉コーパス」の全作文を対象に、UniDic (unidic-mecab) Ver. 2.0.2 により形態素解析を行い、非存在の「ない」を含むイ形容詞の中止形（肯定形）を抽出した。その際、情態副詞と認められる「速く走る」、結果状態を表す「大きく書く」のようなものは対象から外した。次に、津留崎（2003a）の枠組みを参考にして、関係の意味の観点から用例の分類を行った。津留崎の研究を参考にした理由は、形容詞中止形の特徴となる関係の意味（「前提」や「注釈」）の枠を設けていること、またク中止形・クテ中止形という二形式の違いについても分析対象にしていることによる。

3.3 調査結果

3.3.1 概観

まず、表 1 で形容詞中止形の使用回数と使用率について、母語別に概観する。

表 1 母語別・形式別使用回数と使用率

形式 母語	ク中止形	クテ中止形	合計
日本語	53 (77%)	16 (23%)	69 (100%)
韓国語	37 (37%)	70 (65%)	107 (100%)
中国語	24 (29%)	58 (70%)	82 (100%)

日本語母語話者の 8 割近くがク中止形を用いているのに対し、学習者はいずれも 3 割程度にとどまり、クテ中止形の使用率が高くなっており、母語話者の割合と逆転している。カイ二乗検定の結果³⁰、1%水準で有意差があり、残差分析では母語話者はク中止形の使用が、学習者はクテ中止形の使用が多かった。 $(\chi^2(2)=41.184, p<.01)$ 。これは、第 3 章で明らかになった、同コーパスにおける動詞の第 1 中止形（形容詞ではク中止形）と第 2 中止形（形容詞ではクテ中止形）の使用割合の結果と同様のものであった。

次に、学習者の習熟度のレベル別による使用状況を見る。「YNU 書き言葉コーパス」では、書き言葉のための独自の評価基準を決め、全作文を評価している。評価項目は、「タスクの達成」「タスクの詳細さ・正確さ」「読み手配慮」「体裁・文体」の四つであり、そ

³⁰ js-STAR (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用。

れにより総合的な評価が行われている。形容詞中止形の使用は、「文法」が含まれている「タスクの詳細さ・正確さ」、また、その文章のスタイルにふさわしい文体か否かを見る「体裁・文体」といった評価項目と関わってくるであろうが、最終的な評価判定は総合的になされるため、文法や文体は評価を支える一部分であるといえる。

「上位群」「中位群」「下位群」の3つのグループごとに集計した結果は、表2のようになった。

表2 グループ別・形式別使用回数と使用率

形式 グループ	ク中止形	クテ中止形	合計
上位群	29 (43%)	39 (57%)	68 (100%)
中位群	25 (42%)	35 (58%)	60 (100%)
下位群	7 (11%)	54 (89%)	61 (100%)

表2によると、下位群に比べて中・上位群ではク中止形の使用率が高くなっていることがわかる。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差が認められた($\chi^2(2)=17.841$, $p<.01$)。残差分析では、上位群のク中止形使用が有意に多く、下位群のク中止形使用は有意に少なかった。このことから、形式の使い分けは日本語のレベルが反映されているといえる。

以上のように、学習者は母語話者に比べるとク中止形の使用が少ないが、レベルとは相関して、上位群になるとその使用が多くなることがわかった。

3.3.2 関係的意味と形式との相関について

ここでは、関係的意味による形容詞中止形の二つの形式の使用状況の違いについて見ていく。関係的意味の分類としては、津留崎(2003a)を参考に、「並列」「前提」「先行事態」「原因」「注釈・関係・評価」「副状態」の6つを設けた³¹。それぞれの特徴は以下のとおりである。例文は津留崎(2003a)による。

〈並列〉：先行節と後続節が意味的に独立し、対等な文。中止形述語と後続述語は、時間的局在性や評価性において同種となる。前後の順序の入れ換えができる。クテ中止形とク中止形は交替可能である。

- (1) 花子は優しくて明るい。
- (2) 花子は優しくて、雪子は明るい。

³¹ 中俣(2015)では、並列表現の体系の中で、「て形」「連用形」について12の意味関係のタグ(「同形式」「同構造」「同評価」「理由」「対比」「例示」「一般化」「精緻化」「付加」「細分化」「代替」「無」)により詳細な分析をしている。本研究の分類の範囲では「並列」「前提」「注釈・解説・評価」と重なる。

〈前提〉：先行節の事柄を前提として、さらに詳しい内容を後続節で述べる文。中止形述語と後続述語は、時間的局在性や評価性において同種となる。概要→詳細、全体→部分、状況→状況下の様子のような順序性がある。前後の順序を入れ換えるとやや不自然になる。ク中止形とクテ中止形は交替可能である。

(3) 父方はスーと鼻筋が通っているが、母方は丸くて小鼻が張っている。

(4) ほとんど人影はなく、廃屋ばかりが並んでいる。

〈先行事態〉：先行・後続節において述べられる二つのできごとが継起関係となる。形容詞中止形では、時の経過を表す状況語が示されている場合に限られる。前後の順序を入れ換えると不自然。ク中止形とクテ中止形は交替可能。

(5) 戦時中からそういう傾向が著しく、敗戦後は加速度でこの年頃の人たちが変わっていった。

〈原因〉：先行節と後続節が因果関係をもつ。前後の順序の入れ換えは不可、または不自然となる。ク中止形とクテ中止形は、一部交替できない（(8)のように反射的な生理反応の場合）。

(6) 花子は痛くて声を上げた。（先行原因）

(7) 花子は優しくて皆に人気がある。（条件）

(8) このりんごは甘くておいしい。（根拠）

〈注釈・解説・評価〉³²：先行節が、後続節で述べられる事柄に対する判断・解説・気持ちなどの語り手の心的態度を表す。前後の順序を入れ替えると、前件が根拠を表す。ク中止形とクテ中止形は交替可能である。

(9) 田中先生は厳しくて、忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる。（注釈）

(10) (焼夷弾は)サイダー瓶よりも長く 50センチはあったという。（解説）

(11) 花子はさすがに足が速くて、前の選手を次々と追い抜いた。（評価）

〈副状態〉：主体の主たる状態や動作が後続節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を先行節で述べる。運動と併存する主体の状態を表す点が、「速く（走る）」といった情態副詞が速さの側面にのみ言及しているのとは異なる。前後の順序を入れ換えることはできない。ク中止形のみの用法でクテ中止形への交替は不可である。

³² 津留崎氏は「注釈」「解説」「評価」を別項目としているが、「陳述成文に近づく」ものとしては同じグループとして扱っている。本研究ではひとつの項目とした。

(12) 花子は声もなく、立ちつくしている。

なお、学習者の用例中、例 (15) のように関係の意味が明確でなく、判別できなかったものについては、「分類不可」の項目に入れた。

(13) 卒業したからずっとお会い機会がなくて、お元気ですか。

(タスク 5_C020 中国語下位群)

以下、結果について考察を行う。まず、表 3 で用法の分布を概観すると、日本語母語話者・学習者ともに全ての関係の意味で形容詞中止形が現れている。使用の割合が最も高いものから挙げると、母語話者・学習者とも「原因」→「並列」→「前提」の順になっている。

表 3 母語・関係の意味別形容詞中止形の使用回数と使用率

関係的 意味 母語	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解 説/評価	副状態	分類 不可	合計
日本語	20 (29%)	10 (14%)	1 (1%)	30 (43%)	5 (7%)	3 (4%)	0 (0%)	69 (100%)
韓国語	25 (23%)	13 (12%)	5 (5%)	52 (49%)	10 (9%)	2 (2%)	0 (0%)	107 (100%)
中国語	29 (35%)	6 (7%)	1 (1%)	36 (40%)	4 (5%)	3 (4%)	3 (4%)	82 (100%)

津留崎 (2003a) では、「前提」「注釈・解説・評価」が形容詞述語に特徴的な用法とされている。初級で指導項目とはなっていないが、学習者にもこれらの用法での使用が見られた。次に挙げる例は、いずれも先行節で概要や判断が、後続節でその詳細や具体的な説明が述べられている。

(14) それから 2008 年まではほぼ横ばい状態に等しく販売台数はなかなか増えなかった。
(タスク 03_K009 韓国語上位群) (注釈・解説・評価)

(15) まず、地域全体を見ると、老人と若い夫婦の人数は非常に多く、地域全体の 65% も占めています。
(タスク 6_C033 中国語上位群) (注釈・解説・評価)

(16) 韓国でのキムチは辛いほどまいキムチであると認識されていることが多く、その辛みとしては唐辛子を用います。
(タスク 9_K026 韓国語上位群) (前提)

(17) 鍋の中身は特に、決まりはなく好きなものを好きなだけ鍋に入れて楽しめることができるので、具材選びもその人気の一つかも知れません。

(タスク 9_C049 中国語下位群) (注釈・解説・評価)

「前提」「注釈・解説・評価」の用例数を学習者のグループ別に見ると、下位群よりも上位群に多く現れていたが、統計的な有意差は認められなかった。このような文が使えることは、上級者としてのひとつの特徴である可能性はあるが、初・中級レベルとの違いを

見る必要がある。

次に、形式ごとの内訳を表 4 で見てみる。

表 4 母語・形式・関係の意味別形容詞中止形の使用回数

母語 \ 関係の意味		並列	前提	先行 事態	原因	注釈/ 解説/評価	副状態	分類 不可
日本語	ク中止形	16 (1)	9	0	20	5	3	0
	クテ中止形	4 (2)	1	1	10	0	0	0
韓国語	ク中止形	7 (0)	10	2	10	6	2	0
	クテ中止形	18 (8)	3	3	42	4	0	0
中国語	ク中止形	7 (2)	3	1	5	4	3	0
	クテ中止形	22 (8)	3	0	31	0	0	3

※並列の () 内の数値は名詞修飾成分(「広くてきれいな部屋」)の用例数

まず、学習者について、文法的に使用が認められない箇所への用例の分布は、見られなかった。母語話者と学習者で二形式の現れ方に違いが見られたのは、「並列」と「原因」においてである。まず、「並列」において、母語話者はク中止形が多いのに対し、学習者はクテ中止形が多く、大きく差が出ている。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差が認められ、残差分析では母語話者のク中止形使用と学習者のクテ中止形使用が有意に多かった($\chi^2(2)=17.787$, $p<.01$)。その要因の一つとして考えられるのは、() 内の数値で示したように、学習者は母語話者よりも「おとなしくて勤勉な好青年」のようなクテ中止形を用いた「名詞修飾成分の並列」の用例が比較的多く見られたことである。学習者にとって人や物の特徴を表すのに使いやすい形式であることが窺える。次に、「原因」についても、母語話者はク中止形が多いのに対し、学習者はクテ中止形に使用が偏っていた。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差があり、残差分析では母語話者のク中止形使用と、学習者のクテ中止形使用が有意に多かった($\chi^2(2)=26.695$, $p<.01$)。小説を対象とした調査である津留崎(2003a)では、「クテ中止形は《原因》の例が多い」(p. 26)とされているが、今回の日本語母語話者の結果は「ク中止形」の方が多かったため、結果が異なっているといえる。その要因としては、津留崎氏のデータには会話文が含まれていることと、本コーパスでは次の例(18)(19)に見るように、目上に宛てて書く想定 of 作文にク中止形が多く用いられていることが考えられる。

(18) 今回、レポートを書く際に『環境学入門』という本が必要なのですが、図書館にはなく、借りることができませんでした。(タスク 1_J025 日本語)

(19) 私の故郷は自然がとても多く、都会の忙しさを忘れることができます。(タスク 7_J029 日本語)

最後に、「前提」や「注釈・解説・評価」については用例数が限られているが、母語話者・学習者ともにク中止形の使用への偏りが窺える。データ数を増やし、引き続き分析を行いたい。

以上、関係的意味と形式との相関について見てきた。学習者は、母語話者と同様にさまざまな関係的意味で形容詞中止形を用いており、形容詞中止形に特徴的な「前提」や「注釈」といったものも見られた。また二形式の使い分けについては、「並列」と「原因」においてクテ中止形の使用が母語話者よりも多い傾向が見られた。

3.3.3 タスクの種類と形式との相関について

「YNU 書き言葉コーパス」の大きな特徴は、「書く」という言語活動を体系的に把握し、それを類型化した上でのタスクを設定していることである。その類型とは、①自分から書く「自発型」か、相手に頼まれそれに応じて書く「頼まれ型」か、②読み手が「特定（親疎関係の別を含む）」であるか「不特定」であるか、③やや短い文章の「依頼・説明・描写」（長さA）か、長い文章の「意見・手紙・物語」（長さB）か、というものである。次ページの表5は、12のタスクの内容と類型についてまとめたものである。本節では、このタスクの種類と形容詞中止形の二形式の使用の相関について述べる。一般に、「連用形（形容詞ク中止形）」は書き言葉的、「テ形（形容詞クテ中止形）」は話し言葉的であるといった違いがあることが知られている。結論から述べると、今回の調査では学習者による形式の使い分けは、「特定・親」「特定・疎」の違い、また「自発型」「頼まれ型」の違いと相関していることがわかった。

表 5 タスクの内容と類型

タスク	内 容	読み手	自発/ 頼まれ	長 さ
1	メールで面識のない先生から図書を借りる	特定 (疎)	自 発	A
4	メールで大学の学長に奨学金増額の必要性を訴える			B
7	先生に自分の故郷のお勧めの観光地や名物についてメールで伝える		頼まれ	A
10	先生からのメールに対して早期英語教育の是非について意見を述べる			B
2	メールで親しい友人から図書を借りる	特定 (親)	自 発	A
5	入院中の後輩に励ましの手紙を書く			B
8	友人に起こったできごとを親しい第三者に報告する		頼まれ	A
11	友人からのメールに対して早期英語教育の是非について意見を述べる			B
3	デジタルカメラの販売台数に関する図を説明する	不特定	自 発	A
6	市民病院の閉鎖に対して反対の意見を新聞社に投書する			B
9	広報紙で料理の作り方を紹介する		頼まれ	A
12	小学生新聞の昔話コーナーで物語（七夕）を紹介する			B

まず、表 6 により、読み手の違いによる二形式の使用回数の違いを見る。

表 6 「特定（親・疎）」「不特定」における母語別使用回数

タスクの 種類 母語	特定・疎		特定・親		不特定	
	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形
日本語	24	1	1	10	25	5
韓国語	15	19	3	16	17	35
中国語	12	12	0	10	9	35

「特定・親」「特定・疎」の違いと、形式との相関について見てみると、いずれの母語話者についても、「特定・疎」の場合にク中止形を多く用いている。カイ二乗検定の結果、それぞれ有意差が確認された（日本語： $\chi^2(1)=23.250$, $p<.01$ 、韓国語： $\chi^2(1)=3.190$, $p<.05$ 、中国語： $\chi^2(1)=5.693$, $p<.05$)。「特定・親」における中止形の使い分けは、日本語母語話者と学習者は似た傾向を示しているといえる。一方、「特定・疎」における日本語母語話者によるクテ中止形の使用の低さは際だっており、目上に対してはより改まり度の高いク中

止形を積極的に用いていることがわかった。なお、「特定（親・疎の合計）」と「不特定」の間には、日本語母語話者・学習者いずれにおいても有意差はなかった。

次に、「不特定」における二形式の使い分けについて見てみる。この「不特定」に含まれるタスクは、グラフ説明（レポート）、広報紙や新聞への投稿、昔話紹介といったものである。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差があり、残差分析では母語話者のク中止形が有意に多かった（ $\chi^2(2)=31.499$, $p<.01$ ）。中級以降の書き言葉の文体の指導において、いわゆる「テ形」ではなく「連用形」を使うことは項目として必ず取り上げられることであるが、調査結果からは学習者によるク中止形の使用は低く、母語話者との差があることが明らかになった。

次に、表7により、書き手が自分から書いた「自発型」か、依頼を受けて書いた「頼まれ型」という類別と形式との相関について見てみる。

表7 「自発型」「頼まれ型」における母語別使用回数

タスクの種類 母語	自発型		頼まれ型	
	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形
日本語	16	5	34	11
韓国語	25	27	10	43
中国語	11	13	10	44

カイ二乗検定の結果、日本語母語話者については、「自発型」か「頼まれ型」の違いは形式の使い分けに有意差はなかった（ $\chi^2(1)=0.064$, $n.s.$ ）。

一方、学習者の場合はいずれも「頼まれ」におけるクテ中止形の使用が多く、有意差が認められた（韓国語： $\chi^2(1)=8.806$, $p<.01$ 、中国語： $\chi^2(1)=4.989$, $p<.05$ ）。韓国語母語話者についてはクテ中止形の使用数が増えた要因を示唆するデータがある。それは、自らが先生に依頼をする「図書貸し出し願い」の作文と、先生からの依頼に応えた「故郷の観光地紹介」の作文における二形式の使用数の違いである。前者では両形式を用いているにも関わらず（ク6例、クテ6例）、後者では全てクテ中止形が選択されていた（ク0例、クテ8例）。母語話者の場合は両タスクですべてク中止形が用いられている。韓国語母語話者は同じ「先生」宛てであっても、「故郷について紹介を依頼されたこと」に関して、より親しみを表すためにクテ中止形の使用が多くなった可能性がある。今後、他の品詞の中止形も合わせて集計を行うと同時に、学習者のポライトネスの意識といわゆる「スタイルの切り替え」との関わりについて追跡調査が必要だと考える。

最後に、表8で文章の長さの違いによる形式別の使用回数について確認する。カイ二乗検定の結果、いずれの母語においても、使い分けに有意差は見られなかった（日本語： $\chi^2(1)=0.321$, $n.s.$ 、韓国語： $\chi^2(1)=0.031$, $n.s.$ 、中国語： $\chi^2(1)=0.073$, $n.s.$ ）。よって、文章の長さは両中止形の使い分けに関与していないといえる。

表 8 「長さ A」(短め)・「長さ B」(長め) における母語別使用回数

母語 \ タスクの種類	長さ A (短)		長さ B (長)	
	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形
日本語	28	7	22	9
韓国語	26	38	19	32
中国語	8	18	13	39

以上、タスクの種類と形式の使い分けについて観察した。学習者は、読み手の親疎関係により二形式を使い分けており、この点は母語話者の傾向と共通していた。一方で、「自発型」「頼まれ型」の違いについては学習者にのみ有意差が確認された。

3.3.4 学習者に見られた不自然な用例について

津留崎 (2003b) では、誤用の可能性として「??このパソコンは便利で軽いです」(p. 150) のように、根拠とその評価を述べる順序が逆になることが指摘されていたが、今回の調査では確認されなかった。しかし、関係的意味が判断できない文、また、関係的意味は推測できるが日本語として不自然な用例がいくつか見られた。たとえば、次のような例である。

(20) 毎日笑顔もなくて泣いています。 (タスク 12_C026 中国語下位群)

例 (20) は、「副状態」の用例と考えた場合、「毎日笑顔もなく泣いている」にすると許容されるだろう。しかし、事態をただ並列させているという可能性も考えられるため、学習者の使用意図について断定することはできない。また次のような例もあった。

(21) 一番年下の仙女は一番かわいくて、天宮に住んでいる仙人たちの着物を作るための布を織る仕事を担当していました。 (タスク 12_C0039 中国語上位群)

例 (21) は、先行節で容姿の「特性」を述べ、後続節でどんな仕事をしているかという「習慣・活動」を述べており、時間的局在性・評価性において前後の述語が同種ではない。よって「並列」「前提」の特徴から外れている。また、「かわいい」ことと、「布を織る仕事を担当する」ことには関連性はないため、「原因」「注釈・解説・評価」としての解釈も成立しない。このような点で、(21) は不自然さを感じさせる文となっている。

以上のように、中止形を使って日本語として違和感なく二つの事態を並べることはそれほど単純なことではない。日本語母語話者が書いた文でも、「安易な使い方」により、読み手に負担をかけるものがあることが指摘されている³³ (高橋 1960)。原因用法に関して

³³ たとえば、「あれ肌は小ジワ、シミ、タルミ、ヒフの老化の原因になり、お化粧乗りが悪く、あれ肌は、油断できません。(新聞広告)」(p. 106) などがある。

は、「*暑くて、窓を開けてください。」のような例を用い、後件のモダリティ制限について積極的な指導が行われているが、単純に「並列」させているような例については、見過ごされることが多いように思われる。不自然さを感じさせる例について丁寧に観察していく必要がある。

4. 本章のまとめ

本章では、上級日本語学習者のイ形容詞中止形の使用状況について、コーパス調査をもとに关系的意味及び作文タスクの種類の観点から分析を行った。その結果、どのような关系的意味で使用しているかについては、上級日本語学習者と母語話者の使用率に大きな違いは見られなかった。また、学習者の用例には、初級で指導項目とはなっていない「前提」「注釈・解説・評価」といった形容詞述語に特徴的なものも観察された。タスクの種類と形式の使い分けについては、母語話者・学習者ともに相関が認められた。学習者は、読み手が「親（友人）」か「疎（目上）」かによって形式を使い分けており、意識されていることがわかったが、母語話者の使い分けはさらに徹底されており差が見られた。

今後さらに、「关系的意味」と「タスクの内容」との相関について調査・分析を行う必要がある。また、母語の種類やレベルの範囲を拡大しながら、どのように文法シラバスやライティング指導に組み込んでいくべきか提言ができるよう、考察を続けたいと考える。

第 6 章

ナ形容詞・述語名詞による中止形接続について

1. 本章の目的

本章では、日本語学習者によるナ形容詞及び述語名詞の中止形の使用状況について、第 5 章で観察したイ形容詞の結果と合わせて記述し、静的述語による中止形接続の全体について明らかにする。

第 5 章で述べたように、中止形の研究は、動詞以外の静的述語、すなわち形容詞や述語名詞の中止形についての研究は立ち後れていたが、津留崎（1999、2000、2003a）の一連の研究により、動詞とは異なる、静的述語の中止形が表す関係的意味が明らかにされてきた。日本語教育においても、中止形については、動詞のいわゆる「て形」「連用形」の用法に重きが置かれ、形容詞や述語名詞の中止形は、初級の段階では例文（1）（2）のように、「並列」「原因」の用法のみが紹介される。

- (1) a. この部屋は広くて、明るいです。
- b. 奈良は静かで、きれいな町です。
- c. カリナさんはインドネシア人で、富士大学の学生です。

（『みんなの日本語 I』第 16 課）

- (2) a. 問題がむずかしくて、わかりません。
- b. 説明がふくざつで、わかりません。
- c. 地震でビルが倒れました。

（『みんなの日本語 II』第 39 課）

(2) c. は、述語名詞の中止形ではなく「名詞+格助詞デ」の用法である。述語名詞の中止形が「原因」を表すのは、「彼女は優等生で、奨学金をもらっている。」のような文であるが、このようなタイプは提示されていない³⁴。そして、中級以降は文法項目として取り上げられることはほとんどなく、読解教材等において、いわば学習者による自然習得に任せられる部分が多い。

本章では、日本語学習者によるナ形容詞・述語名詞による中止形接続の使用状況につい

³⁴ 蓮沼・有田・前田（2001）では、「名詞述語の場合は、「名詞+デ」のデが、ダのテ形なのか、原因を表す格助詞のデなのか区別しにくいことが多く、その違いも連続的である」（p. 123）との指摘がある。

て調査を行い、第5章で明らかにしたイ形容詞の調査結果も加え、これまで明らかにされていない静的述語全体の使用傾向について明らかにしたいと考える。

2. 先行研究

2.1 日本語学における研究

日本語学において、形容詞・述語名詞の中止形について研究したものは動詞の中止形に比べ非常に少なく、上述の津留崎（1999、2000、2003a）が代表的なものであるといえる。

これらにおいては、中止形の関係的意味の成立には品詞性とその要因として深く関わるがゆえ、その全体像を明らかにするためには、動詞のみならず形容詞や述語名詞など静的述語についても品詞ごとに検証することが必要である、という主張が一貫してなされている。そして小説の用例をデータとし、形容詞及び述語名詞の中止形が担う関係的意味には、「並列」「前提」「先行事態」「原因」「注釈」「解説」「評価」「副状態」の8種があることを明らかにしている。

品詞ごとの特徴としては次のようなことが指摘されている。まず、述語名詞については、名詞述語文の多くは特徴を表す文であるため、その中止形も特徴を表すのが基本的であるが、述語性が弱まると解説や評価などの陳述成分に変化したり、また後続する動詞の表すデキゴトの先行事態や副状態を表したりもする（津留崎 1999）。ナ形容詞の中止形については、動詞が修飾成分になるものが多いのとは対照的に、陳述成分になるものが多いとしている。その理由は、形容詞という品詞に語り手の「判断」の要素が大きく入り込むためである。

また、述語名詞の中止形と特徴が似るところもあるが、形容詞は程度性を持つため、述語名詞にはない比較表現が現れるという相違点がある（津留崎 2000）。イ形容詞の中止形については、「ク中止形」「クテ中止形」という二つの形式の使い分けも分析の観点に加え、運動を表さない形容詞は先行事態を表す例は少なく、語り手の心的態度を表す成分に近い「注釈」「解説」「評価」などを表す例がある（津留崎 2003a）。

津留崎の関係的意味の枠組みは、動词的述語と静的述語の両方を視野に入れた包括的・体系的なものである。これにより、動詞の中止形が「先行事態」や「副状態」という関係的意味が中心になるのに対し、静的述語の中止形は、動詞ではあまり注目されていなかった「前提」や、「注釈」「解説」「評価」といった関係的意味を担うということが明らかになり、研究が大きく進んだといえる。

2.2 日本語教育における研究

静的述語の中止形に関する研究は非常に数が少ない。その中で、中止形の指導法について問題提起をしているものとして、第5章でも見た津留崎（2003b）がある。そこでは、初級教科書における形容詞や述語名詞の中止形の扱いについて、動詞中止形の表す関係的意味にあてはまる用法のみが取り上げられているとの指摘がある（p. 145）。静的述語の中止形については、文法的説明がなされることがあまりなされてはいないことに関して、

学習者は「習うより慣れろで、経験によって理解していく」(p. 151) ことになるとし、教育上の問題であると指摘している。

本章では、上級日本語学習者によるナ形容詞・述語名詞の中止形の使用についてコーパス調査をし、5章で明らかにしたイ形容詞の結果と合わせて分析を行う。それにより、静的述語による中止形接続の全体像を明らかにしたいと考える。

3. 調査

3.1 調査概要

本研究の調査対象は、「YNU 書き言葉コーパス」である。日本人大学生 30 名と、留学生（韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 30 名）による作文タスクが 90 名×12 タスク、計 1080 編の作文がデータとなっており、量・質ともに均整のとれたコーパスであるといえる³⁵。留学生の日本語のレベルは、調査協力者の約 7 割が日本語能力試験 1 級 (N1 を含む) 合格者であり、一般には「上級」と称されるレベルである。またそれぞれの作文について一定の基準に基づいて評価が行われており、達成できたタスクの数に応じて、「上位群」「中位群」「下位群」の 3 つのグループに分けられている。本研究ではこれを上級学習者の中でのさらなるレベル分けと捉え、考察の観点の一つとして用いることとする。

調査の方法について述べる。分析対象は、静的述語の中止形、すなわち、イ形容詞、ナ形容詞、述語名詞の中止形である。イ形容詞の中止形には、「ク」「クテ」という二つの形式がある。また、ナ形容詞と述語名詞の場合は、「デ」「デアリ」「デアッテ」という三つの形式がある。

データの抽出方法としては、まず、「YNU 書き言葉コーパス」の全作文のファイルに対し、UniDic-mecab ver. 2.1.1 によって形態素解析を行った。そして活用形について、イ形容詞は「連用形」が、ナ形容詞・名詞については「助動詞ダ 連用形 一般」のものを抽出した。ここで「助動詞ダ 連用形 一般」には、「～ので／～んで／～のではないか」「～でない／～でなく」など中止形ではないものや、誤解析により抽出された格助詞「で」(例「病院でいる」) などが含まれているため、目視にてそれらを除いた³⁶。

ナ形容詞と名詞の区別については、品詞間の連続性により認定が難しいため、本研究では、村木 (2012) を参考にし、表 1 に示す「UniDic による品詞タグ」によりナ形容詞と名詞の数をそれぞれ集計した。表中の「連体形式」「例」は村木による。なお、津留崎 (1999) では、名詞のうち「こと」や「もの」といった抽象名詞は調査対象から除かれていたが、本研究では「みそ汁は日常的に食べられているもので」や「その女性の仕事は神様達が使う布を作り出すことで」といった例が、物事の説明として一定数あったため、調査対象として扱い「述語名詞」に含めた。

³⁵ 母語別の総形態素数は日本語母語話者が 79447、韓国語母語話者が 81356、中国語母語話者が 88828 である。

³⁶ 中村・伝 (2008) では、MeCab における品詞同定の形態素解析誤りは、助詞・助動詞間の品詞誤り (たとえば、助動詞「だ」の連用形であると解析すべきところを、格助詞であると解析してしまう誤り) が最も多く品詞同定誤りの中の 1/3 を占めるとしている。

表 1 各品詞の連体形式と形態素解析による品詞タグ

	連体形式	例	UniDic による品詞タグ
イ形容詞	－い	長－、高－	形容詞－一般
ナ形容詞	－な	静か－、有名－	形状詞－一般
	－な／－の (格の体系なし)	様々－、特別－	形状詞－一般
	－な／－の (格の体系あり)	自由－、元気－	名詞-普通名詞-形状詞可能
	－の (格の体系なし)	がらあき－ 上々－ 大荒れ－	名詞 形状詞－一般 名詞-普通名詞-形状詞可能
述語名詞	－の (格の体系あり)	町、病院、こと	名詞-普通名詞－一般
		～台	名詞-普通名詞-助数詞可能
		仕事、刺激、もの	名詞-普通名詞-サ変可能
		一人、日常	名詞-普通名詞-副詞可能

以上のようにして得られた静的述語の中止形について、津留崎が設定した意味的な枠組みである「関係の意味」の観点と、作文タスクの内容の観点を中心に集計・分析を行う。一つめの観点である「関係の意味」とは、「先行節（の中止形の語）が後続節（の述語）の表す事柄に対して、どのような意味を担っているかを言う」（津留崎 2003b:151）と定義されるものである。関係の意味の分類については、次節にて詳細を示す。二つめの観点である作文タスクの内容については、読み手が特定されているかどうか、また特定されている場合の親疎関係（目上か友人か）という違いに注目する。読み手を軸として「YNU 書き言葉コーパス」のタスクを整理すると、表 2 のようにまとめられる。

表 2 タスクの内容と読み手（再掲）

タスク 番号	内容	読み手
1	面識のない先生に図書を借りる（メール）	特定・疎 （目上）
4	学長に奨学金増額の必要性を訴える（メール）	
7	ゼミの先生に観光地や名物を紹介する（メール）	
10	先生に早期英語教育について意見を述べる（メール）	
2	友人に図書を借りる（メール）	特定・親 （友人）
5	入院中の後輩に励ましの手紙を書く	
8	先輩に起こった事件を友人に教える（携帯メール）	
11	友人に早期英語教育について意見を述べる（メール）	
3	レポートでデジカメの販売台数に関する図を説明する	不特定
6	市民病院の閉鎖について新聞に投書する	
9	広報紙で国の料理を紹介する	
12	小学生新聞で七夕の物語を紹介する	

以下、第 4 節では、4.1 概観、4.2 関係的意味からみた使用状況、4.3 作文タスクの特徴からみた使用状況、4.4 学習者のレベルからみた使用状況、4.5 学習者に見られた不自然な用例について、の順で調査結果をみていくこととする。

3.2 調査結果

3.2.1 概観

イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の中止形の使用を母語別に比較してみると、表 3 のようになる。イ形容詞については第 5 章の調査データに基づく。

表 3 静的述語の中止形の品詞別使用頻度

	イ形容詞	ナ形容詞	述語名詞
日本語	69	39	40
韓国語	107	32	29
中国語	85	46	45

品詞別に使用頻度を比較すると、いずれの母語話者も、イ形容詞が突出して高く、ナ形容詞と述語名詞の使用数はほぼ同数となっている。日本語母語話者と学習者の傾向は似たものとなっているといえる。カイ二乗検定³⁷の結果、日本語母語話者と韓国語母語話者とは、イ形容詞については韓国語母語話者が有意に多く、述語名詞については日本語母語

³⁷ js-STAR (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用。

話者が有意に多かった ($\chi^2(2)=9.420$, $p<.01$)。日本語母語話者と中国語母語話者では、有意差はなかった。なお、「YNU 書き言葉コーパス」におけるイ形容詞・ナ形容詞・名詞の全使用数は、表 5 に示すとおりイ形容詞が最も少ないが、中止形で用いられる割合は、表 4 のようにナ形容詞や名詞よりも高くなっているということになる。

表 4 品詞別・中止形での使用率（中止形での使用数÷全使用数）

	イ形容詞	ナ形容詞	名詞
日本語	10.5%	3.1%	0.3%
韓国語	12.3%	3.1%	0.3%
中国語	9.3%	3.7%	0.4%

表 5 品詞別全使用数（形態素解析による集計）

	イ形容詞	ナ形容詞	名詞
日本語	655	1103	10999
韓国語	872	1032	10640
中国語	918	1168	12006

3.2.2 関係的意味と形式の相関について

ここでは、関係的意味からみた母語別の使用状況をみる。本研究では、津留崎（1999、2000、2003a）における分類を参考にし、「並列」「前提」「先行事態」「原因」「注釈³⁸・解説・評価」「副状態」の 6 つを設けた。関係的意味の種類とその特徴及び例文（イ形容詞、ナ形容詞、述語名詞の順）を以下に示す。例文は津留崎による。

〈並列〉：先行句節と後続句節が意味的に独立し、構文的にも意味的にも対等な文。互いに入れ替えても意味が変わらない。

①花子は優しくて、明るい。/花子は優しくて、雪子は明るい。

②花子は素直で、明るい。/花子は素直で、雪子はわがままだ。

③花子は北海道生まれで、雪子は沖縄生まれです。

〈前提〉：先行句節が主語の全体像としての概要を捉えて前提となり、後続句節において詳細な内容が述べられる文。概略→詳細、全体→部分のような順序性がある。前後を入れ替えると不自然になる。

³⁸ 津留崎（1999、2000）においては、「抽象」という用語が用いられているが、津留崎（2003a）にて「注釈」という用語に改められているため、本研究では「注釈」を用いる。

- ④花子は顔が丸くて目が大きい。
- ⑤花子は素直で、よく笑う。／長女は活発で、次女も明るい。
- ⑥花子は長女で、横浜に住んでいる。

〈先行事態〉：先行・後続句節において述べられる二つのできごとが継起関係となるもの。
 形容詞の場合は、時の経過を表す状況語が必要。名詞の場合は、動作を表す名詞が先行節に置かれる。前後の順序を入れ替えると不自然。

- ⑦花子は合格がとてもうれしく、そのうれしさは喜びに変わった。
- ⑧花子は北海道生まれで、去年東京に転校した。

〈原因〉：先行句節と後続句節が因果関係を持つ。先行節は原因・条件・根拠となっている事柄をさしだす。前後の順序の入れ換えはできない。

- ⑨花子は優しくて、皆に人気がある。
- ⑩花子は心配で、何度も時間を確かめた。
- ⑪花子は帰国子女で、英語を上手に話す。

〈注釈・解説・評価〉：中止形が後続句節の内容を抽象化してまとめ、主語の特徴としてさしだしたり、原理や関係性（異同・類似・真偽）といった解説を与えたり、語り手の評価を表す。前後を入れ替えると、前件が根拠を表す。

- ⑫田中先生は厳しくて、忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる。（注釈）
- ⑬花子は従順で、親のことをよく聞いた。（注釈）
- ⑭花子は生意気盛りで、決めたことにいちいち文句を言う。（注釈）
- ⑮花子はいつもの習慣で、7時には目が覚めた。（解説）
- ⑯さすがにプロで、花子の作品は見事だ。（評価）

〈副状態〉：主語の動作と平行して、同じ場面に存在する副次的な状態（服装、姿勢、動作、表情、心理状態等）。後続句節の述語は動詞で動作を表す。前後の入れ換えは不可。

- ⑰花子は声もなく立ちつくしている。
- ⑱花子は元気で、学校生活を送っている。
- ⑲花子は終始無言で、手だけを動かしている。

なお、特に学習者の用例のうち、いずれにも分類できなかったものを分類する枠として

「不明」を設けた。たとえば、次のような例である。

- (3) 私が大好きな韓国料理であり、チヂミをご紹介しましたがいかがでしたか？
(タスク 9_K009 韓国語下位群)

以下、集計結果を品詞別に示す。表 6 はイ形容詞、表 7 はナ形容詞、表 8 は述語名詞である。なお、「並列」における（ ）内の数値は「並列」のうち、名詞修飾成分の中に現れた例（「広くてきれいな部屋」「仕事熱心で真面目な青年」など）の用例数である。

表 6 イ形容詞中止形の関係的意味別使用頻度と使用率 (第 5 章表 3 改編)

	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解説 /評価	副状態	不明	合計
日本語	20 (3) (29%)	10 (14%)	1 (1%)	30 (43%)	5 (7%)	3 (4%)	0 (0%)	69 (100%)
韓国語	25 (8) (23%)	13 (12%)	5 (5%)	52 (49%)	10 (9%)	2 (2%)	0 (0%)	107 (100%)
中国語	29 (10) (35%)	6 (7%)	1 (1%)	36 (44%)	4 (5%)	3 (4%)	3 (4%)	82 (100%)

表 7 ナ形容詞中止形の関係的意味別使用頻度と使用率

	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解説 /評価	副状態	不明	合計
日本語	10 (5) (26%)	1 (3%)	0 (0%)	15 (38%)	12 (31%)	1 (3%)	0 (0%)	38 (100%)
韓国語	19 (11) (59%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (16%)	8 (25%)	0 (0%)	0 (0%)	32 (100%)
中国語	18 (10) (42%)	0 (0%)	0 (0%)	20 (47%)	3 (7%)	1 (2%)	1 (2%)	43 (100%)

表 8 述語名詞中止形の関係的意味別使用頻度と使用率

	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解 説/評価	副状態	不明	合計
日本語	4 (10%)	14 (35%)	0 (0%)	13 (33%)	8 (20%)	1 (3%)	0 (0%)	40 (100%)
韓国語	2(1) (7%)	10 (34%)	0 (0%)	12 (41%)	2 (7%)	1 (3%)	2 (7%)	29 (100%)
中国語	4 (9%)	8 (18%)	0 (0%)	25 (57%)	2 (5%)	1 (3%)	4 (9%)	44 (100%)

小説をデータとした津留崎の研究（津留崎 1999・2000・2003a）では、次のことが指摘されている。

- ・「前提」「注釈・解説・評価」がイ形容詞述語に特徴的な用法である。
- ・動詞の中止形は修飾成分になるものが多いが、形容詞のデ中止形は陳述成分になるものが多い。
- ・名詞述語中止形の用例には、「前提」を表す文が多く現れる。

日本語母語話者については、津留崎の指摘のとおり、「原因」「並列」に次いで、イ形容詞と述語名詞では「前提」の使用が、ナ形容詞では「注釈・解説・評価」の使用が多くなっていた。用例をあげる。

- (4) 具材は家庭によって様々で、納豆などユニークなものを入れる人もいます。

(タスク 9_J004 日本語) (注釈)

- (5) 日本人はとにかくソバが好きで、駅にソバのファストフードスタンドがあったりするほど。

(タスク 9_J022 日本語) (注釈)

- (6) 肉じゃがは、日本の一般的な家庭料理のひとつで、ごはん（白米）によく合うおかず、もしくはお酒のおつまみとして、人気があります。

(タスク 9_J012 日本語) (前提)

学習者については、特に形容詞において、母語話者よりも「並列」が多くなっているのが特徴的である。それは、名詞修飾成分の中での使用例（「仕事熱心で真面目な青年」）が多くなっていることによる。その点を除けば、いずれの品詞についても、母語話者との大きな比率の違いは見られない。注目すべき点は、学習者にもナ形容詞や述語名詞において、初級で学習する「並列」「原因」以外の「前提」や「注釈/解説/評価」の用例が一定数見られることである。例文を示す。

- (7) ピョンは月の形をしたお餅で、中にはあんこ、溶かした黒砂糖などが入っています。
(タスク 9_K010 韓国語上位群) (前提)
- (8) 私自身も一人の学習者であり、言語教育関連の仕事をしたいと思っておりますので、この計画にはとても興味があります。
(タスク 10_C058 中国語上位群) (前提)
- (9) 具材はすごくシンプルでおもちとキャベツ、韓国式のおでんがあればオッケーです。
(タスク 9_K038 韓国語中位群) (注釈)
- (10) そして、2008 年までは横ばいでずっと 60 千台という販売台数を維持している。
(タスク 3_C046 中国語上位群) (注釈)

これらは、先行句節において概略や特徴を述べ、後続句節で詳細を述べる構造となっており、物事を説明する文として適切なものとなっている。

3.2.3 タスクと形式との相関について

ここでは、「読み手」の違いによって形式がどのように選択されているか、というタスクと形式との相関をみる。「読み手」は、先生や学長といった目上の人を対象とする「特定・疎」、友人や後輩を対象とする「特定・親」、そして広報紙や新聞投書のように不特定多数の読者を対象とする「不特定」の三つがある。形式別の使用頻度は、以下の表 9 (イ形容詞)、表 10 (ナ形容詞)、表 11 (述語名詞) のようになる。

表 9 イ形容詞中止形の読み手別使用頻度と使用率 (第 5 章 表 6 改編)

	特定・疎 (目上)		特定・親 (友人)		不特定	
	クテ	ク	クテ	ク	クテ	ク
日本語	1 (4%)	24 (96%)	10 (91%)	1 (9%)	5 (17%)	25 (83%)
韓国語	19 (56%)	15 (44%)	16 (84%)	3 (16%)	35 (67%)	17 (33%)
中国語	12 (50%)	12 (50%)	10 (100%)	0 (0%)	35 (80%)	9 (20%)

まず、表 9 のイ形容詞の結果について確認する。「クテ」「ク」の使用比率を見てみると、「特定・疎 (目上)」では、日本語母語話者の 9 割以上が「ク」を使用しているのに比べ、学習者は二形式の使用比率に大きな差はない。「特定・親 (友人)」では、いずれの母語話者においても、「クテ」の使用が圧倒的に多い。

また、「不特定」では、日本語母語話者は「ク」の使用が 8 割を超えているが、学習者は「クテ」の使用が韓国語話者が約 7 割、中国語話者が 8 割といずれも高くなっている。カイ二乗検定の結果、「特定・疎」と「不特定」においては、日本語母語話者は学習者に対して「クテ」の使用が有意に少なく、「ク」の使用が有意に多かった (「特定・疎」日韓間: $\chi^2(1)=15.069$, $p<.01$ 、日中間: $\chi^2(1)=11.038$, $p<.01$ 「不特定」日韓間: $\chi^2(1)=17.553$,

$p < .01$ 、日中間： $\chi^2(1) = 25.922$, $p < .01$ 。

以上のことから、学習者は、読み手によって二形式を使い分けてはいるが、その比率については母語話者と開きがあることがわかる。

次に、ナ形容詞について見てみる。

表 10 ナ形容詞中止形の読み手別使用頻度

	特定・疎（目上）			特定・親（友人）			不特定		
	デ	デアリ	デアッテ	デ	デアリ	デアッテ	デ	デアリ	デアッテ
日本語	8	0	0	7	0	0	24	0	0
韓国語	6	0	0	5	0	0	21	0	0
中国語	5	0	0	1	0	0	7	0	0

表 10 によると、今回の調査に限っては、いずれの母語話者においてもすべて「デ」という形式のみであり、「デアリ」「デアッテ」という形式は現れなかった。データが少ないことも関係すると思われるので、今後さらにデータを増やしての検証が必要である。

最後に、述語名詞について見てみる。

表 11 述語名詞中止形の読み手別使用頻度

	特定・疎（目上）			特定・親（友人）			不特定		
	デ	デアリ	デアッテ	デ	デアリ	デアッテ	デ	デアリ	デアッテ
日本語	3	0	0	5	0	0	24	8	0
韓国語	5	6	0	2	0	1	16	4	0
中国語	8	5	0	0	1	0	20	7	0

述語名詞の中止形については、日本語母語話者と学習者に違いが見られた。まず、「特定・疎（目上）」「特定・親（友人）」においては、日本語母語話者は「デアリ」「デアッテ」をまったく使用していない。一方、学習者には、「特定・疎（目上）」で複数の使用が見られた。例をあげる。

(11) 現在、円高であり、留学生の中でバイトなどでちゃんと勉強の時間を取れない人が多いそうです。（タスク 4_K023 韓国語下位群）

(12) 韓国はおいしい、美しい料理いっぱいの国であり、その一人（→ひとつ）を選ぶのもすごく悩んで、つらかったです。（タスク 9_K034 韓国語中位群）

(13) 北京は中国の首都であり、“故宮”や“萬里の長城”などありますし、“北京ダック”のような食べ物もいっぱいあります。（タスク 7_C036 中国語下位群）

このことから、学習者には目上の人を書く文体として「デアリ」を選択する傾向があることが窺えるが、これは日本語母語話者とは異なる特徴である。この点については、アンケートやインタビューによる意識調査で確認する必要がある。

次に、「不特定」においては、日本語母語話者・学習者ともに「デアリ」が使用されており、形式ごとの使用の割合も母語話者間で大きな差はない。しかし詳細を見てみると、日本語母語話者が使用した「デアリ」の8例は全て「タスク6」に現れたものであった。「タスク6」とは、「閉鎖が検討されている市民病院の存続を求める意見文を、新聞に投書する」というものであり、読み手は不特定多数が想定され、新聞の投書らしい文体が求められる課題である。用例をあげる。

(14) 市民総合病院の存続問題は命に直接関わる問題であり、また町に住む人々の元
気、活気にも関わる問題でもあるのである。(タスク6_J018 日本語)

(15) この病院に入っている産婦人科、リハビリテーション科は近隣の町にはないも
のであり、もしこの病院がなくなってしまうとなると、困る人々が沢山いること
は、考えずとも分かりそうなものである。(タスク6_J028 日本語)

一方、学習者の場合は、「タスク6」に限らず他のタスクにも使用があった。よって、学習者は母語話者と異なり、「デアリ」の使用には、新聞への投書としての文体は影響していない可能性がある。

以上のように「デアリ」の現れ方は日本語母語話者と学習者で異なっており、どのような場面で「デアリ」を用いるか意識に違いがあることがわかった。この項目に関しては、さらにデータ数を増やして文末の「である体」の使用とともに調査する必要がある。

3.2.4 学習者のレベル別の使用状況

ここでは、学習者のレベルと中止形の使用の相関関係をみてみる。まず、品詞別の使用頻度を表12に示す。

表12 品詞・レベル別使用頻度

	イ形容詞	ナ形容詞	述語名詞
上位群	64	34	28
中位群	60	24	32
下位群	61	16	14

カイ二乗検定の結果、5%水準で有意差があり、残差分析の結果、下位群によるイ形容詞の使用数が有意に多かった($\chi^2(4)=8.685$, $.05 < p < .10$)。ナ形容詞・述語名詞に関しては、中・上位群での使用数が増加することが窺えるが、データ数を増やして検証する必要がある。

次に、表 13 により品詞・形式・レベル別使用頻度を見てみる。

表 13 品詞・形式・レベル別使用頻度と使用率

	イ形容詞		ナ形容詞		述語名詞	
	クテ	ク	デ	デアリ	デ	デアリ
上位群	39 (57%)	29 (43%)	37 (100%)	0 (0%)	20 (69%)	9 (31%)
中位群	35 (58%)	25 (42%)	25 (100%)	0 (0%)	24 (73%)	9 (27%)
下位群	54 (89%)	7 (11%)	16 (100%)	0 (0%)	9 (64%)	5 (36%)

イ形容詞については、いずれのグループも「ク」より「クテ」の使用が多いが、上位群になるほど「ク」の使用率が高くなっている。カイ二乗検定でも有意差が認められた ($\chi^2(2)=17.841, p<.01$)。ナ形容詞については、いずれのグループも「デ」の使用のみであった。述語名詞については、「デアリ」が使用されているが、その比率にグループ間に大きな差はない。今回の調査結果では、イ形容詞においてのみ、形式の使い分けにレベル差との相関が確認された。

次に、関係的意味別の集計結果を表 14 (イ形容詞)、表 15 (ナ形容詞)、表 16 (述語名詞) に示す。

表 14 イ形容詞中止形の使用数・使用率と日本語レベル (関係的意味との相関)

	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解 説/評価	副状態	不明	合計
上位群	12 (19%)	9 (14%)	4 (6%)	31 (48%)	6 (9%)	2 (3%)	0 (0%)	64 (100%)
中位群	19 (32%)	7 (12%)	2 (3%)	25 (42%)	5 (8%)	2 (3%)	0 (0%)	60 (100%)
下位群	19 (31%)	3 (5%)	0 (0%)	32 (52%)	3 (5%)	1 (2%)	3 (5%)	61 (100%)

表 15 ナ形容詞中止形の使用数・使用率と日本語レベル（関係の意味との相関）

	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解説 /評価	副状態	不明	合計
上位群	19 (56%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (26%)	6 (18%)	0 (0%)	0 (0%)	34 (100%)
中位群	11 (46%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (38%)	3 (13%)	0 (0%)	1 (4%)	24 (100%)
下位群	6 (38%)	0 (0%)	0 (0%)	8 (50%)	1 (6%)	1 (6%)	0 (0%)	16 (100%)

表 16 名詞中止形の使用数・使用率と日本語レベル（関係の意味との相関）

	並列	前提	先行 事態	原因	注釈/解説 /評価	副状 態	不明	合計
上位群	1 (7%)	9 (32%)	0 (0%)	14 (50%)	3 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	28 (100%)
中位群	4 (13%)	4 (13%)	0 (0%)	19 (59%)	1 (3%)	2 (6%)	2 (6%)	32 (100%)
下位群	0 (0%)	5 (36%)	0 (0%)	8 (57%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (7%)	14 (100%)

先行研究で指摘されていた静的述語の中止形の特徴である「前提」「注釈・解説・評価」に注目して見てみると、「前提」はイ形容詞において、また「注釈・解説・評価」は、イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の全てにおいて、下位群に比べ上位群で使用する割合が増えている。文法項目としては明示的に取り上げられることのない「前提」「注釈・解説・評価」の用法が、上位群での使用数が増加し、母語話者の傾向と近くなる過程が窺えることは、学習者が読解素材などによるさまざまな日本語のインプットを通して、中止形使用の特徴を捉えていっていることが示唆されるのではないだろうか。今回の調査では、収集した用例数が少なく統計的なことは示せなかったため、引き続きデータを補充しさらに調査をする必要がある。

3.2.5 学習者に見られた不自然な用例について

ここまで、上級日本語学習者の静的述語中止形の使用について、日本語母語話者と概ね傾向が似ていることを観察してきた。しかし、データの中には、関係の意味が判断できない文、また、関係の意味は推測できるが日本語として不自然な用例が観察された。ここでは、ナ形容詞と述語名詞を中心に上げる。

まず次の(16)(17)は、関係的意味は「原因」だと推測できるが、後続句に働きかけの表現が来ているため不自然になっているものである。日本語母語話者にこのような例は見られなかった。

(16) 実は今書いている論文にはこの本が必要で、貸してくれないか？

(タスク 2_C010 中国語中位群)

(17) 上でも話したように、ピクニックに行くと食事として食べるもので、皆さんも今週末に出掛ける時ギンパブを作って行きましょう！

(タスク 9_K009 韓国語上位群)

また、次の例は、娘が「きれいであること」と「織姫という名であること」を並列させているが、連体修飾節内に中止形を用いたことで非文法的になっている。

(18) 天帝にはとってもきれいで、「織姫」という娘がいます。

(タスク 12_C010 中国語上位群)

また、次のような例もある。

(19) 二人は、別れの悲しみをたえず、毎日泣くことばかりでした。仕事をせず泣きっぱなしで (→泣きっぱなしで)、空国の王は、仕事を頑張ると、一年一回は二人を合わせてくれると約束しました。

(タスク 12_C026 中国語下位群)

先行句節の「(二人は) 泣きっぱなしで」は、後件に同主語の動作がくれば、「副状態」として解釈される。しかし、例文は主語が「王」に変わり、述語は「約束しました」となっている。「泣きっぱなし」と「約束する」ことが因果関係としてつながりにくいため、すぐに「原因」と解釈するのが難しくなっている。

このように、中止形を使って複数の事柄を違和感なく並べるのは、単純なことではない。完全な誤用とまではいかないまでも、不自然な用例について観察し、傾向を探ることは上級日本語学習者に対する文法教育を考えるうえで必要なことであると思われる。

4. 本章のまとめ

本章では、上級日本語学習者による静的述語、すなわちイ形容詞・ナ形容詞・述語名詞による中止形接続について、「YNU 書き言葉コーパス」を調査対象とし、日本語母語話者と比較しながら使用状況について分析を行った。調査の結果、以下のような点が明らかになった。

- ①イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の使用頻度は、日本語母語話者・学習者に関わらずイ形容詞が最も多く、ナ形容詞と述語名詞はほぼ同じ頻度で現れていた。よって、使用頻度については母語話者と学習者の傾向に大きな差はないといえる。
- ②どのような関係的意味で用いられているかについては、日本語母語話者は学習者に比べ、「前提」や「注釈・解説・評価」の使用の割合が高い傾向があった。学習者は「並列」、特に規定成分のものが多くことが観察された。ただしいずれの品詞についても、初級では文法項目として取り上げられてはいない「前提」や「注釈・解説・評価」の用例がある程度観察された。上級学習者は、これらの用法を適切に使用している。
- ③形式とタスクの関連については、読み手の違いとの相関性が見られた。イ形容詞の「ク」「クテ」の使い分けは、日本語母語話者・学習者ともに「特定・疎（目上）」の場合の「ク」の使用が多くなるが、母語話者は特にそれが顕著であり使い分けが徹底されている。また述語名詞の「デ」「デアリ」の使い分けについて、母語話者は、「不特定」のうち、「新聞への投稿文」というタスクにのみ使用されていたが、学習者は広範囲のタスクで使用しており、特に読み手が目上であるタスクでの使用が特徴的であった。
- ④学習者のレベルとの相関について、イ形容詞の形式の使い分けに関しては、上位群は下位群に比べ「ク」形式を多く用いるようになることが確認された。また関係意味別にみたところ、静的述語中止形の特徴ともいえる「前提」や「注釈・解説・評価」といった用法の割合が上位群になるほど増える傾向が見られた。

今回、特にナ形容詞と述語名詞については、コーパス中の使用数が限られていたことは否めない。「YNU 書き言葉コーパス」以外の学習者コーパスについても調査をし、統計的な有意差が確認できるかを追跡調査したいと考える。さらに、形式を選択する動機については、アンケートやインタビューによる調査も必要であると考え。さらに、初級学習者・中級学習者のデータについても収集し、静的述語の中止形の習得過程を見ることについても今後の課題としたい。

第7章

結 論

1. 本研究で明らかにしたこと

本研究では、日本語学習者が動詞・形容詞・述語名詞の中止形を接続表現として使用するときの特徴や傾向を明らかにすることを目的として、上級日本語学習者（韓国語母語話者・中国語母語話者）と日本語母語話者による作文コーパスを包括的に調査することにより、その結果について考察を行った。

第1章では、序論として研究の目的を述べた後、本研究に関わる現代日本語学・日本語教育学の先行研究、教科書や指導書などをできる限り幅広く視野に収め、明らかにされていることや課題を整理した。そして、動詞だけではなく、静的述語、すなわちイ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の中止形について、網羅的・包括的な調査研究が必要であることを確認した。そして調査対象として選んだ「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（金澤編 2014）の特徴と、研究方法について述べた。

第2・3章では、動詞の中止形を扱った。まず、第2章では、叙述文における関係的意味と使用される形式（第1中止形（連用形）・第2中止形（テ形））の相関について考察した。「関係的意味」とは、先行句節が後続句節の表す事柄に対してどのような意味を担っているかということであるが、そのタイプについては、従来、恣意的・直観的に取り出されることが多かった。これに対して、本研究では、津留崎（2003a）を参考にして、「時間的局在性」の観点から述語のタイプを「運動」「状態」「存在」「特性」「関係」「質」に分け、先行句節と後続句節の述語のタイプの組み合わせと、主体の異・同によって、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈》《解説》《評価》《副状態》といった関係的意味を規定する方法を採用した。調査の結果、《先行事態》《原因》《副状態》が動詞述語に特徴的であるということが日本語母語話者と学習者に共通して観察された。第1中止形と第2中止形の比率については、《前提》を除くと、日本語母語話者と学習者は似た傾向を示すことがわかった。《前提》においては日本語母語話者による「ある」の第1中止形「あり」の使用が顕著であったことが差に影響していた。学習者の誤用を観察したところ、《先行事態》《原因》において述語のタイプの組み合わせに問題があることがわかった。叙述以外のムード（「働きかけ」「疑問」「希望」「意志」「遂行（感謝・謝罪）」）については、学習者には、下位群・中位群に不自然な例が観察され、それは因果関係を表す場合（《原因》）であることが指摘できる。

第3章では、同じく動詞中止形を対象として、作文タスクと中止形の使用の相関について考察した。まず、確認すべきことは、第1中止形と第2中止形の比率が日本語母語話者と学習者では大きな違いがあるということである。日本語話者の第1中止形の使用頻度の割合は中止形使用全体の半数を超えているのに対し、学習者の場合は2～3割程度にとどまる。次にタスク別に形式の分布を調査した結果、読み手が疎遠（目上）であるか、親しい関係であるかという観点から、形式の選択によって重視される傾向が日本語母語話者に顕著であることがわかった。学習者にもその傾向は見られるが、母語話者ほど顕著ではない。また、読み手が不特定な場合、特に、レポートや新聞投稿といった書き手が改まった態度で書くタスクでは、第1中止形を使用しようとする意識は学習者にも窺えるものの、日本語母語話者の積極的な使用に比べると大きな差があることがわかった。学習者の中のレベル差に注目すると、上位群になるほど第1中止形の使用率が高くなり、日本語母語話者の使用の特徴と近づくことも明らかになった。

第4章では、動詞の否定中止形、すなわち「シナイデ」「シナクテ」「セズ」「セズニ」「ナク中止形」について調査し、分析を行った。その結果、全体としては、日本語母語話者は「ズ」の使用率が突出して高く、学習者は「ナクテ」の使用率が高いことがわかった。学習者の上位群では日本語母語話者同様に「セズ」の使用率が最も高くなっている一方、下位群における「セズ」の使用は1例にとどまり、「ナクテ」の使用が最も多くなっており、習熟度の差が明らかであった。関係的意味別の分析では、日本語母語話者と学習者の使用率に大きな違いはなかったが、学習者には形式を混同した不自然な用例が観察された。タスク別の分析では、日本語母語話者は読み手が「不特定」の場合に「セズ」の使用が多いのに対して、学習者の場合そのような傾向は見られなかった。また、読み手が「特定」の場合は、日本語母語話者と同様に、学習者においても親疎関係が使い分けに影響していた。なお、規範的ではないとされる「ナク中止形」については、日本語母語話者にも学習者にも使用が確認された。学習者については、上位群にやや多かった。

第5・6章では、静的述語の中止形を扱った。まず、第5章では、イ形容詞の中止形（第1中止形「ク」・第2中止形「クテ」）の使用を見た。まず、「ク」の使用率は、日本語母語話者では高く、学習者では全体としては低い、中・上位群は下位群に比べて有意に高い。次に、関係的意味別の分析では、日本語母語話者・学習者とも、多いものから《原因》《並列》《前提》の順になっていて全体的に違いは見られないが、形式の使い分けに関しては、《並列》《原因》の場合において、母語話者は「ク」が有意に多いのに対し、学習者は「クテ」が有意に多いという結果になった。タスク別の分析では、日本語母語話者・学習者ともに、「ク」の使用は「特定・親」よりも「特定・疎」の方が有意に多いが、日本語母語話者のみ、「特定・疎」での「クテ」の使用が際立って少ない。「不特定」の場合は、母語話者の「ク」の使用が有意に多い。「頼まれ型」のタスクでは、学習者にはクテの使用が有意に多いという結果になった。なお、学習者の使用例には、初級で指導項目とはなっていない《前提》《注釈・解説・評価」といった形容詞述語に特徴的なものも観察された。

第6章では、ナ形容詞・述語名詞について調査し、前章で扱ったイ形容詞も含めて静的述語の中止形全体について考察した。まず、イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の使用頻度は、日本語母語話者・学習者に関わらずイ形容詞が最も多く、ナ形容詞と述語名詞はほぼ同じ頻度で現れていた。関係的意味の分析では、日本語母語話者については、《原因》《並列》に次いで、イ形容詞と述語名詞では《前提》の使用が多く、ナ形容詞では《注釈・解説・評価》の使用が多い。《並列》が日本語母語話者より多いことを除けば、学習者も同じ傾向である。ナ形容詞・述語名詞でも、初級では文法項目として取り上げられてはいない《前提》や《注釈・解説・評価》の用例がある程度観察された。静的述語中止形の特徴ともいえるこれらの関係的意味での使用の割合は、上位群になるほど高くなる傾向が見られる。タスク別の分析では、読み手との相関関係が見られた。述語名詞の「デ」「デアリ」については、日本語母語話者では、「不特定」のうちの「新聞への投稿文」というタスクにのみ使用されていたが、学習者は広範囲のタスクで使用しており、特に読み手が目上であるタスクでの使用が特徴的であることがわかった。

結論として、上級日本語学習者による第1中止形、「セズ」、「ク」の使用は、日本語母語話者の使用に比べて少ないということがいたるところで確認された。この傾向は、先行研究でも指摘のあったことではあるが、本研究によって静的述語を含めた範囲で実証されたといえる。しかし、学習者が親疎関係や媒体の別により、第1中止形・第2中止形の使い分けを明確に意識していることも窺えた。関係的意味との相関については、日本語母語話者・学習者に大きな違いが見られなかったが、不自然な用例においては述語のタイプの組み合わせに問題があった。初級では指導項目となっていない《前提・注釈・解説》という静的述語の中止形に特徴的な例も使用が確認され、これは、読解や作文などの学習を通じて習得されているのではないかと考えられる。また、学習者の習熟レベルが上がるほど第1中止形の使用率が上がることがわかり、日本語の習熟度との関連が示された。

本研究は、日本語学習者と日本語母語話者の言語使用の傾向について比較しながら記述したものであるが、「学習者はできるだけ母語話者の使用に近づけるべきだ」と主張するものでは決してない。しかし、上級日本語学習者への教育において、非文とはいえないが不自然な文や、日本語母語話者には現れない文について、なぜそうなるのかを解明することは、追究すべき課題であると考ええる。その情報は教育者側、学習者側の双方にとって意味のあるものになるであろう。

最後に、日本語教育において、中止形をどのように指導すればよいかということに関して私見を述べる。まず初級においては、中止形に限らず、文型積み上げ式の教授法の場合、日本語学における成果が反映されやすく、ややもすれば全ての意味や用法を網羅的に挙げようとする傾向がある。実際のテキストでは多少、項目を取捨選択をしているとはいえ、学習者にとっての負担はまだ大きいと感じる。一方、文法をあまり明示せず、テキスト全体の中で紹介するにとどまる教科書では、文法をしっかりと体系的に学びたいという学習者には、説明不足を感じさせることとなる。よって、現場でいずれを選択するかは、学習者のニーズにより行われるべきであり、どこまでどのように指導するかを教える側が方針

を持つべきだと考える。中級から上級、超級に関しては、さらに技能に特化し、たとえば論文読解、論文作成など、アカデミックなスキルを学ぶ必要のある学習者に対しては、本研究で明らかにしたような日本語母語話と学習者の使用傾向の違いなどは、ひとつの資料として教育に生かせると思う。

2. 今後の課題

今後の課題としていくつかの点が挙げられる。まず、今回、特にナ形容詞と述語名詞、また動詞の否定中止形については、コーパス中の使用数が限られていたことは否めない。「YNU 書き言葉コーパス」以外の学習者コーパスでも調査を行い、統計的な結果を出せるようにしたいと考える。

さらに、今回扱えなかった「関係的意味」と「タスクの内容」との相関についても、特にレポート・新聞投稿・料理紹介・昔話といった、読み手が不特定な場合のジャンルの異なりについては、日本語母語話者の使用傾向を踏まえたうえで調査する必要がある。また、同一文中に第1中止形・第2中止形の両方が用いられている場合についても、学習者にはどのような傾向があるのかを見てみたいと考える。

学習者のレベルについて、本研究は上級日本語学習者による作文コーパスのみをデータとして行った。よって、上級レベルに到達するまでの初級から中級レベルにおける段階的な中止形の使用状況については今後、データを増やして明らかにしていかなければならない。そして、コーパス調査だけでは明らかにできない、学習者の母語によって異なる現象や、形式選択の動機などについては、質問紙調査やインタビュー調査などで補う必要がある。そのうえで、中止形をどのようにシラバスやライティング指導に組み込んでいくべきかを引き続き考察したいと考える。

本研究に使用した資料

1. 調査対象コーパス

「YNU 書き言葉コーパス」金澤裕之編 (2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房

2. 日本語教科書

松田浩志ほか (2003)『テーマ別 中級から学ぶ日本語 改訂版』研究社
スリーエーネットワーク編著 (2012)『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
スリーエーネットワーク編著 (2013)『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
西口光一 (2012)『NEJ テーマで学ぶ基礎日本語』くろしお出版
西口光一 (2019)『NIJ テーマで学ぶ中級日本語』くろしお出版
友松悦子 (2008)『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク

参考文献

有田節子 (2017)「日本語の条件文分類と認識的条件文の位置づけ」『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷』くろしお出版, pp. 3-32.
秋口まどか・鄭賢熙 (2002)「初級・中級の日本語学習者の文章表現について—中国人留学生・韓国人留学生の事例—」『留学生センター紀要』5, 新潟大学留学生センター, pp. 51-59
庵功雄・宮部真由美 (2017)「正確で自然な複文の組み立て方」『わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版, pp. 57-73,
庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク)
石川慎一郎 (2012)『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房
市川保子 (1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社
市川保子 (2007)『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
市川保編著 (2010)『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味と用法』スリーエーネットワーク
市川保子 (2018)『日本語類義表現と使い方のポイント』スリーエーネットワーク
今井新悟・伊藤秀明編著 (2019)『日本語の教科書が目指すもの』凡人社
大鹿薫久 (1985)「「て」接続考」『叙説』12, 奈良女子大学, pp. 219-228.

- 奥田靖雄 (1996) 「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2-22, むぎ書房, pp. 2-14. (『奥田靖雄著作集 02 言語学編 (2)』むぎ書房 2015 所収)
- 生越直樹 (1987) 「日本語の接続助詞「て」と朝鮮語の連結語尾 {a} {ko}」『日本語教育』62 号, 日本語教育学会, pp. 91-104.
- 加藤陽子 (1995) 「テ形節分類の一試案 従属度を基準として」『世界の日本語教育 5』国際交流基金, pp. 209-224.
- 金澤裕之 (1997) 「助動詞「ない」の連用中止法について」『日本語科学』1, 国立国語研究所, 105-113.
- 金澤裕之 (2008) 「なく中止形」『留学生の日本語は未来の日本語』ひつじ書房, pp. 14-70.
- 金澤裕之 (2013) 「新聞データ (朝日『聞蔵』) に見る「なく中止形」の動向」相澤政夫編『現代日本語の動態研究』おうふう, pp. 90-103.
- 金澤裕之編 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
- 金澤裕之 (2017) 「大学生における「なく中止形」—アンケートによる 20 年間の動向」『横浜国大国語研究』35, 横浜国立大学国語研究, pp. 172-179.
- 北川千里 (1976) 「「なくて」と「ないで」」『日本語教育』第 29 号, pp. 57-67. 木下謙朗 (2009) 「書き言葉における形容詞の使用状況—学習者と母語話者の比較—」『明海日本語』第 14 号, 明海大学日本語学会, pp. 37-48.
- 金 蘭美・金庭久美子 (2016) 「書き言葉における日本語学習者の文体の使用状況:『YNU 書き言葉コーパス』を用いて」『ときわの杜論叢』第 3 号, 横浜国立大学国際戦略推進機構, pp. 47-65.
- 工藤真由美 (2001) 「現象と本質——方言の文法と標準語の文法——」『日本語文法学会第 2 回大会発表論文集』(『日本語文法』2-2, くろしお出版, pp. 46-61, 2002 所収)
- 工藤真由美 (2012) 「時間的限定性という観点が提起するもの」『属性叙述の世界』くろしお出版, pp. 143-17.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 言語学研究会 (1989 a) 「なかどめ—動詞の第二なかどめの場合—」『ことばの科学 3』むぎ書房, pp. 11-47.
- 言語学研究会 (1989 b) 「なかどめ—動詞の第一なかどめの場合—」『ことばの科学 4』むぎ書房, pp. 163-179.
- 小林典子 (2003) 「「なく (て)」と「ないで」と「ず (に)」について—言語研究と日本語研究—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 18 号, pp. 17-31.

- 呉 揚 (2017)『日本語動詞の時間的限定性とアスペクト・テンス形式—運動を表さない動詞を中心に—』岡山大学大学院社会科学部研究科博士学位論文 (未公開)
- サイティン (2019)「継起を表す「て」と「と」の使用状況について」『日本語文法』19 巻 1 号, pp. 54-62.
- 佐藤里美 (1997)「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞の場合—」『ことばの科学』8』むぎ書房, pp. 151-212.
- 塩入すみ (2012)「中国人母語話者による日本語従属節選択の誤用傾向—『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース』を用いて—」『海外事情研究』第 39 巻第 2 号, pp. 21-36.
- 白川博之 (1990)「独立性の高いテ形・連用形」『広島大学教育学部紀要』2-38, pp. 235-244.
- 白川博之 (2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 鈴木重幸 (1978)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木重行 (1989)「動詞の活用形・活用表をめぐって」『ことばの科学』2, むぎ書房
- 全 成龍 (1996)「現代日本語動詞の肯定・否定の中止形—韓国語との対照研究を土台として—」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂, pp. 101-109.
- 高橋太郎 (1960)「文の途中での切り方」岩淵悦太郎編著『第三版 悪文』日本評論社, pp. 95-115.
- 高橋太郎 (1983)「構造と機能と意味—動詞の中止形 (～シテ) とその転成をめぐって」『日本語学』2-12, 明治書院, pp. 13-21.
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齊美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 (2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 田代ひとみ (1995)「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85 号, pp. 25-37.
- 田中寛 (1990)「動詞連用形の構文・語彙的な機能—日本語教育の立場から—」『言語と文化』第 3 号, 文教大学, pp. 35-80.
- 谷口秀治 (2006)「動詞連用形の用法について」『大分大学留学生センター紀要』第 3 号, pp. 57-66.
- 張 麟声 (1998)「原因・理由を表す「して」の使用実態について—「ので」との比較を通じて」『日本語教育』96 号, pp. 121-131.
- 寺村秀夫 (1981)『日本語教育指導参考書 5 日本語の文法 (下)』国立国語研究所
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1990)『外国人学習者の日本語誤用例集』大阪大学 (データベース版:国立国語研究所 2011 <https://db4.ninjal.ac.jp/teramuradb/>)
- 寺村秀夫 (1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 津留崎由紀子 (1999)「名詞述語の中止形デの機能」『人間文化論叢』第 2 巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, pp. 109-119.

- 津留崎由紀子 (2000) 「ナ形容詞のデ中止形の構文的機能」『人間文化論叢』第3巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, pp. 181-191.
- 津留崎由紀子 (2003a) 「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学』13, 国立国語研究所, pp. 7-32.
- 津留崎由紀子 (2003b) 「日本語教育における中止形の指導と日本語研究」『国文学 解釈と鑑賞』第68巻7号, 至文堂, pp. 144-152.
- 津留崎由紀子 (2004) 「〈前提〉を表す述語名詞および形容詞の中止形」『千葉大学留学生紀要』第10号, pp. 41-61.
- 友松悦子 (2008) 『中級日本語学習者対象 小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 中野はるみ (1997) 「シテ形接続と連用形接続の使用の実際—中級日本語学習者指導のために—」『留学生教育』第2号, 留学生教育学会, pp. 105-119.
- 中野はるみ (1997) 「「シテ形接続」をめぐって—付帯状態のシテ節—」『別府大学紀要』第39号, 67-86.
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』ひつじ書房
- 中村純平・伝康晴 (2008) 「言語処理学会 第14回年次大会 発表論文集」pp. 73-76.
- 成田徹男 (1983) 「動詞「て」形の副詞的用法—「様態動詞」を中心に」『副用語の研究』明治書院, pp. 137-158.
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形式をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版, pp. 87-126.
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法3』第7部肯否 第2章否定の形式, くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6』第11部複文, くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法7』第12部談話, くろしお出版
- 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版 日本語教育事典』大修館書店
- 野田尚史・迫田久美子編 (2019) 『学習者コーパスと日本語教育』くろしお出版
- 橋本直幸 (2015) 「書き言葉コーパスから見た文法シラバス」『データに基づく文法シラバス』くろしお出版, pp. 67-86.
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 林雅子 (2005) 「動詞テ形と連用形の使用に関する計量的調査研究—中級以上の作文・小論文指導のために—」『龍谷大学留学生センター研究年報』第14号, pp. 15-23.
- 日高水穂 (1995) 「ナイデとナクテとズニーテ形の用法を持つ動詞の否定形式—」『日本類義表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版, pp. 471-480.

- 船木（橋本）礼子（2013）「動詞の否定中止形ナク」の使用状況と成立背景『神女大國文』
24, 神戸女子大学国文学会, pp. 157-137（横 pp. 9-29）.
- 前川喜久雄監修・砂川有里子編（2016）『コーパスと日本語教育』朝倉書店
- 前田直子（2009）『日本語の複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 益岡隆志（1997）「並列節におけるナクテとナイデ」『複文』くろしお出版, pp. 67-75.
- 益岡隆志（2003）『三上文法から寺村文法へ—日本記述文法の世界—』くろしお出版
- 益岡隆志（2014）「日本語の中立接続とテ形接続の競合と共存」『日本語複文構文の研究』
ひつじ書房, pp. 521-542,
- 三上章（1953）『現代語法序説』くろしお出版
- 三上章（1963）『日本語の構文』くろしお出版
- 三上章（2002）『構文の研究』くろしお出版（東洋大学博士論文 1959）
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男（1993）『現代日本語の輪郭』大修館書店
- 水嶋博志・内田聖也・北村達也・川村よし子（2011）「学習者にとって難解な構文の自動
検出」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 18 No. 1, pp. 64-65.
- 峯布由紀（2011）「言語処理の発達の観点からみたナイデとナクテの習得過程」第7回日
本語実用言語学国際会議（ICPLJ7）資料
- 宮崎聡子（2015）「日本語母語話者及び日本語学習者による動詞中止形の使用状況—「YNU
書き言葉コーパス」の調査を通じて—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』
第39号, pp. 179-194.
- 宮崎聡子（2016）「上級日本語学習者による形容詞中止形の使用状況—「YNU 書き言葉コー
パス」の調査を通じて—」『日本語／日本語教育研究』7, ココ出版, pp. 109-124.
- 村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 村松由紀子（2018）「テ形接続と連用形接続の差異に関する一考察—日本語教育の観点か
ら—」『豊橋科学技術大学人文科学紀要』40, pp. 19-27.
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
- 保田祥・柏野和佳子・立花祥子・丸山岳彦（2012）「「語りかけ性」を有すると判断され
る書きことばの表現」『第2回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』国立国語
研究所, pp. 43-50.
- 吉田妙子（1994）「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析—「原因・理由」の
用法の誤用を焦点として」『日本語教育』84号, pp. 92-103.
- 吉田妙子（1996）「言い換え前触れのテ形について」『日本語教育』91号, pp. 49-60.
- 吉永 尚（1997）「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」『日本語教育』95号, pp. 73-84.
- 吉永 尚（2006）「テ形接続に見られる誤用についての考察」『園田学園女子大学論文集』

第 40 号, pp. 157-163.

李 在鎬・石川慎一郎・砂川有里子 (2018)『新・日本語教育のためのコーパス調査入門』くろしお出版

李 在鎬 (2017)「学習者作文を科学する」『文章を科学する』ひつじ書房, pp. 140-157.

劉 怡伶 (2012)「日本語における動作主認識の副詞的成分の特徴―「＊映画を怖く見ている」とはなぜ言えないのか―」『日本語教育』153 号, 日本語教育学会, pp. 81-95.

渡邊亜子 (1996)『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版